えびの市文化財調査報告書第6集

が、 田 原 遺 跡 小木原遺跡群蕨地区 (A・B地区)

― 上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 I ―

1990.3

宮崎県えびの市教育委員会

えびの市は、日向・肥後・薩摩の分岐点にあたり、古来より多様な文化・文物が混和しながらも、独特の文化と伝統を持った地域であります。北には九州山脈、南には霧島連山を有し、用水には事欠かないことから、低・中位段丘には余す所無く遺跡が密集しており埋蔵文化財の宝庫とも言えるところであります。

本市教育委員会では、昭和60年度より上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査を実施してまいりましたが、本市の古代史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

本書は、昭和61年度から昭和62年度にかけて調査した永田原遺跡、小木原遺跡群蕨地区およびロノ坪遺跡についてまとめた報告書であります。

本書が学術資料としてだけでなく、社会教育・学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

なお、発掘調査に当たってご指導、ご教示いただいた諸先生方、県文化課、ならびに調査に対してご理解、ご協力いただいた工事関係者や地元の方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

えびの市教育委員会 教育長 平 田 敏 正

例 言

- 1. 本報告書は上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う永田原遺跡、小木原遺跡群蕨地区、ロノ坪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 事業は宮崎県西諸県郡農林振興局の委託を受けて昭和61年度、62年度にえびの市教育委員会が実施した。
- 3. 本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

- 4. 本報告書の作成にあたり、以下の方々から御助言、御指導をいただいた。記して感謝を表する。
- 5. 別編「自然科学的分析」『小木原遺跡出土須恵器の胎土分析』は三辻利一奈良教育大学 教授に、『えびの市小木原遺跡群蕨地区土壌調査』は有村玄洋県総合農業試験場化学部土 壌保全科特別研究員兼科長、野中仙三郎特別研究員に依頼した結果の報告である。
- 6. 土層注記の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」による。

総目次

はじめに	• 1
遺跡の位置と歴史的環境	• 5
永田原遺跡	• 9
小木原遺跡群蕨地区	117
口ノ坪遺跡	371
別編 小木原遺跡出土須恵器の胎土分析	385
えびの市小木原遺跡蕨地区土壌調査	390

はじめに

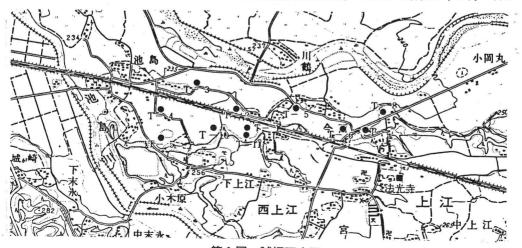
1. 調査の経緯

上江・池島地区県営圃場整備事業は、昭和59年度から実施され総事業面積180haのうち、昭和60年度までに約30haが整備された。

えびの市教育委員会では昭和60年度に市内全域の遺跡詳細分布調査を実施し約180か所で 遺跡を確認した。事業区内でもほぼ全域が小木原地下式横穴墓群を含む原田・上江遺跡、永 田原遺跡、口ノ坪遺跡の分布内に含まれていたため市教育委員会では当該事業区内11か所の 試堀調査を行ったところ昭和61年度事業区内の2か所(永田原遺跡・ロノ坪遺跡)から遺構・ 遺物の分布を確認した。

そこで、2遺跡について西諸県農林振興局、上江土地改良区、県文化課、及び市教育委員会の四者で埋蔵文化財の保護について協議を行った。その結果、事業施工上現状保存が困難な部分について記録保存の措置をとることとなった。調査は市教育委員会が主体となり、県教育委員会に調査員の派遣を依頼して実施することとなり、永田原遺跡については谷口武範(県総合博物館埋蔵文化財センター主事)の担当で昭和61年10月28日から翌年1月31日まで発掘調査が行われた。なお、口ノ坪遺跡については諸般の事情で次年度事業となった。

昭和62年度の事業区は小木原地下式横穴墓郡内に位置し、周辺に地下式横穴墓が数多く分布していることから濃密な遺構の分布が考えられた。そのため、前年度からその取り扱いについて四者で協議をおこなったが、事業施工上現状保存が困難な部分については記録保存の措置をとることとなり、永友良典(県教育庁文化課主任主事)の担当で昭和62年9月7日か



第1図 試掘調査図

ら翌年1月29日まで小木原遺跡群・蕨地区の発掘調査を実施した。また、前年度に事業が行われなかったロノ坪遺跡については62年度事業となったため、寺師雄二(嘱託・現山田町社会教育課主事)の担当で昭和63年2月23日から3月16日まで実施した。

なお、昭和63年度事業区では前年度に試掘調査を実施し、63年度に小木原遺跡群内の蕨・ 久見泊・地主原地区の調査をおこなっている。

2.調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

調査主体 えびの市教育委員会

教育長

平田敏正

社会教育課長 萩原利典

課長補佐

上別府文夫

社会教育係長 浜松政弘

社会教育主事 吉留伸也(昭和61年度)

(文化財担当) 白川良一(昭和62年度)

臨時職員

吉松啓子

調査員

谷口武範(県総合博物館埋蔵文化財センター主事・永田原遺跡担当)

永友良典(県教育庁文化課主任主事・小木原遺跡群蕨地区担当)

寺師雄二(現・山田町社会教育課主事・口ノ坪遺跡担当)

特別調査員

甲元真之(熊本大学教授)

三辻利一(奈良教育大学教授)

乙益重隆 (国学院大学教授)

上村俊雄 (鹿児島大学教授)

西健一郎 (九州大学助手)

有村玄洋(県総合農業試験場特別研究員)

なお、永田原遺跡出土の須惠器の胎土分析を三辻利一氏に、小木原遺跡群蕨地区の土壌分析と土壙墓内のリン分析を有村玄洋氏にそれぞれ依頼した。

また、調査にあたっては、木崎原操、竹ノ内実、吉田修身の諸氏から御指導、御助言をいただいた。さらに、亀園耕作氏をはじめとする今西・池島両地区の方々には多大な御援助を賜った。



第2図 調査遺跡位置図

遺跡の位置と歴史的環境

永田原遺跡は、えびの市大字今西字永田原に、小木原遺跡群蕨地区は、大字上江字蔟に、 ロノ坪遺跡は、大字今西字ロノ坪に所在する。

えびの市は宮崎県の西南端に位置し、九州山脈と霧島連山に囲繞された狭長な盆地(加久藤盆地)である。加久藤盆地は、第三紀中頃以後、内陸凹地に湖成層が堆積、第三紀後半から第四紀初に火山砕屑物が堆積したのち、第四紀後半以後泥層と入戸火砕流(シラス)が堆積した。のち、下刻が繰り返され、段丘面が形成されて今日に至る。段丘面には火山灰が堆積しているために水田耕作には適さず、肥沃に富んだ氾濫原が可耕地となっていたと思われる。山麓から鉄山川、池島川、白鳥川、長江川など大小20の支流が川内川に合流し、盆地中・央を西へ流れる。

本書掲載の3遺跡は、川内川と池島川に狭まれた低位段丘の西端に位置する。沖積面との 比高は永田原遺跡で約7 m、小木原遺跡群で約20m、口ノ坪遺跡で約10mをはかり、標高はそ れぞれ238m、250m、240m 前後である。小木原遺跡群は、地下式横穴墓の分布範囲でもあるが、 弥生時代後期や中世〜近世の遺構も含んでいることから、本書では遺跡群として報告する。

旧石器時代

遺構・遺物は発見されていない。

縄文時代

早期の遺跡としては、押型文土器の出土した前畑遺跡、灰塚遺跡、小木原遺跡群久見迫B地区などがあげられ、久見迫B地区では柱穴状遺構が検出された。前期の遺跡としては、曽畑式、轟式土器の出土した前畑遺跡および灰塚遺跡があげられる。中期の遺跡は未発見である。後期の遺跡としては前畑遺跡、灰塚遺跡などがあげられ、当該期に属する遺跡が多い。晩期の遺跡としては、黒色磨研土器が出土した灰塚遺跡があげられる。

表採資料としては、村ノ前遺跡や天神免遺跡、灰塚遺跡、広畑遺跡、大迫原遺跡などで石皿が、村ノ前遺跡と天宮遺跡で石錘が、石鏃・石斧類は市内各所で採集されている。剝片石 (まの) まっま 器の原石は、大口市日末および人吉市桑ノ木水流産の黒曜石が主流で、チャートがこれに次いで多い。

弥生時代

前期の遺構・遺物は発見されていない。中期の遺跡としては、新田遺跡と小木原遺跡群久 見迫 B 地区があげられ、甕形土器が各1点発見されている。後期の遺跡としては、免田式土

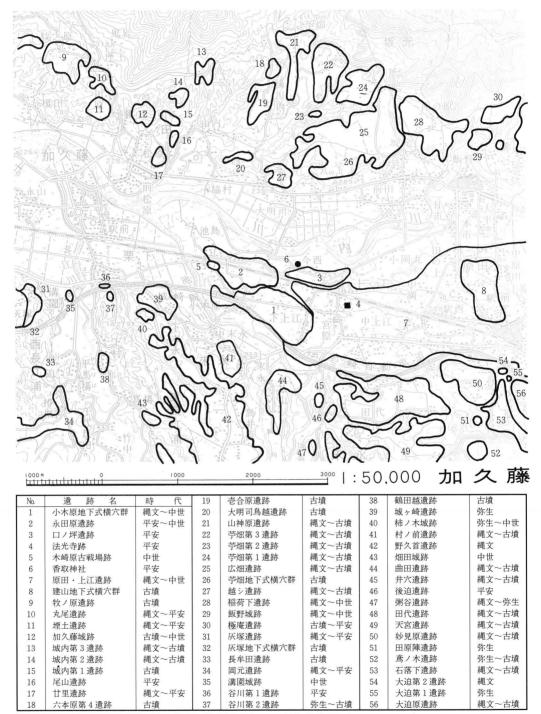


図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図(1:50,000)

器の出土した灰塚遺跡と小木原遺跡群久見迫B地区があげられる。生活遺構としては、広畑 遺跡で竪穴式住居1軒を検出しているのみである。

生産遺構は検出されていないが、石包丁が中棚遺跡、田原陣遺跡、小木原遺跡群蕨地区、 法光寺跡、天神免遺跡、さらに苧畑遺跡で各1点、灰塚遺跡で2点発見されている。

古墳時代

生活遺構は調査されていないが、南九州独特の墓制が営まれている。

地下式横穴墓は島内、灰塚、小木原、苧畑、建山そして杉水流の6ヶ所に群在し、各々特微がみられる。当墳墓はすべて平入り長方形ないし楕円形を呈するが、灰塚では竪坑上部閉塞、小木原のうち馬頭・久見迫支群では羨道閉塞(後者はアカホヤ塊で閉塞)、小木原地区と蕨地区、島内、苧畑では共存している。これらは全て、加久藤盆地を見下すことのできる洪積世の砂礫段丘上に立地している。明治38年には島内で、「径15間、高さ4尺」の墳丘を有する地下式横穴墓が、大正2年には建山で、「高さ3m、饅頭形」の墳丘を有するもの2墓が調査されており、早くから当該墳墓の存在は知られていた。昭和44年を中心として、島内と小木原では、段丘下部に堆積している礫を建築材料とする目的で、重機による掘削を行ない。幾多の地下式横穴墓が削失した。小木原については、地元在住の木崎原操氏が精力的に調査、立会いをされ、今日の基礎資料となっている。

小木原1号、杉原(=島内)、杉原41-1号から甲冑が、小木原A号墳から小型仿製鏡と陶邑産の須恵器が出土している。築造年代は6世紀代に集中し、7世紀に降るものは無い。

地下式板石積石室墓は、建山を除く5ヶ所と大迫原遺跡に群在し、4~5世紀代に営まれている。

柊野第1遺跡と大迫原遺跡では相当量の土師器や須恵器が採集されており、これら墳墓の 造営者達の集落が想定される。

歴史時代

奈良時代の遺跡としては、蔵骨器(須恵器)2点が発見された天神免遺跡(字蓮花寺)が、平安時代の遺跡としては、10世紀前半の土師器や布目瓦が出土した法光寺跡が知られているにすぎない。市内には、延喜式の十六駅のひとつである真祈駅が設置されているが、その所在は不明であり、関連資料も皆無である。

えびの市は島津庄真幸院に組み込まれていたが、この領地をめぐって島津氏と伊東氏による激戦が繰り返され、木崎原や三角田の古戦場、首塚、六地蔵塔などが往時を偲ばせている。飯野城・加久藤をはじめとする20有余の中世の山城は、氾濫原に突出した段丘の先端部に集

中している。

飯野城周辺には、漢詩を作る時の辞書『三重韻』や教科書『碧厳録』を印刷・出版した長善寺、愛染院、昌極庵といった多く寺院があったが、廃仏毀釈で廃寺となっている。

島津氏支配の後は門割制度が設けられ、領地・領民支配が強化されていった。同時に、新田開発や整備も行なわれていったようである。

広畑遺跡の北東部には、16世紀後半に島津氏が開山したと伝えられる鉄山があり、砂鉄を原料とした製鉄が明治期まで営まれていたようであるが、文献・絵図等の資料も無く、実体は不明である。また、市の北西部、西之野において、1856年に鉄鉱石が発見され、島津斉彬の命によって短期間ではあったものの、原料採掘が行なわれた。のち1897年、地元民によって10年余、精錬段階まで営まれていた。

地下式横穴墓から出土する鉄器の量を考えると、上記2ヶ所の製鉄の開始年代の解明には 非常に興味がもたれ、今後の調査に期待される。

このほか、大字二八の下において、昭和54年3月、圃場整備事業に伴って塚(仕置塚)を削平する際、一字一石経が掘り出され、若干数が現存している。共伴遺物は無かった様子である。

(註)

- (1) えびの市教育委員会『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』 1985
- (2) 石川恒太郎・北郷泰道「前畑遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告(3)』 1979
- (3) 石川恒太郎「灰塚遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)』 1973
- (4) えびの市教育委員会『小木原遺跡群・蕨・久見迫・地主原地区』 1989
- (5) (1)参照
- (6) 宮崎県教育委員会「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第10集 1965 宮崎県教育委員会「えびの町真幸・島ノ内地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第12集 1967 宮崎県教育委員会「えびの町平松の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第14集 1969 宮崎県教育委員会「えびの市島ノ内地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 1971 宮崎県教育委員会「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 1986
- (7) 宮崎県教育委員会「久見迫、馬頭遺跡」「小木原遺跡」「小木原古墳、地下式A号墳」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(1) 1972 木崎原操「小木原古墳群調査報告第2報~第7報」『えびの』第2号~第8号 1971~1975
- (8) 飯野町郷土史編纂室『飯野町郷土史』 1966
- (9) 宮崎県総合博物館『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古·歴史資料編』 1983
- (10) (1)参照

水田原遺跡

例 言

1. 永田原遺跡で使用した略記号は次のとおりである。

SA……竪穴住居跡 SB……掘立柱建物跡

SE……溝状遺構

2. 土器の色調については「新版 標準土色帖」に準拠した。

本文目次

1. 調質	公経週と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
Ⅱ. 遺跡		14
Ⅲ. 調査	近 の成果	20
1. 訓	- To the state of the state o	20
2. 剪	r生時代の遺構と遺物 ·····	20
3. 歴	を史時代の遺構と遺物 ······	26
(1)	掘立柱建物の分布	26
(2)	溝状遺構	38
(3)	出土遺物	41
N. まと	zø	76
	挿 図 目 次	
第1図	周辺地形図	15
第2図	遺構分布図及び調査区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16
第3図	遺構分布図	18
第4図	土層断面図(1)	-22
第5図	七層断面図(2)	23
第6図	1 号住居跡実測図	24
第7図	出土遺物実測図	25
第8図	遺構分布図	26
第9図	S B 1	29
第10図	S B 2 · S B 10 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	30
第11図	S B 3	31
第12図	S B 4	32
第13図	S B 5	33
第14図	S B 6	34
第15図	S B 7	35
第16図	S B 8	36
第17図	S B 9	37
第18図	出土遺物分布状況 43~	-44
第19図	土師器実測図(1)	46
第20図	土師器実測図(2)	47
第21図	土師器実測図(3)	48
第22図	土師器実測図(4)	49
第23図	土師器実測図(5)	50
第24図	出土遺物分布図(土師器)	-52
第25図	須恵器実測図(1)	55
第26図	須恵器実測図(2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	56
第27図	須恵器実測図(3)	57

第28図	出土遺物分布状況(須恵器)	60
第29図	須恵器・土師質土器実測図	61
第30図	布痕土器実測図	62
第31図	出土遺物分布図(布痕土器)	64
第32図	紡錘車・土錘実測図	65
第33図	磁器実測図(1)	67
第34図	陶磁器実測図(2)	68
第35図	陶器実測図(3)	69
第36図	陶器実測図(4)	70
第37図	陶器実測図(5)	71
第38図	陶器実測図(6)	72
第39図	陶器実測図(7)	73
	図版目次	
図版 1	[長 / 井 // 1 1 1 1 1 1 1 1 1 	107
図版 2		108
図版 3	土師器(甕・坏)	109
図版 4	上即位(小、同口口200万/800万/	110
図版 5	没心身上呼吸,坐自上面,你还干,上生,然心能,上心大工能	111
図版 6		112
図版 7	PHI HAA 1001	113
図版 8	PHI fact	114
図版 9	P四) 台合	115
図版10	陶器・弥生土器・抉入片刃石斧	116
	表目次	
土器観察	察表(土師器甕) ······ 79~	-81
土器観響	察表(土師器环・高台付埦・須恵器坏・墨書土器・土師質土器) ······ 82~	-89
土器観察	察表(布痕土器) ······ 90~	-93
	察表(陶磁器)	
十 巺 組 %		101

I. 調査の経過と概要

永田原遺跡は、昭和60年度に行われたえびの市内全域の遺跡詳細分布調査によって確認されていたが昭和59年度から継続して行われていた上江・池島地区県営圃場整備事業の昭和61年度事業区内に遺跡が含まれたため、西諸県農林振興局、上江土地改良区、県文化課及び市教育委員会の四者で埋蔵文化財の保護について協議を行い、事業施工上現状保存が困難な部分について記録保存の措置をとることになった。発掘調査はえびの市教育委員会が主体となり、昭和61年10月28日から翌年1月31日まで実施した。

調査区周辺は、以前から土師器や須恵器の破片が表採されていたことや立地面が 300 基を 越える小木原地下式横穴基群の下の段丘にあたることなどから古墳時代の集落が期待されて いた。しかし、試掘調査の結果、包含層が0~40cmと薄くその下すぐに砂質層が露出し、す でに遺構については削平されているかあるいは存在しないのではないかと想像された。そこ で、包含層が残存している箇所を中心に10mグリッドを設定し重機による表土剝ぎを行った。 表土剝ぎ後、遺構、遺物の検出に努めたが包含層中での遺構検出は困難であったため黄褐色 砂層まで掘り下げて確認した。その結果、包含層の無い箇所にも砂質層に掘り込んだ溝状遺 構や柱穴などを検出し、最終的には溝状遺構17条、掘立柱建物跡10棟、弥生時代後期の住居 跡1軒と多数の柱穴を検出した。遺構の大部分は発掘区の東側に集中している。溝状遺構は、 大きくは南北に延びるものと東西に延びるもの、「 ̄¬」字状に区画するものなど凹つに分 類できる。溝の役割として掘立柱建物跡との関係は今回の調査では指摘できなかった。また、 溝の埋土を観察しても水が流れたような状況も認められないことから、区画として用途が 考えられる。溝状遺構の年代は、相対的な前後関係は捉えられるが、時期決定できるものは 少ない。その中でSE4は暗渠状の集石の中から多量の薩摩焼や肥前系磁器類が出土し、お およそ18世紀代に位置付けできよう。掘立柱建物跡の分布は大きく二群に分かれて集中する。 第1群は発掘区の東端部に建てられた建物群で、SB4~10の7棟から構成される。建物の 主軸はSB4・5が南北方向で、それ以外は東西方向を示している。建物の規模としてはS B6の1間×3間の身舎に東・西・北の庇を設けたものを最大として、1間×3間の建物1 棟、1間×4間の建物1棟、2間×2間の建物1棟、2間×3間の建物1棟、2間×2間の 建物の北・東に庇を有するもの1棟からなる。第2群は発掘区のほぼ中央やや南寄りに位置 し、SB1~3の3棟から構成される。第2群においても主軸は東西方向が主体で南北方向 はSB1の1棟だけである。建物としては、1間×3間の建物1棟、2間×2間の建物2棟 からなる。柱穴などからの出土遺物は少なく、建物の時期を決定するまでには至らなかった。 しかし、包含層からの出土遺物の分布は柱穴群や掘立柱建物跡の分布状況とほぼ一致し、第 1群とした掘立柱建物群の区域に平安時代の遺物が特に集中し、何棟かは平安時代に含まれ る建物と考えられる。それ以外は、薩摩焼や磁器類の時期、つまり近世に入ると想定される。 発掘区の中央から西に延びる凹地は、遺構としての立ち上がりや土の堆積状況から自然のも のと考えられ、遺構検出面からの深さが約60cm、幅約8mで発掘区中央部で次第に浅くな り消滅する。西側の凹地端は確認することが出来なかった。出土遺物には平安時代のものが 多く、東端部で集中して出土した遺物のレベルよりやや低いことから、当時まだ埋没の途中 に遺物が流れ込んだと想定される。

歴史時代の遺物は、大きく近世と平安時代に分けることができる。前者には薩摩焼の碗、茶家、摺鉢、甕や肥前系磁器などがある。後者は多様で土師器、須恵器、布痕土器、黒色土器、墨書土器、紡錘車、土錘などが出土し、その多くは包含層から検出されたものである。

弥生時代後期の竪穴住居跡は、いわゆる花弁状住居で発掘区の東端隅に検出された。東側には明瞭な花弁部が残るが西側については最近の耕作や攪乱によって、花弁を有するかどうか判断できない。出土遺物も甕や壺など小量であった。また、住居跡周辺から抉入り片刃石斧が1点出土している。遺構・遺物の出土状況からすると弥生時代の生活の場は東に広がっていた可能性が高い。

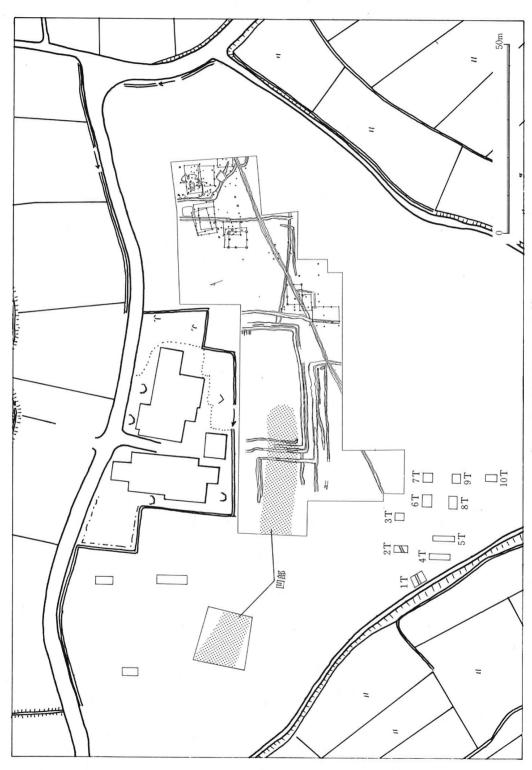
Ⅱ.遺跡の環境

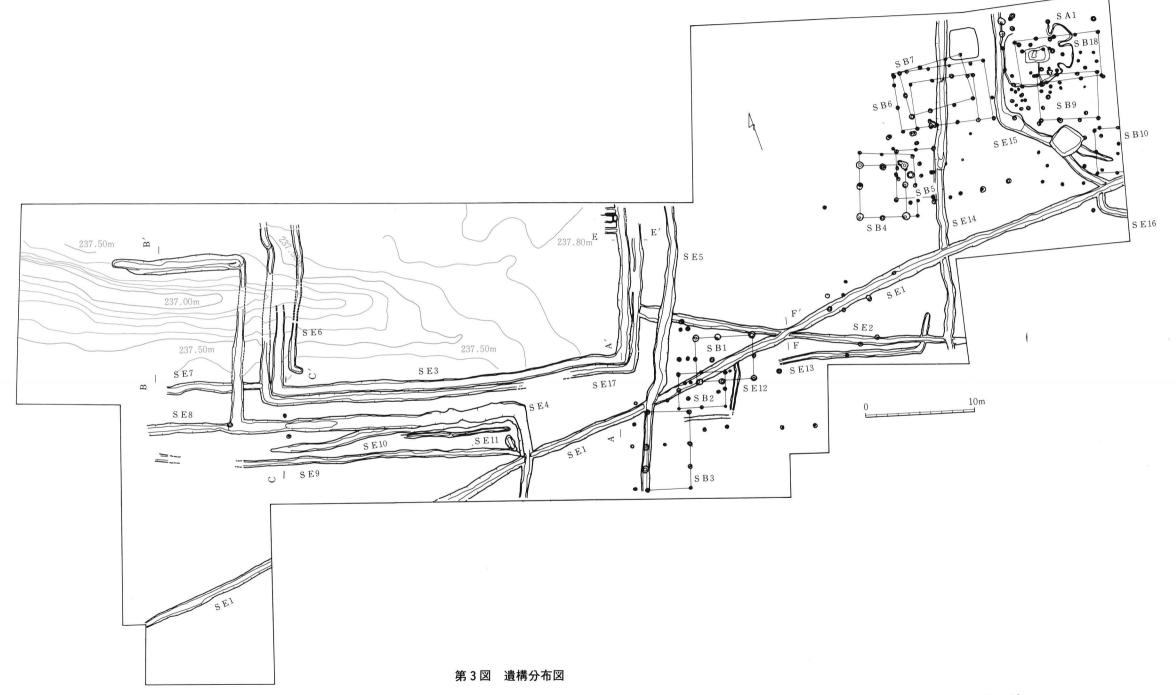
永田原遺跡は、えびの市大字今西字永田原にある。

永田原遺跡は、川内川とその支流である池島川に挟まれた標高約240mの段丘上に位置する。今西地区でも西端にあたり池島地区に近い。一帯は川内川と池島川の合流地点で「水利ハ便ナリ水害ハ極テ多シ」(池島村)、「水利ハ便ナリ水損ハ少シクコレアリ」(今西村)とあるように洪水の被害が多かったようで、川内川がまきおこした洪水の被害は現在までに約200回にも及んでいる。

遺跡は低位段丘面に立地し、同じ段丘面には先土器時代から古墳時代までの遺構、遺物は今回の調査まで発見されていなかった。1段高い標高約250mの段丘には小木原地下式横穴墓群が築造されており、数回にわたって発堀調査が行なわれている。低位段丘面に先人の跡をみるのは、ロノ坪遺跡、法光寺跡など平安時代になってからである。ロノ坪遺跡では、柱穴や土師器、須恵器などが出土している。法光寺跡は、「宗派及ヒ癈毀ノ年月詳ナラス字倉元ニ







アリ園二丈二逾工高稍天二参ル蓋シ数百年ノ物ナリ相傳フ古へ寺庭ニアリシ所メリ今畦圃トナル」とある。昭和60年に推定地の試堀調査が行なわれ、布目瓦や土師器が出土している。市内には、延喜式の十六駅のひとつ真祈駅が設置されているが、その所在は不明である。また、当時えびの周辺は日向建久図田帳によれば、島津荘真幸院 320 町に組み込まれている。

中世になると、日向では島津氏と伊東氏の二大勢力が抬頭し、各地で領地争奪が行なわれていた。特に、飫肥と真幸(飯野も含む)の両地域についてはその激しさを増すばかりで1572年には木崎原の戦いが行なわれた。これを機に伊東氏は没落し、かわって島津氏の日向支配が始まる。遺跡の周辺には、木崎原や三角田などの古戦場をはじめ、大刀洗川という地名や島津氏の武将を祭った首塚の確がみられる。

このように、えびのの地は日向、肥後、薩摩の分岐点(接点)にあたり、数多くの歴史事象を招き、その影響が出土遺物や各種の文献にみられるようである。

詳

- (1) 平部嶠南『日向地誌』1929
- (2) 『川内川五十年史』建設省九州地方建設局川内川工事事務所 1982
- (3) 遠藤尚「前畑遺跡をとりまく地質的背景」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発堀調査報告書(3)』宮崎県 教育委員会 1979

上記の報告書では低位段丘よりさらに下の段丘面になるが、最低位段丘は他に使用されているので、便宜上低位段丘面とした。

- (4) 今回の調査によって弥生時代の住居跡が確認された。
- (5) 註(3)と同じ
- (6) 「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第1集 えびの市教育委員 会 1985

小木原地下式横穴墓群の文献に関しては上記の報告に詳しい。

- (7) 註(1)に同じ
- (8) 註(6)に同じ
- (9) 「建久図田帳」『日向郷土史料集』第5巻 日向郷土史料集刊行会 1963
- (10) 註(1)に同じ

〈参考文献〉

『飯野町郷土史』 飯野町 1966

『加久藤郷土誌』 加久藤町 1965

日高次吉『宮崎県の歴史』 山川出版社 1970

Ⅱ.調査の成果

1.調査区の層序

遺跡一帯は、水田に利用されているため現地形は平担面を呈し、旧地形を想定することは難しい。土層の状態は、長年にわたる開墾のためか、南九州通有のアカホヤ層が全くみられず、厚さ20~40cmの耕作土や黒褐色土などの有機質土壌が僅かに認められるだけで、その下は黄褐色砂質層や礫層となっている。このことからすれば、あまり居住あるいは耕作には必ずしも適した場所とはいえない。

第1トレンチ東壁において基本層序をみてみると、I層:暗褐色土、II層:暗褐色土、II層:暗褐色土、II層:黒褐色土、IV層:黒褐色砂質土、V層:黒褐色砂質土とVI層との混じり、VI層:黄褐色砂層、VII層:礫層となる。II層は現水田面、II層は床土で暗赤褐色のマンガン結核を含み固く締まる。III層・VI層が遺物包含層となるが、平安時代の遺物のほとんどはVI層から出土している。V層がVI層との漸移層で、VI層が地山となる。

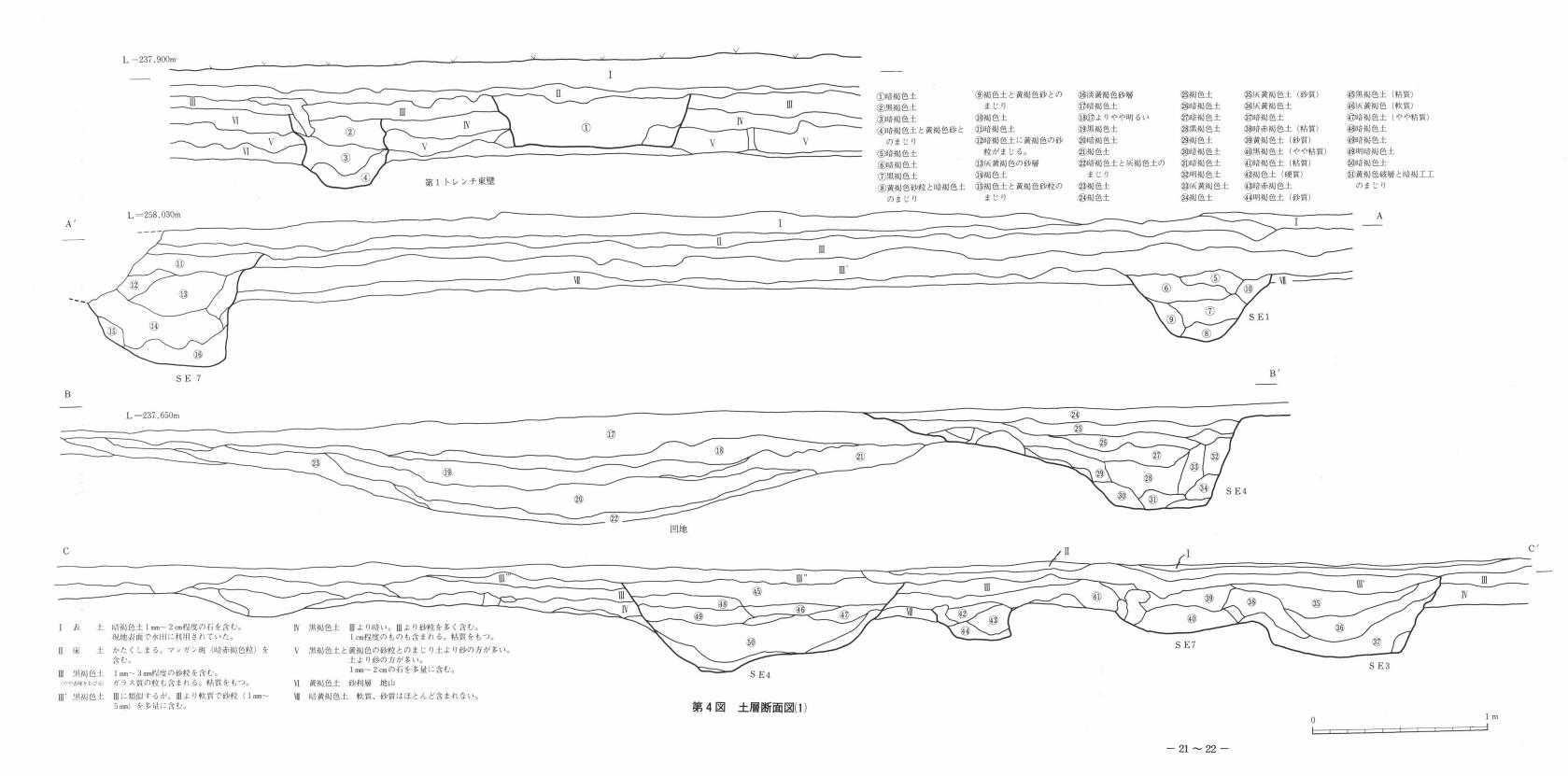
2. 弥生時代の遺構と遺物

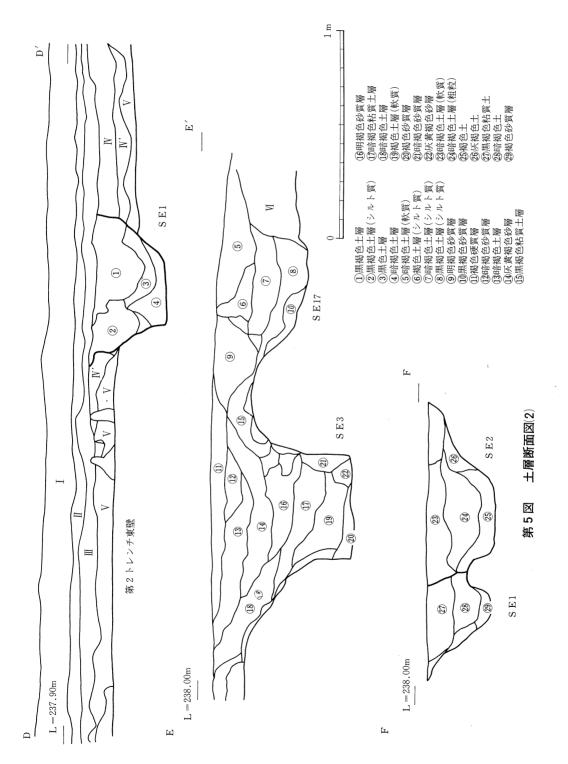
住居跡 (第6図)

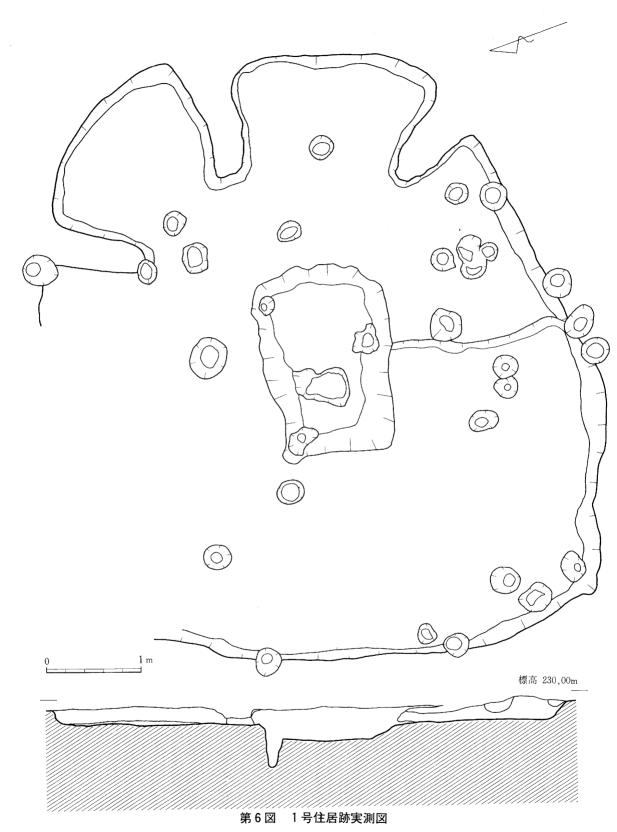
発掘区の北東端に検出され、東側には明瞭な花弁部が残る。西側については最近の耕作や 攪乱のため花弁を有するかどうか不明であるが、花弁を持たない可能性が高い。また、柱穴 も後世のものが多量に重複しているため確定はできず、住居ほぼ中央に位置する長方形の落 ち込みは埋土中から陶磁器が出土し、後世のものと考えられる。住居は現存径 5.5 m、検出 面からの深さ約25cmで黄褐色砂層(第 VI 層)まで掘り込まれている。床面は貼床で、厚さは 10cm内外である。突出部は3箇所現存し検出面で確認された。発掘区内からこの時期に属す る遺構は、ほかには検出されていないが、表土や包含層から弥生土器が出土していることか ら同時期の遺構が存在していた可能性がある。

出土遺物 (第7図)

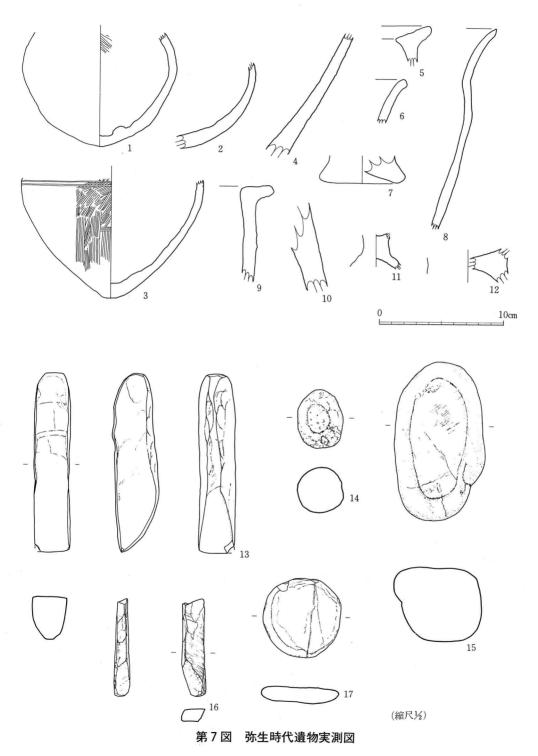
住居内から出土した土器は少なく、1、3~6、8の6点のみ図示した。1は壺形土器で底部は尖底気味の丸底をなす。3は壺の胴下半部で底部は尖底気味の平底を呈す。上半部は割れ口付近から「く」の字状に屈曲し、器形は算盤玉に近いものと考えられる。屈曲部には現存部で2本の沈線と斜方向の劾みが施され重弧文風の文様が予想される。外面はハケ調整。4~6、8は甕形土器である。5は口縁部が内外へ張り出し丁字状をなす。8は頸部があまり屈曲せず口縁部は緩やかに長く外反する。2、7、9~12は包含層出土である。包含







- 24 - •



— 25 —

層からは破片が約50点ほど出土している。9は甕形土器で口縁部は逆L字状を呈す。内外面とも摩耗が激しく調整は不明だが、口縁部下に2条の突帯がつくと考えられる。10は高杯の脚部である。石器は土器に比べ出土量は少ない。16は住居出土で砥石である。一部欠損し、部分的に剝離している。4面とも面取りされ、何れにも擦り痕が認められる。13は住居周辺から出土した抉り入り柱状片刃石斧である。全面的に摩耗が激しく使用痕や調整痕は確認できない。長さ14.3cm、幅2.9cm、厚さ約3.5cmで、刃部が一部欠損している。14、15は砂岩製の磨石である。17は円盤状の石器である。径6.3cm、厚さ約1.2cmを測る。

出土遺物から住居の時期は古い要素としてT字状口縁があり、逆に8の甕形土器などは新しい様相であるが、壺の底部の状態から一応弥生時代終末に比定しておきたい。そのほか、包含層から逆L字状の口縁をもった甕や抉入片刃石斧など出土しており、付近には弥生中期の遺構が存在すると考えられる。

3. 歴史時代の遺構と遺物

掘立柱建物の分布(第8図)

掘立柱建物跡及び柱穴群は、発掘区の東半分にまとまっており、さらに東と西の2群に分けられる。建物の方向は10棟の内7棟までがおおよそ東西方向を示し、南北方向は3棟と少ない。建物の規模は、SB6の1間×3間の身舎に東・西・北の庇を設けたものを最大とするが5m前後のものが大勢を占める。柱穴からは79や108の土師器坏やカメ、布痕土器片など若干出土している。また、包含層中から出土した遺物は、掘立柱建物周辺や凹地に多く分布し、特に、SB6・7の内部より東西の縁辺部に集中している。そのほか、一部には弥生土器片も出土したものもみられた。建物の年代決定は、柱穴から出土した遺物が無かったり、あっても小片であることから包含層出土の遺物などと伴にあとで一括して述べたい。

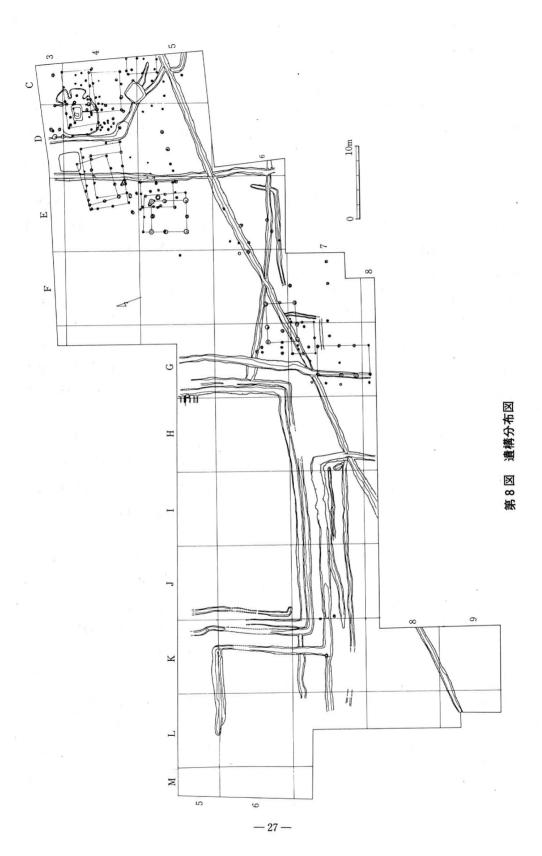
(1) 掘立柱建物

SB1 (第9図)

第 2 群に属し、S B 2 および S E 1、S E 2 と重複関係にある。東西方向の建物で主軸を N-7 3 -Wにとる。身舎は桁行 2 間、梁行 2 間で、桁行 5 .20m、梁行 3 .92m である。柱穴の桁方向が径 4 4 5 0cm と大きく、梁方向が 3 0cm 前後と小さい。深さも桁方向が約 4 70cm で梁方向が約 3 4 4 0cm と差異が認められる。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

SB2 (第10図)

第2群に属し、SB1、SE1と重複関係にあり、SB3に近接する。東西方向の建物で



主軸をN-72-Wにとる。身舎は桁行 2 間、梁行 2 間で、桁行4.42m、梁行3.24m である。柱穴の掘り方は径 $20\sim30$ cmの円形をなす。深さ $20\sim30$ cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

SB3 (第11図)

第 2 群に属し、S E 5 、S E 12と重複関係にあり、S B 2 に近接する。南北方向の建物で主軸をN-1 9 $^{\circ}-W$ にとる。身舎は桁行 3 間、梁行 1 間で、桁行 7.06m、梁行 3.98m である。柱穴の掘り方は径 30~50mの円形をなし、深さ70~90m。柱痕が確認され、柱は径 15mの円形をなす。P-1 から肥前系陶磁の小坏が出土している。

SB4 (第12図)

第1群に属し、SB5と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をN-73-Wにとる。 身舎は桁行 2間、梁行 2間で北と東に庇をつける。桁行4.78m、梁行4.16m である。身舎の柱穴の掘り方は径 $30\sim40$ cmの円形で、深さ約 $50\sim80$ cm。庇部は、梁行4.86m、桁行2.78mを 測る。柱穴は径 $15\sim20$ cmの円形をなし、深さ $20\sim30$ cm。柱穴からは、土師器が若干出土して いる。

SB5 (第13図)

第1群に属し、SB4、SE14と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をN-20.5-Eにとる。身舎は桁行2間、梁行2間で、桁行4.44m、梁行3.36mである。柱穴は径20~30cmの円形をなす。深さ20~30cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

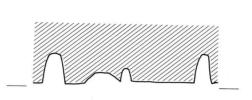
SB6 (第14図)

第 1 群に属し、S B 6 、S E 14と重複関係にある。南北方向の建物で主軸を $N-80^{\circ}-E$ にとる。身舎は桁行 3 間、梁行 1 間で東、西、北の 3 方向に庇をつける。桁行5.82m、梁行 4.18m で、柱穴の掘り方は径20~30mの円形をなし、深さ30~70m。庇は梁行5.34m、桁行 8.40m、柱穴は径20~30mの円形をなし、深さ20~30m。また、柱穴に柱痕が確認され、柱は径約10mの円形をなす。柱穴からは、土師器が若干出土している。

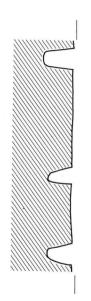
SB7 (第15図)

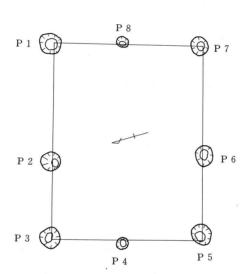
第1群に属し、SB6、SE14と重複関係にある。南北方向の建物で主軸をN-87-Wにとる。身舎は桁行3間、梁行2間で、桁行6.00m、梁行4.22mである。柱穴の一部は攪乱によって消滅している。柱穴の掘り方は径30~40cmの円形をなし、深さ30~40cm。柱穴内からは土師器が若干出土している。

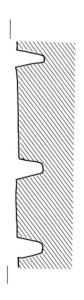
SB8 (第16図)



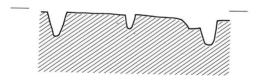








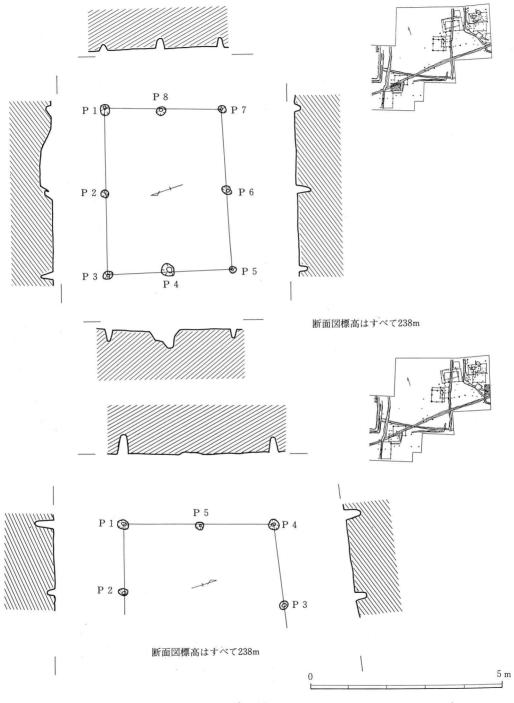
断面図標高はすべて238m



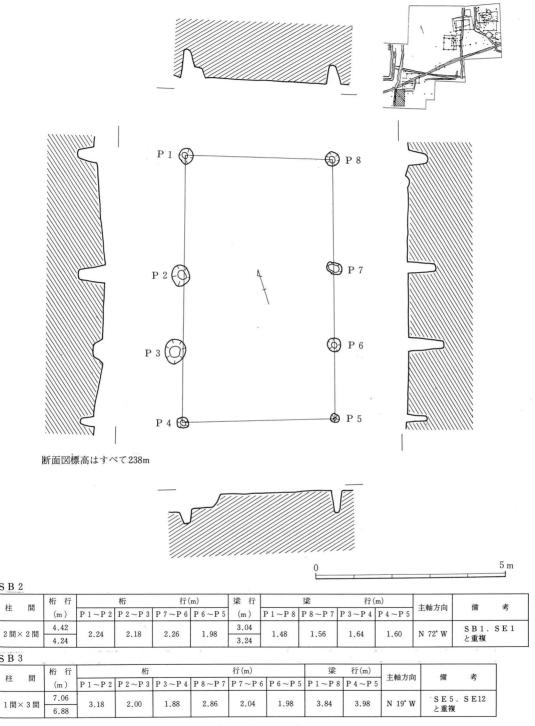
U .	
	5 1

柱間		111 11	111 11		桁	行(m		梁 行		梁	行(m)			
	(m)	P 1~P 2	P 2~P 3	P 7~P 6	P 6~P 5	(m)	P 1~P 8	P 8~P 7	P 3~P 4	P 4~P 5	主軸方向	備	考		
2間×2間	5.20 3.18 2.02	2 02	2.88 2.2	2,26	3.86	1.70	0.00		2.00		SB2. SE1				
	5.14	0.10	2.02	2.00	2.20	3.92	1.78	2.08	1.84	2.08	N 73° E	S E 12 &			

第9図 SBI



第10図 SB2·SB10

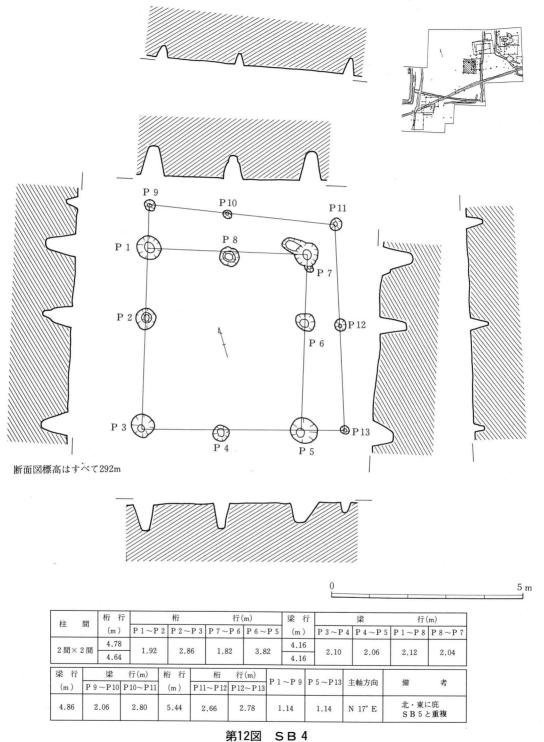


第11図 SB3

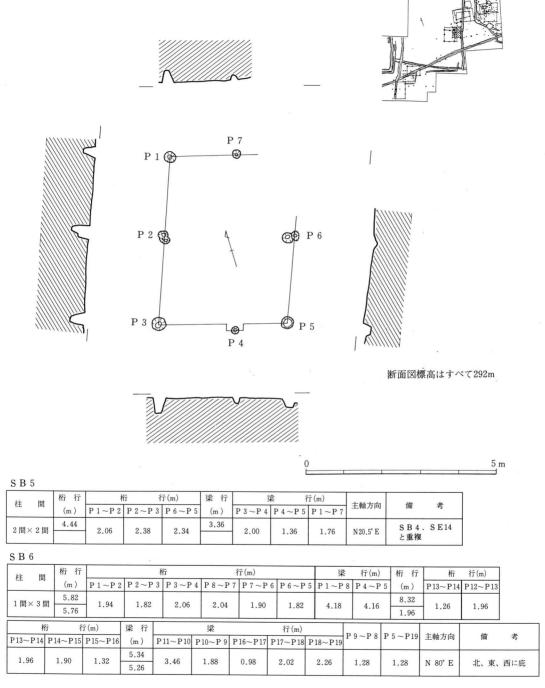
S B 2

柱

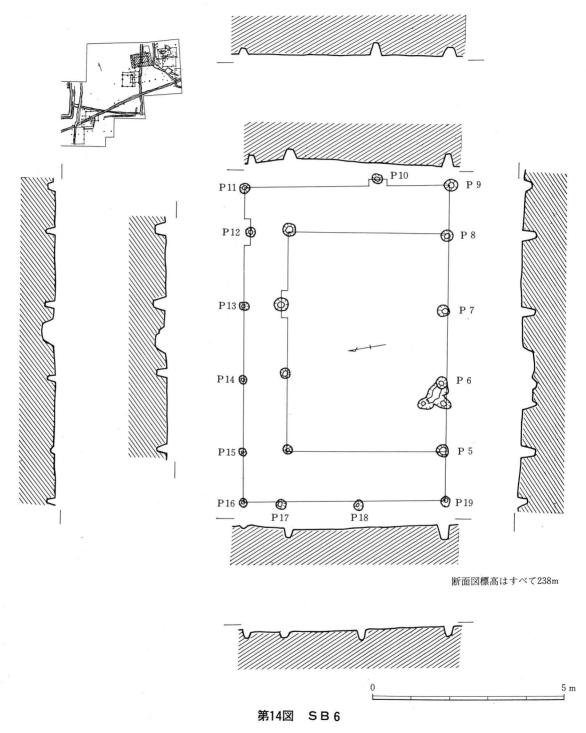
S B 3

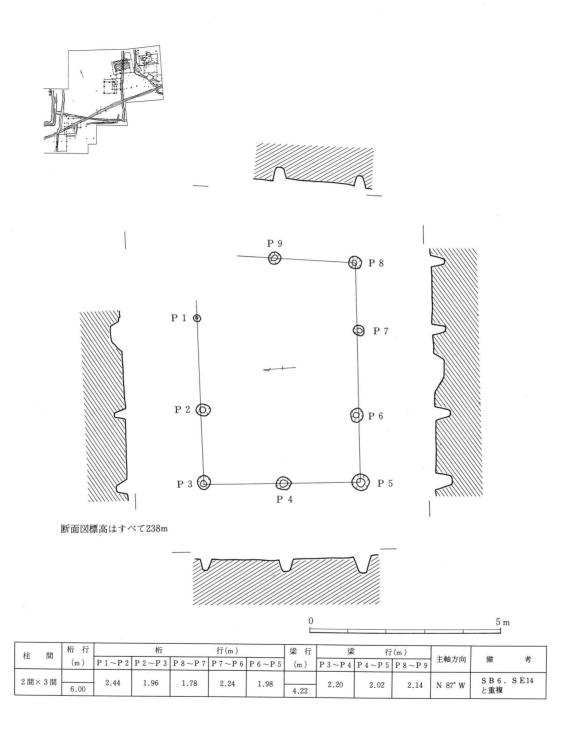


SB4

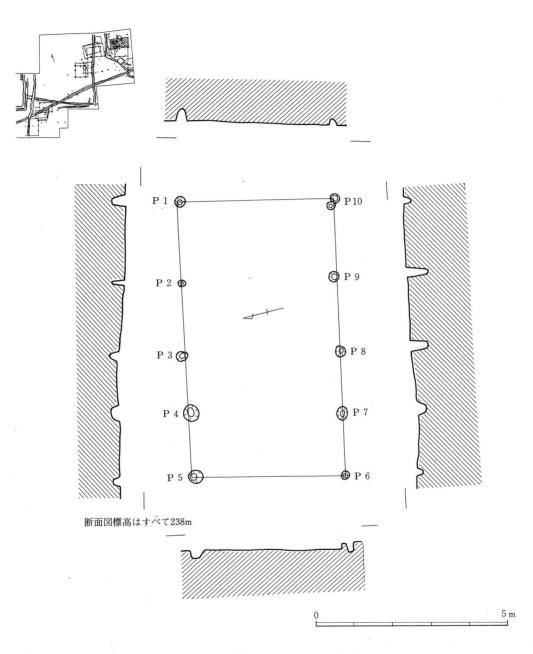


第13図 SB5



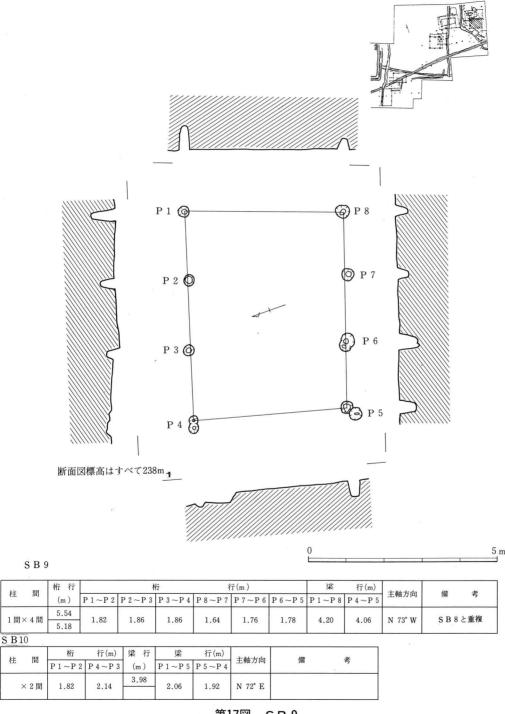


第15図 SB7



柱	間	桁 行		桁 行(m)							梁	行(m)	主軸方向	備考
		(m)	P 1~P 2	P 2~P 3	P 3~P 4	P 4~P 5	P10~P9	P 9~P 8	P 8~P 7	$P7 \sim P6$	P 1~P10	P 5~P 6	工和刀门	DHI 1-3
1 88 \	< 4間 ⋅	7.28	2.14	1.92	1.50	1.72	2.08	1.94	1.68	1.62	4.14	4.08	N 79° W	SB9 と重複
工间/		7.32	2.14											

第16図 SB8



第17図 SB9

第1群に属し、SB9と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をN-79-Wにとる。 身舎は桁行4間、梁行1間で桁行7.28m、梁行4.14mである。身舎の柱穴の掘り方は径20~30cmの円形で、深さ約30~40cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

SB9 (第17図)

第1群に属し、SB8と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をN-73 $^{\circ}$ $^{\circ$

SB10 (第10図)

第1群に属し、調査区外に延びる。南北方向の建物で主軸をN-720ーEにとる。身舎は桁行不明、梁行2間で梁行3.98mである。柱穴は径20~30cmの円形をなし、深さ20~40cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

(2) 溝状潰構

溝状遺構は、発掘区内でその役割や用途、掘立柱建物跡との関係など言及できるものはないが、方形に区画されたSE3、SE17や「 ̄¬」状に延びるSE4など機能の差が感知される。溝状遺構は17条確認され、東西方向、南北方向、方形区画、途中で消滅するものの四つに大別できる。それらはそれぞれに切り合いまた、掘立柱建物跡と重複関係にあることから何時期の時期幅が考えられる。

SE1

発掘区の東端から西に延びる溝状遺構で、調査区内をほぼ一直線に横切る。SB1、2と重複関係をもち、SE14・2・5・4・9と前後関係を有する。遺構および土層の状態からSE1が最も古いと考えられる。SE15・16とは切り合い関係が不明で、同一時期に使用された可能性もある。溝の上部はⅢ層によって削平されている。断面は台形を呈し、Ⅲ層下面からの深さは約35cmである。

SE2

発掘区の中央からやや東部分に位置し、東西に延びる。西側はSE17とぶつかったところで消えている。SE1をSE2が切っており、SE2が後出する。また、SE5がSE2を切っていることからSE2が先行するが、SE17との前後関係ははっきりしない。溝は二段掘りに近く、断面は台形状をなす。検出面からの深さは約35cmである。出土遺物としては20の須恵器や陶磁器類が若干みられる。

SE 3 · SE 17

SE3、SE17は発掘区の中央からやや西側に位置し、平行して「コ」の状に区画している。ただ、SE3は凹地中央部で消滅する。SE3、SE17とも皿層によって削平されているが、SE3は断面が台形状をなし、検出面からの深さは約40cmである。しかし、北に延びた箇所では深さは約75cmと非常に深くなる。また、SE17は断面が「U」字状を呈し、検出面からの深さは約25cmとSE3よりも浅いが、北側では約45cmと深くなる。土層の堆積状態からSE3がSE17に先行すると考えられるが、同時併存の可能性もある。遺物としては、青磁(2・3)、土師器杯(59・106)、須惠器(4・29・39)のほか図示しなかったが土師器甕や杯の破片、備前焼の摺鉢などが多量に出土している。現在の家が建てられている付近に当時の居住区が存在していた可能性がある。

SE4

SE4は発掘区の中央からやや西に位置し「「」、状に延びるが、北側の西に曲がったところで一段深くなり終結する。SE1、7~9、10と重複関係にあるがいづれにもSE4が後出する。東西から南に延びた「「」部分には底から上層まで川原石や陶磁器類が集積された状態で検出されたが、ほかの箇所ではこのような状況は認められなかった。SE4の断面は「U」字状を呈し浅い二段掘りとなり、検出面からの深さは約55cmである。また、北側の一段深くなる部分は、断面は台形状をなすが南側立ち上がりは北側に比べ、緩やかなスロープを呈する。深さは約60cm。明らかに凹地を削平して作られている。遺物のほとんどは集積された部分から出土し、薩摩焼が最も多く器種では甕、摺鉢、茶家、碗の順に多い。磁器類は陶器に比べ少ないが、その中では肥前系の碗類が主体で18世紀代に比定できる。土師器、須恵器などはほとんど出土していない。

SE5

発掘区のほぼ中央を南北に一直線に延びる。SB3、SE1、2と重複している。SB3との前後関係は不明だが、SE1、2はSE5に先行する。断面は台形を呈し、深さ約30cmを測る。遺物は須恵器(118)、布痕土器(47)のほか陶器類が若干出土している。

SE6

SE3、17に区画された中にあり、南北に延び南端で東に折れたところで終わっている。 断面は「U」字状をなし、深さは北端で約25cm、南端で約40cmと南側が深くなっている。出 土遺物は磁器碗(14・15・48・98)、土師器坏(38・48・78・112)、黒色土器(93)、布 痕土器(38・42)のほか図示しなかったものとして土師器甕・坏や布痕土器、須恵器など出 土している。

SE7

SE7は発掘区の西側に位置し、東西に延びる溝状遺構である。東はSE4と重複しSE17と交わり、西側は削平のためか途中で消滅している。検出面からの深さは深いところで約10cmを測る。

SE8

SE7と平行して東西に延び、東はSE4と交わり南は削平のためか途中で消滅している。 SE4と連接されていた可能性がある。検出面からの深さは約12cmとなる。

SE9

SE7、8の南に位置し、それらに平行して東西に延びる溝状遺構である。東はSE4と接し、西側は削平のためか途中で消滅している。検出面からの深さは約10cm。

S E 10

SE4から南西に派生して延びるもので、西側は削平のためか途中で消滅している。SE4との切り合い関係は不明である。深さはSE4との接点付近では約18cm、西側では約8cmと次第に浅くなる。

SE11

SE4とSE9の間に位置し、東西に延びる。中央付近で2cm程度の段差を有する。検出面からの深さは約6cmである。

S E 12

SE12は $SB1\sim3$ の掘立柱建物跡群と重複している。「」」状に延び北側はSE1と結がっているが前後関係は不明。南側部分は削平により浅くなっている。

S E 13

SE12の東に位置し、SE2と重複している。東西に延びたあと「一」形に北に上がり終結する。西側は次第に浅くなり消滅する。深さは東で約15cm、西で約5cmである。

SE14

発掘区の東に位置し南北に一直線にSE5と平行に延びている。中央から20cm前後の段差を持ちながら除々に深くなる。 $SB4\sim6$ の掘立柱建物跡群と重複するが前後関係はわからない。また、SE14はSE1、2と切り合うがそれらより後出する。断面は台形状を呈し、深さは中央付近が最も深く約45cm、浅いところは南・北端で約30cmである。

S E 15

S E 16

発掘区の東端に位置しSE1から派生して東に延びる。SE1との前後関係は不明。深さ約20cmを測る。

遺物の出土状況

(3) 出土遺物

出土遺物には土師器(甕・杯・墨書土器・高台付碗・黒色土器・甑・皿・蓋)、須恵器(甕・杯・高台付碗・蓋・瓶・皿)、布痕土器、土師質土器、陶磁器(青磁・備前焼・染付・薩摩焼)などの容器類のほかに紡錘車や土錘などがある。これらの遺物のほとんどは遺構に伴うものではなく包含層から出土したものだが、分布状況をみると掘立柱建物跡など遺構が検出されたところに集中している。この集中箇所は大きく4群(A~D)に分けることができる。A群は堀立柱建物跡第1群のあるC~E-3~5グリッドに分布し、特にSB6・7の東西縁辺に集中する。B群は凹地から出土した遺物群、C群はK~L-8~9グリッド、D群は掘立柱建物跡第2群周辺のものの四箇所に遺物のまとまりがみられる。出土量はA群が最も多く、以下B・C・Dの順に多い。特にA群は多くの掘立柱建物跡が重複していることから、これらの遺構に伴うものと考えられる。また、接合状況は大部分は同一群内で接合しているが一部には他の群の遺物と接合しているものもある。また、接合の位置関係をみると大部分は東西方向の接合関係を示しており、南北方向のものは少なく人為的あるいは自然にしる東西方向に大きく「土」が動いていることが窺える。さらにA群とB群との出土位置や接合したもののレベル差をみるとB群の方が低く、当時まだ凹地が埋没する途中でこれらの遺物が凹地に流れ込んだのではないかと考えられる。

(1) 土師器

遺物は $A \cdot B \cdot C \cdot D$ の4群から出土している。A群は掘立柱建物跡の内側よりその周辺に集中している。杯や甕、黒色土器が多く、接合関係は西側($11 \cdot 25 \cdot 33 \cdot 34 \cdot 41 \cdot 43 \cdot 65 \cdot 89$)、東側(67)、その中間($35 \cdot 62 \cdot 91$)に分かれ、東側と西側との接合関係はみられない。B群と接合できたものは 4 点(20 点 20 点

関係を示すものである。C群はA・B群と接合関係を有するほか同一群内においてもいくつか接合している。D群は数点しか出土していない。

甕 (第19·20図1~35)

出土した土器のほとんどは破片であるため個体数については不明だが、出土量は土師器杯とともに最高である。土器は基本的には外面がナデ調整だが、一部にはタタキを施したものやカキ目状の調整のものもみられる。また、内面頸部以下にはヘラケズリが施される。口縁部や頸部の形態から大きくA~D類に分類でき、さらに細かなちがいによって細分される。

A類……頸部が厚手で口縁部が滑らかに外反する。

Ⅰ類:口縁部が短く、口径が最大径となるもの。(1・2)

■類: Ⅰ類に比べ口縁部が長く、胴部最大径が口径と同じか上回るもの。 (3 · 4 · 19 · 25)

B類……口縁部が外反するもの。

| 類:頸部内面に稜を有するもの。 (5 · 7 · 8 · 11 · 20)

Ⅱ類:頸部に稜をもたないもの。 (9・13・14・15・23・24)

C類……口縁部が大きく外反するもの。 (6 · 10 · 12 · 16 · 17 · 18 · 21 · 22 · 26)

D類……口縁部がB類に比較して短く外反するもの。 (27・28・29)

その他として、31・32は甕胴部片で上下・横方向からのハケ調整が施され格子目状を呈している。33~35は同一個体で、胴部上半から底部にかけてナデ調整の後、擬格子のタタキが施される。A群から出土している。

杯 (第21・22図)

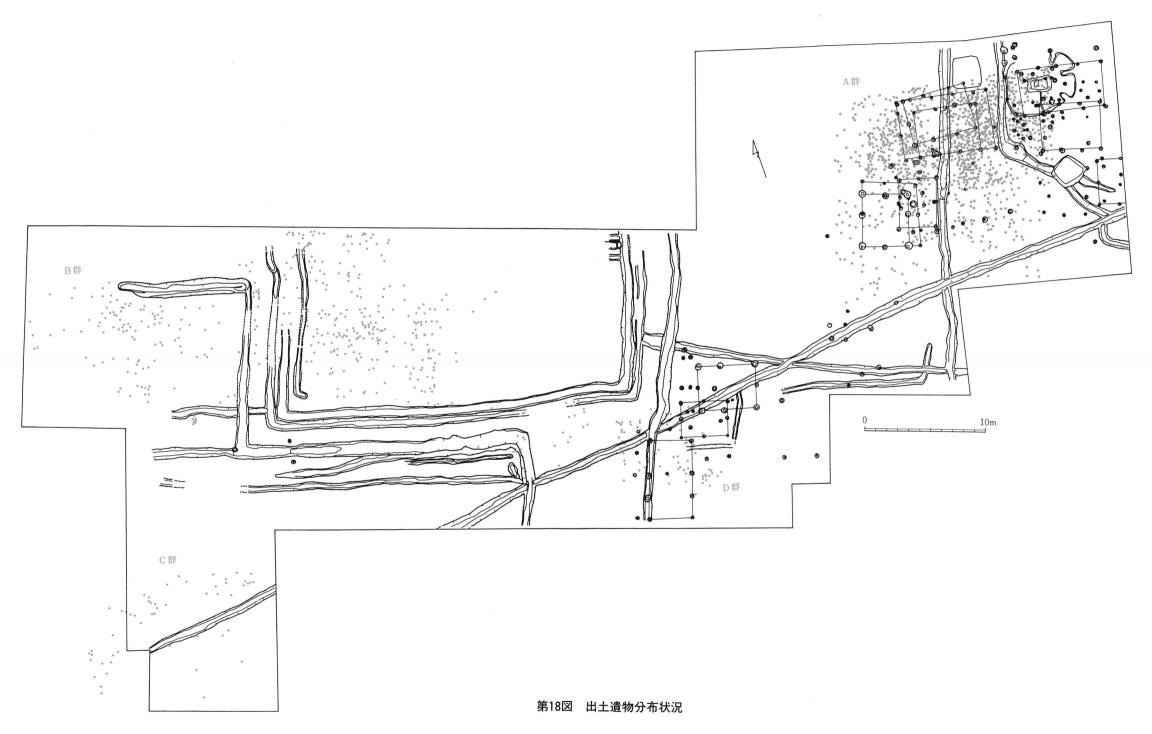
出土した土師器杯の大部分は回転ヘラ切りされたものであるが、破片であるため口径、器高など復元できたものは18点であった。これらの土師器の法量を表にしてみたが、咬差を見い出すことができなかったため胎土や切り離しによって8つ(A~H)に分類した。

A類 (55·57·58·60·71·76·87·85)

赤褐色を呈し胎土は密であるが軟質で底部や体部は薄手である。内底はていねいなナデでやや凹凸あり。外底部はヘラ切り離しされたまま未調整。底部から体部かけてはていねいに仕上げられ稜をもたない。口縁部は外反する。

B類 (42·48·49·63·65·69·73)

淡赤褐色で胎土に砂粒を少量含みやや軟質で薄手である。外底部はヘラ切りのあとナデ調整。底部から体部かけては調整のまま、あるいはていねいに仕上げられ稜を有する。



C類(47·53·56·59·75·89)

黄鐙色をなし、胎土には細砂粒を含み軟質である。内底は平担を呈し丸味をもって立ち上がる。外底部はヘラ切りの後、未調整のものやていねいなナデ調整が施されるものなどがある。体部は直線的に延びるものと内湾するものがある。

D類 (40·43·46·50·54·62·64·83·84)

明褐色を呈す。焼成は良好でやや硬質で薄手である。内底はていねいなナデでやや凹凸あり。底部から体部にかけて稜をもち立ち上がる。

E類 (38·39·41·44·45)

淡赤褐色をなす。やや硬質で胎土は密で厚手のものが多い。内底はていねいなナデでやや 凹凸あり。底部から体部にかけて稜をもち立ち上がる。

F類 (52·74)

灰黄褐色を呈す。内底はていねいなナデでやや凹凸があり、稜を有し立ち上がる。外底部はナデ調整や板目をもつものがある。底部から体部にかけて稜を有する。

G類 (77)

厚手で淡黄褐色を呈す。内底はていねいなナデでやや凹凸がある。底部から体部にかけて 稜を有する。

H類 (79·80·81·82)

糸切り底のもので杯や皿・小皿などの器種がある。出土量は約10点と少ない。

甑(第20図36・37)

把手部分が2点出土している。36はD-4グリッド出土で大型の甑の把手の接合部分である。37は面取りされた小型の把手で、鉢の可能性もある。D-5グリッド出土。

高台付碗 (第23図85~89)

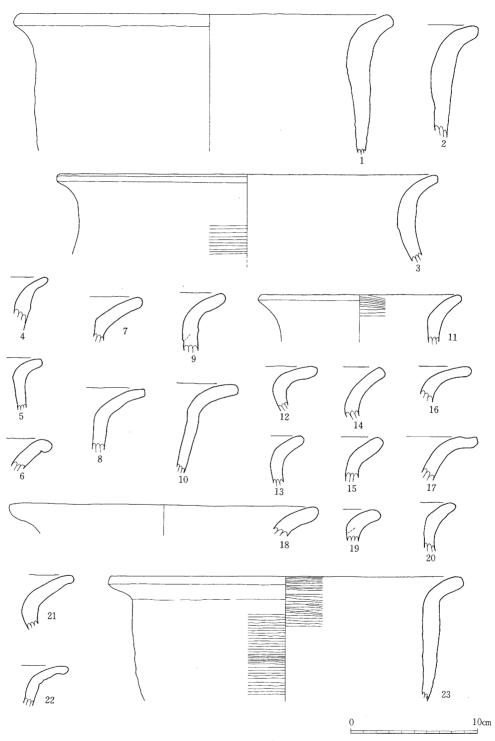
高台付碗は杯に比べて非常に少ないため、本遺跡での傾向は捉えられない。高台の形態は 逆三角形をなすもの (85・87)、高台が低く小さいもの (86)、やや外方に延びるもの (88)、 端部がやや角張るもの (89) などがある。

蓋杯 (蓋) (第23図90)

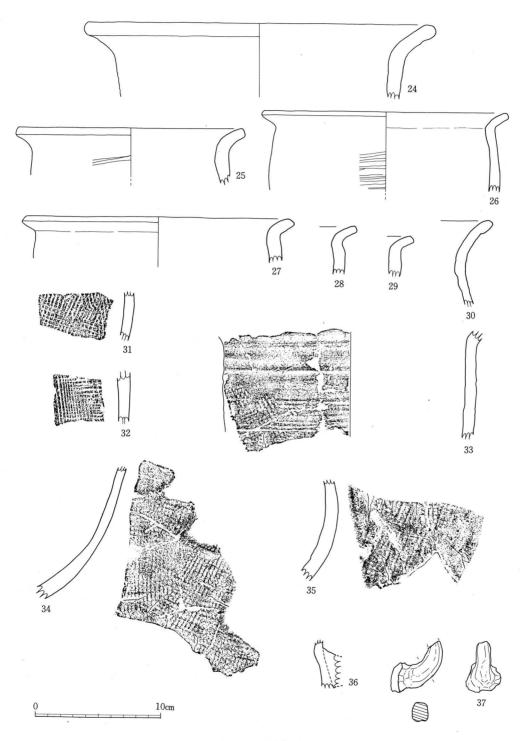
宝珠つまみを有する蓋で1点出土している。焼成はやや不良で軟質である。E-4出土。

黒色土器 (第23図91~99)

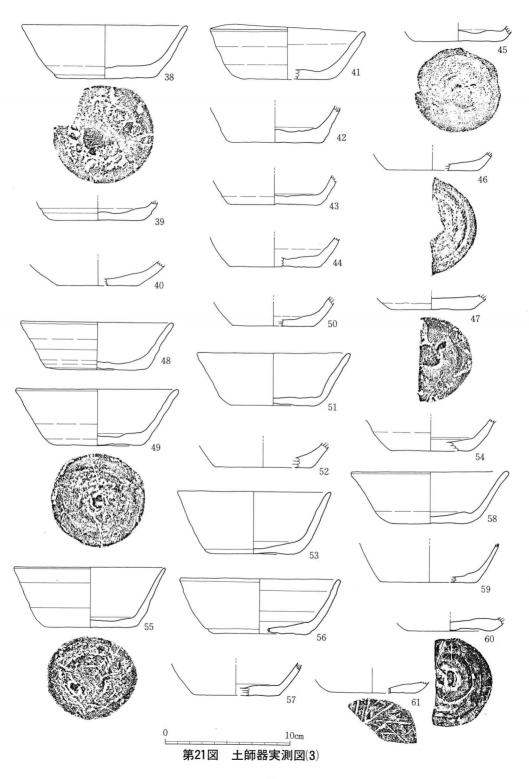
総数で32点出土しているが、すべて内黒のいわゆる黒色土器A類である。ほとんどが小片で完形に複元できるものはない。A群25点、B群は6点、C群は1点と少ない。接合できた

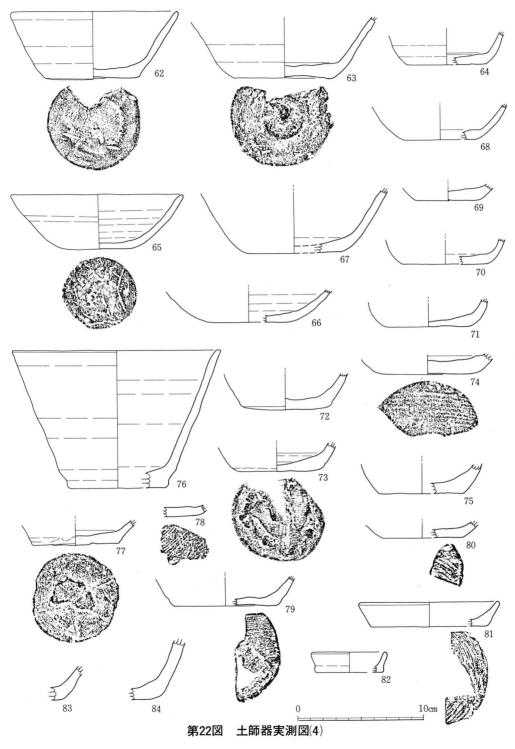


第19図 土師器実測図(1)

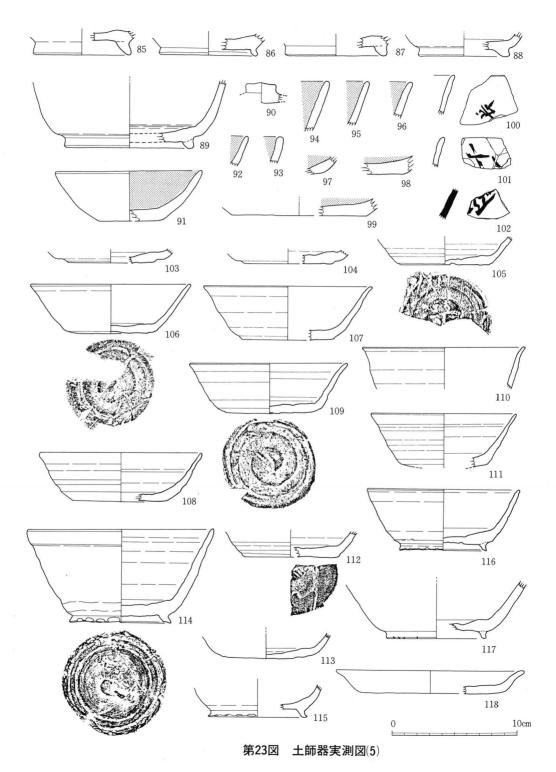


第20図 土師器実測図(2)

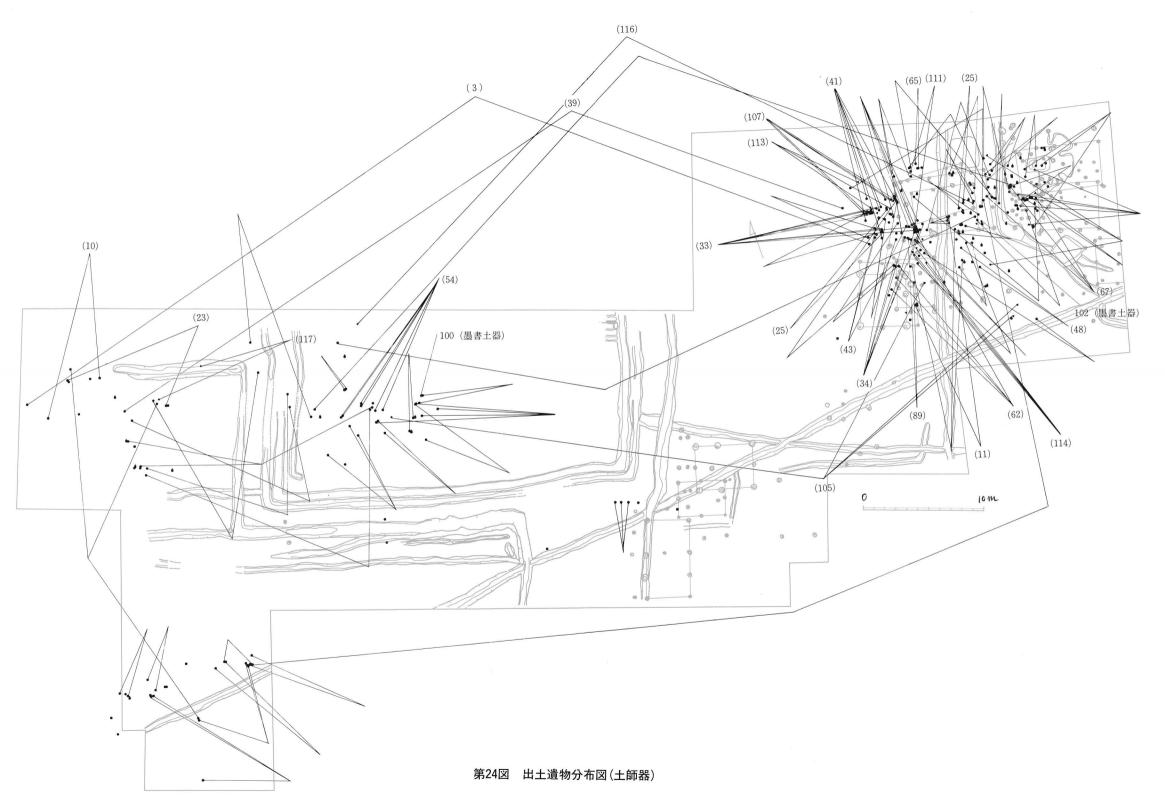




— 49 —



— 50 —



のも小片が多いため 1 点のみであった。口縁部はやや厚手で内湾しながら延びるもの(91~93)と、直線的に外方に開くもの(94~97)とに分かれる。底部は平底で高台付のものはみられず、底径の大きいもの($98\cdot 99$)、小さいもの(91)とがある。ヘラミガキは内外面および底部に施されているが、ミガキの方向や大きさについては確認できない。

墨書土器 (第23図100~102)

墨書土器は 3 点出土したがいずれも小片であった。100は土師器杯の外面に行書体で「長」と墨書される。101も土師器杯で口縁外面上半に墨書を確認できるが判読は困難がである。 I-6 グリッド出土。102はD-4 グリッド出土で、須恵器杯の体部外面に墨書されている。 「i」は確認できるが字体は判読できない。複数の文字が書かれていたと考えられる。

(2) 須恵質土師器 (第23図104~118)

焼成は良好で硬質で須恵器に類似するが、器形および調整の状態から土師器として捉えた。しかし、胎土は土師器、須恵器とも異なり、特定の生産地が考えられる。多くはA群から出土していない。須恵質土師器には回転へラ切りされ板目を残すものもある。器種には坏と高台付碗がある。法量としては114以外は口径11.4~13.3cm、底径5.6~7.1cm、器高3.9~4.9 cm内に収まる。形能も底部から稜をもたず、もっても緩やかなもので立ち上がる。体部にはロクロ調整痕を残しながら直線的に開き、口縁部は外反する。内底面はていねいなナデ調整が行われるが、凹凸を残し、土師器坏で主体的な形態と類似している。しかし、高台は土師器のものに比べシャープで短く、外に開く。また、焼成前あるいは焼成後、端部に連続した抉りや刻みが入るのが特徴となっている。114はほぼ完形で出土し、他のものに比較して口径が広く、器高も高い。体部は直線的に開き、口縁部は若干玉縁状を呈する。高台端部には幅広の抉りが入る。皿は底部にていねいなナデ調整が行われ、口縁部は強く外反する。坏や高台付碗とは胎土が異なる。

する。高台端部には幅広の抉りが入る。皿は底部にていねいなナデ調整が行われ、口縁部は強く外反する。杯や高台付碗とは胎土が異なる。

(**3**) **須恵器** (第25~27·29図)

遺物はA・B・D群にみられC群からは2点のみである。A群では杯や蓋・皿などが多いが甕は少なく、特に甕Ⅱ類は出土していない。A群はさらに東と西に細分でき、接合関係も西側(52・54)、東側(49・56・57)とその中間(53・59・60)に分かれる。これは掘立柱建物跡もいくつか重複していることからすると時期差とも考えられる。B群は杯類が出土していないが、甕Ⅱ・Ⅲ類はB群だけに分布している。B群が凹地で居住地であるA群から出

土していないことからすれば、発掘区外に甕Ⅱ・Ⅲ類を主体とする居住地が存在する可態性がある。また、甕14はA群のものといくつか接合関係をもち東西間の距離は約81mである。 D群は甕Ⅰ類のほか甕Ⅳ・Ⅵ類が1点づつ出土している。C群では杯と甕Ⅰ類がそれぞれ1点と少ない。

甕

総数で約80点出土しているが口縁部が3点、それ以外はすべて胴部片で、その内45点を図示した。

口縁部 (第25図1~3)

1は大きく開く大型甕の口縁で外面に2条、内面に1条の突帯が導き出されている。外面には突帯下にヘラ状工具による2条の波状文が施される。2・3は同一個体であるが接合できない。口頸部は上方に立ち上がり、口縁部は外反する。

胴部

胴部片は胎土や調整によっていくつかに分類できる。

Ⅰ類 (第25図6~21)

同一個体か同じタイプのものと考えられる。外面には横方向の擬格子目タタキの後、斜めの擬格子目タタキが部分的に施される。内面は頸部付近が溝の深い同心円タタキ、その後胴部は格子目タタキ調整である。同心円文と格子目文の重なる箇所には一部幅広の平行線文のタタキが行われる。

Ⅱ類(第26図22~35)

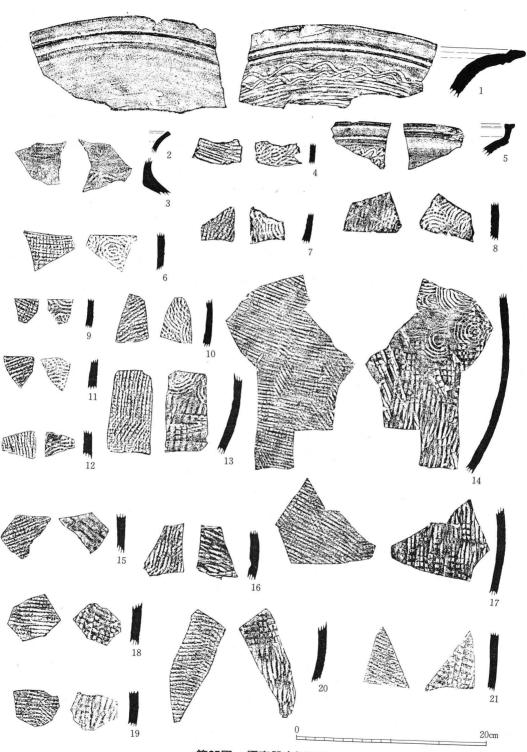
同一個体か同じタイプのものと考えられる。内面の色調が特徴で、にぶい褐色を呈し、胎土は粒子が粗く、I類とは異にする。外面は縦方向の格子目タタキ調整である。外面タタキの痕跡から調整具は幅4cm以上、長さ6cm以上の板状のものと考えられる。内面は上半が同心円タタキ、中位が平行線タタキ、下半が同心円タタキが上から順に施されている。出土点数としては最も多い。

Ⅲ類 (第27図36)

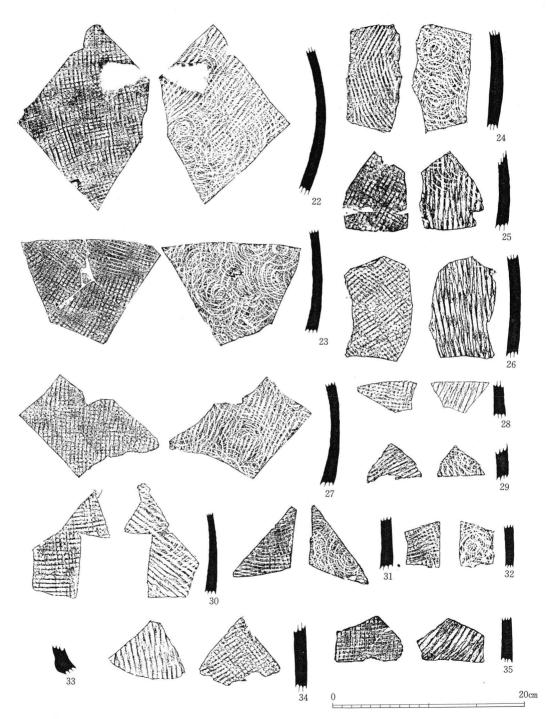
内外面とも灰褐色を呈し、粒子が粗く $1\sim3\,\mathrm{mm}$ の砂粒を少量含む。外面は平行線タタキ、 内面は沈線状で単位が横幅広の平行線タタキ調整である。本遺跡からは1点しか出土していない。

Ⅳ類 (第27図37)

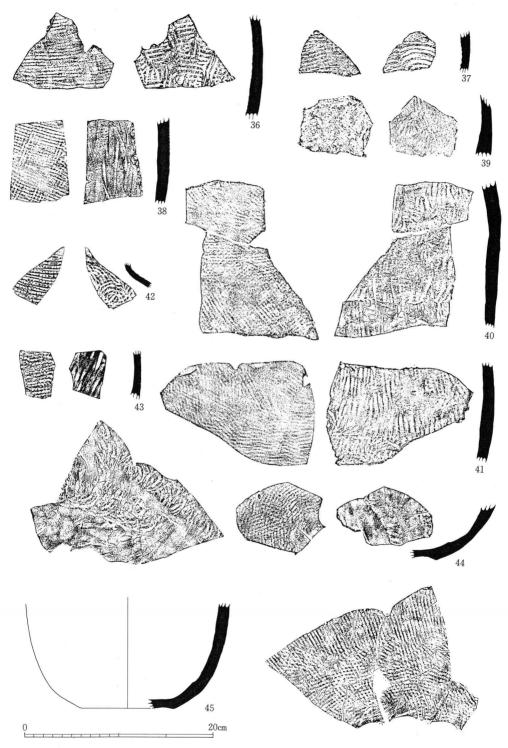
外面は平行線タタキの後、ナデ調整。内面は幅広で深い同心円タタキが施される。本遺跡



第25図 須恵器実測図(1)



第26図 須恵器実測図(2)



第27図 須恵器実測図(3)

からは1点しか出土していない。

V類(第27図38~41)

焼成不良で軟質でにぶい黄鐙色を呈する。同一個体か同じタイプのものと考えられる。外面は平行線タタキと思われるが全体的に摩滅している。内面は上方が縦ナデ、中位から下半にかけて平行線タタキや花弁状(車輪文?)タタキがみられる。4点だけ出土した。

VI類 (27図42・43)

底部 (第27図44・45)

同一個体と考えられる。外面は上半は縦方向、下半が斜め方向、底部付近が横方向の擬格 子目タタキ調整。内面は同心円タタキの後、ていねいなナデ調整が行われている。焼成は外 面部がやや不良となる。

広口瓶 (第29図 5 · 46~48)

広口瓶の口縁部で4点出土した。外傾した口縁部から屈曲し上方に延びる。5は口縁端部が平担で凹線状になる。外面には波状文が施される。内面はていねいなナデ調整。色調や胎土は胴部Ⅱ類に類似する。

杯·高台付碗 (第29図49~56)

杯・高台付碗の出土量は約50点と少なく、完全に複元できるものはない。そのため口縁部だけでは杯・高台付碗の判別はできない。口縁部には直線的・内湾・やや外反するものがあり、高台は高いものと低いものとがある。土師器杯や須恵質土師器に類似資料は見当たらない。55と56は同一個体の可能性がある。

皿 (第29図57・58)

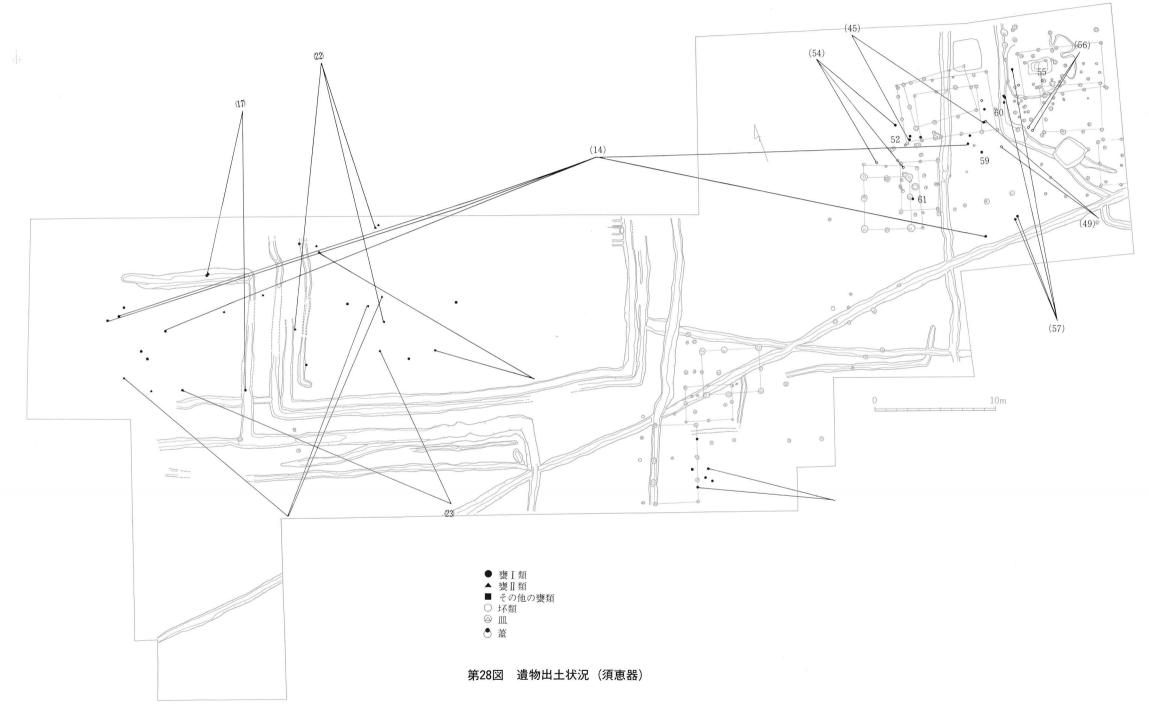
粗いヘラ切りの底部で口縁部はわずかに外反する。58は強く外反する。

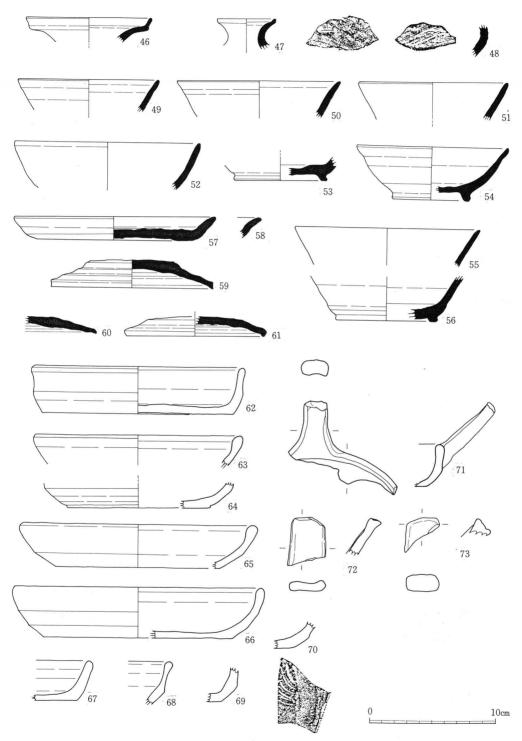
蓋 (第29図59~61)

59は口径が広く、器高が高い。口縁端部は下方へつまみだされている。体部は直線的に延び、天井部は平担になる。60・61は偏平で口径も狭い。

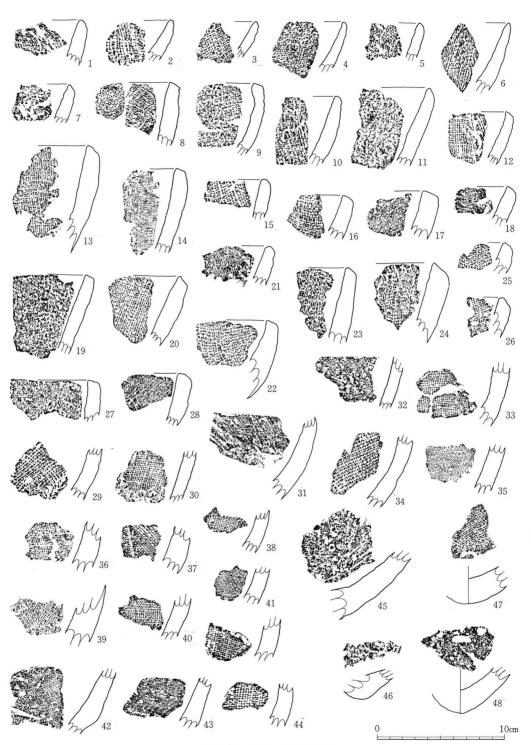
(4) 土師質土器 (第29図62~73)

底部は平底をなし、体部は内湾しながらのび1ないし2の稜を有する。口縁部は肥厚し丸く仕上げられる。内底および体部にはていねいなロクロ痕がみられ、底部はていねいなナデが施されている。また、口縁部には斜め方向に長さ約5.5cm、幅約2.5cmの把手が付けられる。

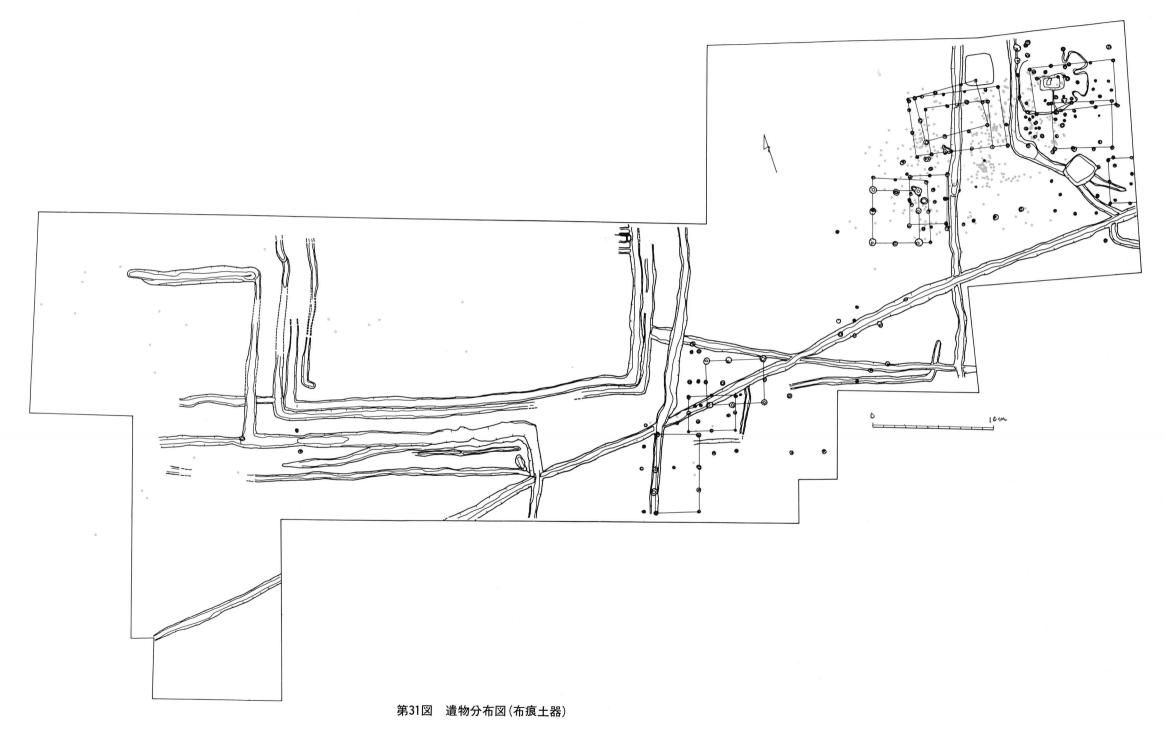


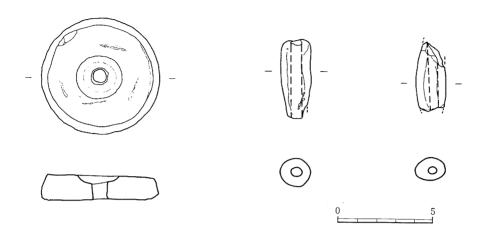


第29図 須恵器・土師質土器実測図



第30図 布痕土器実測図





第32図 紡錘車・土錘実測図

底部や体部外面にはススが付着する。

(5) 布痕土器 (第31図)

胎土は粗く、4~5mm程度の砂粒を含み非常にもろい土器である。このため土器は多量に出土しているが破片が多く、磨耗も激しいため完全に復元できたものはない。型作りによる技法のため口縁部は外方へそぎ落とされ、底部は尖底をなし、全体としてややふくらんだ円錐形をなす。県内で出土した布痕土器の形態はほぼ同形態で大きさも一定している。このことから完形に復元できた他の遺跡の出土例から一個体の重さが平均600g前後であることから、永田原遺跡出土の総重量は約14.5kgで、約24個体分出土したことになる。出土状況は全体の遺物分布状況に比例するが、SB6・7周辺に特に集中している以外は数点と少ない。

(6) 紡錘車(第32図1)

土製の紡錘車で台形状をなし、上径5.5cm、下径6.2cm、厚さ1.8cm、孔径7cm、重さ56.1gである。上面中央は径2.4cmの幅で皿状に窪む。焼成は良好で、灰白色を呈す。E-4グリッド出土。

(7) 土錘 (第32図2・3)

2 点出土し土師質で筒状をしている。 2 は7.7g。 J-6 グリッド出土。 3 は5.8gである。 D-4 グリッド出土。

(6) 陶磁器 (第33~39図)

青磁 (第33図1~3)

総数、破片で8点しか出土していない。1は口縁部が端反りし、見込みには目跡が残り、

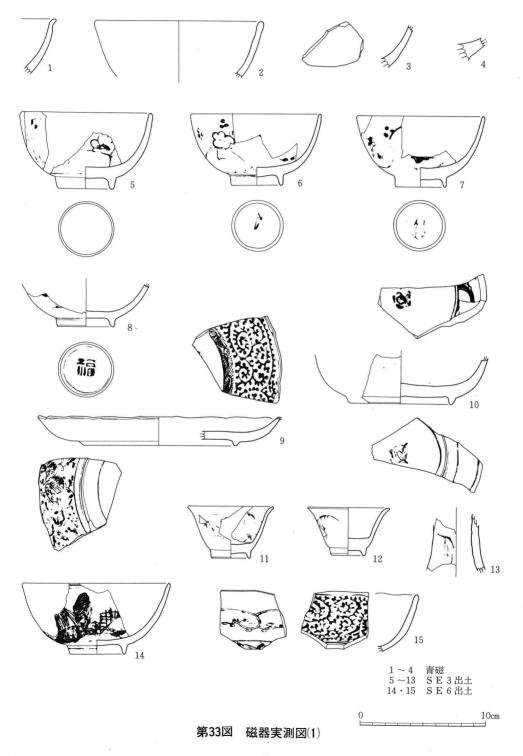
越州窯の可能性がある。D-4、I-6グリッド出土。 $2\sim4$ は龍泉窯系の青磁碗である。 $2\cdot3$ はSE3出土。

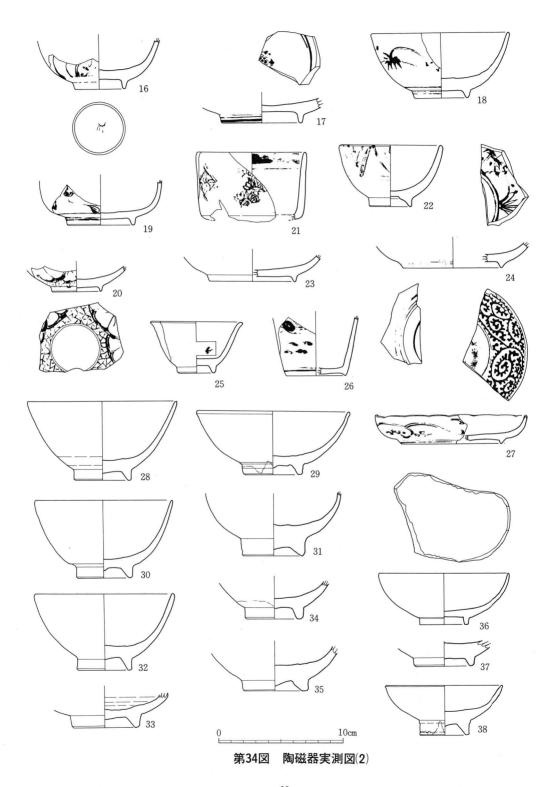
磁器 (第33~34図 5~27)

磁器類は染付がほとんどでSE4の集積部分や包含層などから出土している。器種としては碗、皿、小杯、瓶の順に多い。ほかには、国産の青磁・白磁なども少量みられる。染付碗は、碗形が大部分を占め、井戸形、筒形なども僅かではあるが存在する。文様としては草花文、梅花唐草文、雪持笹文やコンニャク印判によるものなどあり、高台内に簡略化された「大明年製」の銘が施されるものもみられる。皿は型付整形され、口縁部は輪花を呈す。主文様には蛸唐草文、裏文様には松竹梅文や梅花唐草文が描かれている。小杯はいずれも同形態で、外面に雪持笹文が施される。染付は肥前系のものが主で、17世紀後半から18世紀代の年代が与えられる。そのほか明治時代に入るものも少量出土している。

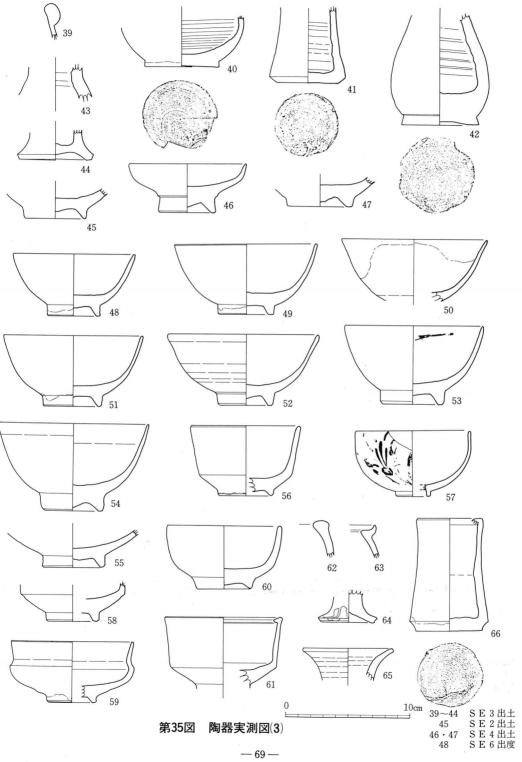
陶器 (第34~39図28~101)

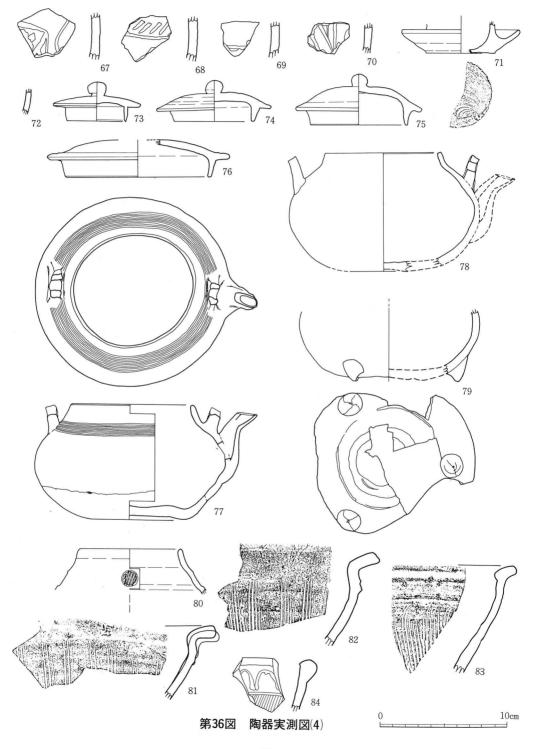
出土した陶器のほとんどは薩摩焼である。器種は碗、甕、摺鉢、茶家、鉢、花器など日常雑器がSE4の集積部分や包含層などから大量に出土した。碗の形態は体部は内湾しながら延び、高台はきれいに面取りされ外方に開く。見込みは蛇ノ目に釉剝ぎされている。器高の高さによって大・中・小形に分けられる。また、釉調にも飴色、灰緑色、白ものなどいくつかの種類がある。さらに、胎土も飴色のものと灰緑色のものとは異なり、量としては前者の方が多く生産地の違いが考えられる。甕の口縁部や底部、摺鉢には貝目が確認できるものが少量ではあるがみられる。今回出土した薩摩焼の傾向として、特に碗や摺鉢など日常生活に使用された痕跡つまり、内面が磨耗した状態のものがほとんどみられなかったことから、未使用のまま廃棄された可能性もある。そのほかに、備前焼の摺鉢が1点出土した。

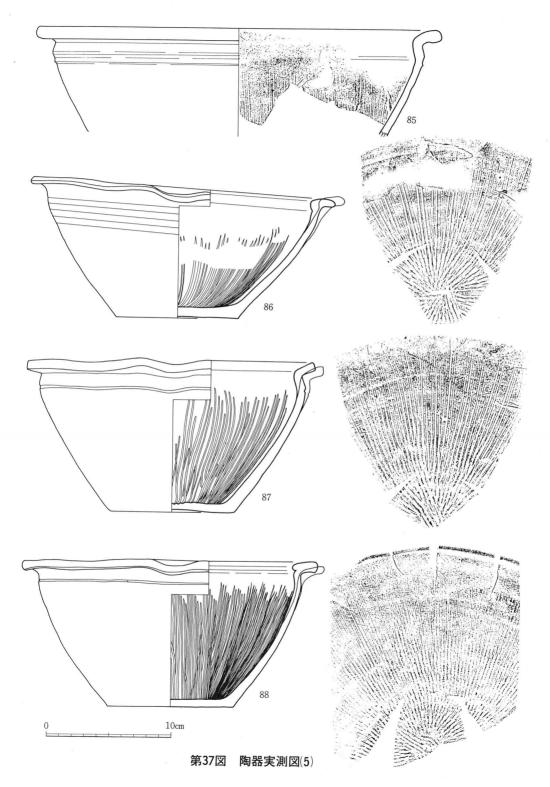


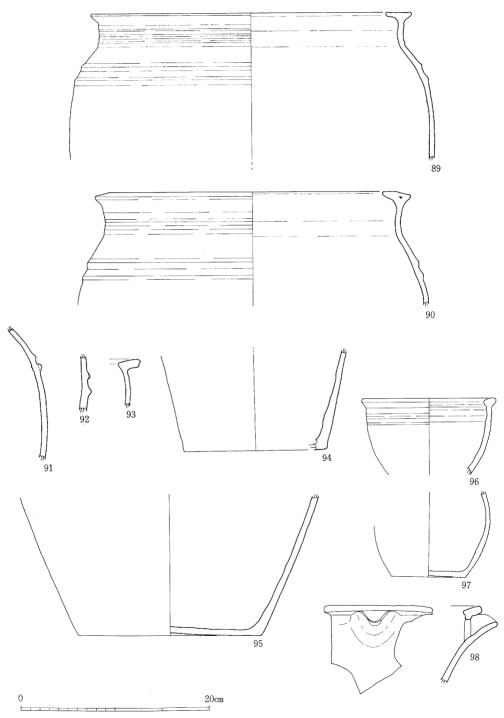


— 68 —

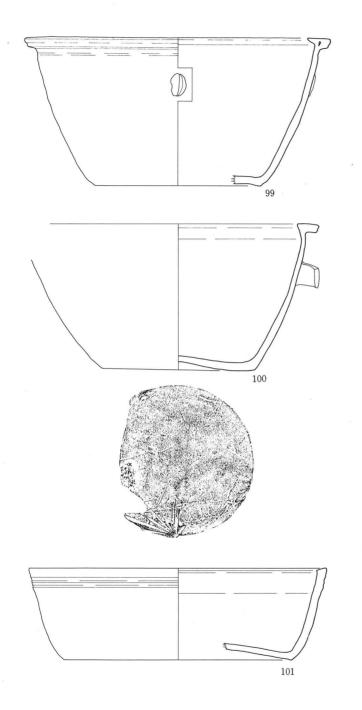


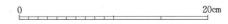






第38図 陶器実測図(6)





第39図 陶器実測図(7)

Ⅳ. まとめ

永田原遺跡の調査は、えびの市において昭和47年に九州縦貫自動車道の調査が行われて以来、久々の発堀調査となった。調査前は、古墳時代集落の検出など期待も大きかったが試堀調査の結果、包含層の残りの悪さや表土下すぐに砂礫層が露出するなど期待薄となった。しかし、結果は弥生時代の住居や古代〜近世の建物群や溝状遺構を検出するにいたり、特に、古代の遺構・遺物は、これからの研究において重要な資料になると考えられる。また、古墳時代集落の予想に反したことは、逆にこの地域で未だ発見されていない古墳時代集落の立地について候補地が一つ消法されたことになり、ある意味では調査による一つの成果といえる。ここでは、永田原遺跡の中心となる歴史時代の遺構・遺物について考えてみたい。

(1) 遺構について

永田原遺跡では掘立柱建物跡10棟、溝状遺構17条が検出された。掘立柱建物跡は、柱穴の規模、埋土の状態や出土遺物から大きく二時期に分けることができる。ひとつはSB1、3、4のグループで柱穴の大きさが径約45cm、深さが約80cmと大きく、埋土は暗褐色を呈している。建物の時期としては、SB3の北東隅の柱穴底面から完形の肥前系磁器の小杯が出土していることから18~19 Cに比定でき、もうひとつのグループは残りのSB2、5~10の 7 棟であるが、掘立柱建物の重複からみれば少なくとも 2 時期~4 時期の時期幅が考えられる。重複関係をみてみるとSB6とSB7、SB8とSB9とがそれぞれ重複し、建物の規模についても類似していることからそれぞれ建替えが行われたとみられる。また、SB2、4、10はSB6~9に比べ桁行、梁行とも短く、建物の規模としては小型で、館以外の機能が想定される。

溝状遺構は、切り合い関係からSE1→SE2→SE5、SE14、SE17→SE4の順番が確認できるが、SE4以外の時期比定は難しい。SE1はSB4~9に伴うかそれ以前につくられた可能性がある。SE4は、出土した陶磁器類からSB1などで構成される建物群に伴い、陶磁器類を出土したSE6もこの時期に含まれよう。SE3、SE17で構成される区画溝は一辺(東西方向)約35m あり北に延びている。区画内に建物などの遺構は確認できなかったが、この区画溝は切り合い関係や凹地の埋没時期との関連からSE1、SE2や凹地出土の遺物(主にB群)より以後に造られ、ある時期主要な位置を占めていたと考えられる。溝状遺構と掘立柱建物跡との関係は、溝状遺構が比較的広範囲におよぶことや発堀面積が少なかったことなどからうまく捉えることができなかった。

(2) 遺物について

出土遺物は、弥生時代、古代、中世、近世のものに分けられる。その中で最も多いのが古 代の遺物で、割合は不明だが多い順に土師器(甕・杯)、布痕土器、須恵器(甕・杯・高台 付碗・蓋・皿)、黒色土器、土師器(高台付杯・蓋・皿)、墨書土器、土錘、甑、紡錘車、 越州窯青磁となり、日常生活に必要な容器類が主体をなす。

土師器は杯・甕とも県内の同時期のものと同様な形態・法量の変化を示している。当遺跡 出土の土師器杯は胎土や焼成のちがいによって8類に分類したが、形態的には一部を除いて 類似しているため、時期差より複数の供給源となる生産地が存在していると考えられる。こ れに対し須恵質土師器杯は口径に比べ器高が低く、体部はやや薄手で口縁部はやや外反し鋭い。この胎土の土器は杯と高台付碗に限られ、特に高台外面に付けられた刻みは特徴的で特定の産地が想定される。

須恵器は窯跡などの調査が進み、ある程度の年代および生産地は確定できるようになってきた。永田原遺跡周辺では、球磨窯跡群があり福岡県や鹿児島県までその流通範囲が確認されているが、永田原遺跡出土の須恵器甕の中にも胎土分析の結果、球磨窯の数値と類似した資料がみられ、流通圏内であったことが窺える。

年代をある程度比定できるものとしては、須恵器の蓋や杯、高台付碗などに限られ、永田原遺跡出土のものについては9世紀前半から10世紀代の時期幅が考えられる。土師器杯は、小皿がまだ供伴していないこと、底部と体部の境が丸みをもつことや周辺の法光寺跡などから出土している10世紀前半によくみられる厚手の底部を有する器高の高いタイプの杯がみられないことなどから9世紀代の要素が強く、須恵質土師器として分類したものは10世紀代に比定されよう。また、須恵器甕口縁の1は大型で口縁に櫛描の波状文が施れ、7~8世紀まで遡る可能性がある。

近世陶磁器は、SE4で薩摩焼と肥前系磁器の良好な一括資料を得ることができた。特に、薩摩焼では、碗、鉢、摺鉢、甕、壺、茶家、仏器など日常容器のセット関係を捉えることが可能で、肥前系磁器類から17世紀末から18世紀代に比定される。しかし、薩摩焼には、竪野や苗代川など多くの窯跡が知られ、今後、産地の同定や流通範囲、唐津焼との関係など解決しなければならない問題点も多い。また、土師質土器とした把手付きの土器は、高崎町様屋敷遺跡や都城市松原地区遺跡から出土しており、近世陶磁器と供伴するものと思われる。

(3) 布痕土器について

布痕土器は、用途として北部九州の製塩遺跡からの出土例が増加し、焼塩壺として考えら

れているが、県内では製塩遺跡や明確な製塩土器は確認されていない。布痕土器の年代の上限は8世紀の遺跡が見つかっていないことなどから確定は出来ないが、ほぼ9世紀中~後半に位置付けできる。下限は、糸切り底の土師器杯や皿とは供伴していないことからそれ以前として12世紀代と考えられる。

出度量を総重量で比較してみると発掘面積にもよるが、平畑遺跡で50.5kg(約85個体分)、前原南遺跡8.5kg(約14個体分)、陣ノ内遺跡約7.5kg(約13個体分)、永田原遺跡では14.5kg(約24個体分)と比較的多い。また、10世紀前後の竪穴住居から出土した布痕土器は大体2~3個体で、これが1住居が保有する(塩の)量と考えると、永田原遺跡の出土量はかなり多くの人間の存在(あるいは長期にわたる居住)を裏付けているのではなかろうか。県内の布痕土器出土地分布からみれば、海岸線に限らず内陸にもかなりおよび、以前考えられていた官道沿い以外にも多数発見され、日常的生活の必需品であったようである。ただ、「駅」などがあったとされる地域には、特に多量に出土する傾向は感知される。

(4) 遺物の分布状況

遺物の分布状況は前述したように4箇所(A~D群)に集中している。A群が最も出土量が多く、ほとんど全器種の土器類がみられる。遺物は建物内部より梁(東西)方向の外側に多く出土する傾向がみられ、SB6~9で使用した土器類を捨てたものと考えられる。B群は方形区画周囲および凹地から出土した遺物で、出土量は少ないがA群の土器組成に類似している。遺物の大部分は流れ込みであるが、A群でみられない須恵器甕Ⅱ類が出土していることから時期差が認められ、A群に付随する建物以外に建物が存在していた可能性を示して

いる。C・D群は土器の出土量および器種構成は少ない。

遺物の出土量および分布状況と遺構の配置を合わせて当時の生活空間利用を考えた場合、A群が主要な日常生活の場であったと思われる。B群も建物など検出されていないが、A群と同様な土器組成をしていることや方形区画溝が造られていることからなんらかの生活空間があったと考えられる。これに対しD群のSB2やA群のSB5・10付近は遺物の出土量が非常に少なく、建物の規模も小さいことから館跡以外の用途が考えられ、「倉庫」、「作業小屋」、「馬屋」なども可能性としてあげられる。また、少量ではあるが龍泉窯青磁や備前焼、回転糸切り底の土師器皿など小片が出土していることから、15~16世紀にかけてなんらかの生活が行われていたと考えられる。

近世陶磁器類は、SE4、6のほか、D群(SB1、3周辺)から多く出土している。これらの遺物はSB1の柱穴から出土した小杯とほぼ同時期で、SB1、3、4の建物とSE4、6の溝状遺構は供伴すると考えられる。そのほかA群でも薩摩焼などの陶器類が出土している。 $B\cdot C$ 群ではほとんど出土していない。近世の集落としては、SE4など大係りな溝状遺構もつくられ、陶磁器類も多量に出土していることから、比較的大きなもので、居住地はSE4より東に位置していたと考えられる。

(5) 遺跡の性格

永田原遺跡の中で主体をなすのは9世紀前半から10世紀にかけて形成された建物群である。出土した土器の組成は墨書土器や黒色土器、多量の布痕土器など、球麻駅が位置していたと考えられる宮崎学園都市遺跡群と同様な土器組成をしていることや周辺には法光寺や香取神社などが知られ、この地域が川内川左岸において重要な地域であったことを示している。そして、「長」という墨書土器からすれば地域の首長的役割をもった「郷長」などの居館が存在していた可能性も指摘できる。

以後、空白期があって15~16世紀にかけて何らかの生活区域があったと想定されるが、出土遺物が少ないことや一段高い段丘面に中世の集落が確認されていること、永田原遺跡近くにいくつか島津氏と伊藤氏の古戦場などあり、居住地にはあまり適していなかったのではないだろうか。その後、また、断絶した期間があり、18世紀になって集落がつくられる。

このように、永田原遺跡では集落が散漫な状況で弥生時代から断続的に形成されるが、これは、宮崎県における集落形成の一つの傾向として捉えられる。

註

(1) 『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979

- (2) 「球磨窯跡群」『生産遺跡基本調査報告書』Ⅱ 熊本県教育委員会 1980
- (3) 奈良教育大 三辻利一氏の分析結果による。分析結果は本書掲載。
- (4) 佐藤雅彦「薩摩」『世界陶磁全集』7 小学館 1980「竪野(冷水)窯址」『南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発堀調査報告書』社団法人 鹿児島共済会南風病院 1978
- (5) 鹿児島県黎明館の山下氏は、永田原遺跡出土のものは、使用の痕跡がほとんどみられず、 鹿児島県の薩摩焼に比べて、胎土や器形などやや異なることなどから付近に窯の存在を 指摘された。
- (6) 「様屋敷第1・2遺跡」『高崎町文化財調査報告書』第2集 高崎町教育委員会 1990
- (7) 「松原地区第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第7集 都城市教育委員会 1989
- (8) 森田 勉「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館 1983
- (9) 宮崎学園都市遺跡群の調査をもとに考えた。
- (10) 「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- (11) 「前原南遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
- (12) 「陣ノ内遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
- (13) 平畑遺跡や前原南遺跡、陣ノ内遺跡、下田畑遺跡検出の住居を参考とした。 「下田畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第3集 宮崎県教育委員会 1985
- (14) 『海の生産用具』埋蔵文化財研究会 1986
- (15) 「海の中道遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第87条 福岡市教育委員会 1982 近藤義郎『土器製塩の研究』 青木書店 1984
- (16) 「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第1集 えび の市教育委員会 1985
- (17) 「日向地誌」に白鳳二年創建という記載がみられる。 平部嶠南『日向地誌』 1929

土器観察表(土師器甕)

	物 出 土 器種 器形	十 器種 器形 (cm) (xxx (cm)) (xx	法 量 (cm) 器形	法 量 (cm)	法 量 (cm)	【 (cm)	J.	1 f	御	噩	胎	焼成	麗	糊	軍
番号 位 置 日径 底径 局 N 国 外	号 位 置	置 口径 氐径 局 內 囬	口径 底径 局 內 面	径 医径 局 別 囲	径 医径 局 別 囲	中国	国区		\$	E			S		
1 D-4 <u>上部器 口縁</u> 協	D-4 <u>土</u> 師器 口線 記念い楹 部	- 4 上師器 口縁 にぶい橙 鸛 部 部	口縁におい婚品	にない権					韓		7 mm前後の石粒及び白、灰、茶、透明、半透明の砂粒を含む	良好	よこナデ たてのヘラ削り (下 から上)	よなけま	
2 D-4 % (浅黄橙 (水黄橙 (ルネい黄橙))	D-4	4 / / / / / / / / / / / / / / / / / /	浅黄橙	浅黄橙					浅黄橙にぶい黄	<u>ğ</u> pi	4mm位の灰色の石粒1コ、2.5mm 以下の石英のような砂粒、黒く 光る細砂粒を少量含む	良好	よこナデ	ナナ	
3 M-6 " 30.2 億 によい権 E-4 " 30.2 億 億	M-6		7 30.2 橙	30.2 檔	翻				にぶい橙種		5mm程の薄茶の粒、2mm程の灰色の 粒、1mm以下の白・黒・茶・灰・透明・光る黒色の砂粒及び微粒を含む	良好	よこナデ く 方向の削り	よこナデ ハケ目	
4	(1.35.1) (2.35.1) (4	(1.3.1.) (2.3.1.) (4.1.1.) (4.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1	(1.3.1.) (2.3.1.) (4.1.1.) (4.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1	にぶい橙					蓜		黒く光る細砂粒、1mm位の白い砂粒、透明で光る砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ、マ 方向に ヘラ状工具の跡あり	
5 D-4 0 0 にぶい赤褐 1 こぶい赤褐 にぶい褐	<u>D-4 </u>	-4 ~ ~ にぶい赤褐 暦 に	にぶい赤褐に	にない赤褐 暦	超 に	超 に	超 に	超 に	権 にぶい掲		2 mm以下の灰、茶、褐色の砂粒 を含む	良好	よこナデ・スカ向のナデ	ナナット・フィット・フィット・フィ	
9 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	T-7 。 。 にぶい黄橙 に	- 7 ~ ~ こぶい黄橙 に	この対象権	におい黄橙に	Ti	Ti	Ti	Ti	にぶい黄木	đơi	2mm以下の茶・白・白透明の粒、 1mm以下の灰・黒・茶透明の砂 粒を含む	良好	4 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 +	よなすず	
7 C-4 " " 浅黄 明黄褐	C-4	- 4 ~ ~	× 概	淡					明黄褐		1mm以下の褐、灰の細砂粒を含む	良好	よこナデ 風化の為調整不能	ナデ よこナデ	
8 L-6	1 − 6	W W W W W W W W W W	、 横 横 橋 巻 巻	※ 数	塑淡	塑淡	塑淡	塑淡			2mm以下の茶・赤茶黒・透明・光る茶・光る黒・白色の砂粒を含む	良好	よこ方向のハケ目 → 方向の削り	よこナデ よこ方向のハケ目	
9 E-4 ^ / にぶい赤褐	E-4	- 4 。 。 4 - 4 - 7 - 7 - 7 - 7 - 7 - 7 - 7 - 7 -	コ 嬰ロダコ	におい櫓に	77	77	77	77	にぶい赤袖	mio	1mm~2.5mm程度の透明の砂粒、 2mm前後の黒い砂粒、1mm~1.5 mmの黒く光る砂粒を含む	良好	よてナデ	よこナデ	内面にスス付 着?
10 L-6 ,	L-6 " (こぶい黄橙 ※ N + N + N + N + N + N + N + N + N + N	-6 にない黄橙 * * <	に次い黄橙 淡 浅黄橙	にぶい黄橙淡漬黄色淡淡黄色	黄橙淡	黄橙淡	黄橙淡	黄橙淡			2.5mm~3mm位の茶の石粒数個、3.5 mmの石英のような砂粒に0.5mm以下の 茶灰・褐色の細砂粒を含む	良好	よこ方向のあらいハ ケ目、風化の為調整 不能	ナデ、斜方向のあらい ハケ目、よこナデ、た て方向のあらいハケ目	
11 E-3 / 15.6 橙 明黄褐	E-3	-3 / / 15.6 橙	7 15.6 版	15.6	数 区	韓	韓	韓	明黄褐		3mm前後の茶・白色の粒、2mm 以下の透明・茶・黒・白・光る 黒色の粒及び光る微粒を含む	良好	よこナデ、 * 及び ・ 方向のハケ目、 * 方 向の削り	よこナデ	
12 D-4 0 n 赤褐 にぶい赤 にふい褐 n 赤褐	D-4 " In がる IL ぶい橋 In がる II がる	-4 % (1) (1) (1) (1) (1) (2) (2) (2) (2) (3) (2) (4) (2) (5) (2) (6) (2) (7) (2) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (8) (1) (9) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (2) (1) (3) (1) (4) (1) (5) (1) (6) (1) (7) (1) (8) (1) (9) (1) (1) (1) (1) (1) (2) (1) (3) (1) (4) (1) (5) (1) (6) (1) (7)	明赤褐 にぶい赤 にぶい褐 明赤褐	明赤褐 にぶい赤 にぶい褐 明赤褐	: にぶい赤 褐 明赤褐	: にぶい赤 褐 明赤褐	: にぶい赤 褐 明赤褐	: にぶい赤 褐 明赤褐	惟	泛	5mm前後の茶色の粒、2mm以下 の赤茶・茶・灰・黒・透明・光 る黒色の砂粒を含む	良好	よこナデナデナデ	よくナチ	
13 D-4 % % D-4 % が D-4 が D-4 が D-4 におい を D-4 におい 相 D-4 におい B-4	D-4 " D5い黄橙 原黄褐	4 ° 。	におい黄橙灰色	にぶい黄橙灰黄色	遊	遊	遊	遊	にぶい楢にぶい褐		3.5mmの褐色の石粒1コ、4 mm位の灰色の石粒1コ、2 mm位の茶の石粒1コ、ガラス質の透明の光る細砂粒、黒く光るガラス質の細砂粒、日・灰色の細砂粒を含むス質の細砂粒と含む	良好	よこナデたてナデ	ナナンセントンナン	

土器観察表

遺物	田田	-		批) #	(cm)	囪	噩		4	HIE WITH	撥	
	位置		命	四	底径	恒	石	外画	H H	発送	内面	外面	配
		上師器	四十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二				# 1 2 2	草井	黒く光る細砂粒、透明で光る細砂粒、 多田で光る細密料 の	中		よこナジ	内面にスス付
	× 	嬲	岩				こぶい真位	(久寅 恒	砂札、2mm~3mmの孔日巴の砂 粒を含む	艮	チェイナ	よこハケ目	着か?
	-						# 100	\$	2 mm以下の灰・黒・白・透明・	24 早	よこ方向のハケ目	4	
	SAL		*				トネい真位	坦	光る黒色の砂粒を含む	以	▲ 方向のハケ目	よこイナ	
							# \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \		1 mm位の黒く光る砂粒、白い砂	14	îi 4 1	آآ ا ا ا	
	년 -		*				B128-1	<u> </u>	粒、半透明で光る砂粒を含む	ĸ k	7 () 4	717	
		-					25	8	径1mm以下の黄色、透明で光る	14	ナンナル	H	外面に粘土の
	0	<u> </u>					西	題	砂粒、黒く光る砂粒を含む	ĸ k	丁寧なナデ	7174	たるみあり
	E – 4	*	*	24.6			明赤褐 褐 灰 黄 灰	にぶい赤褐	4 mm程度の灰色の粒、3 mm程度の赤茶・茶色の粒、2 mm以下の白・黒・赤茶・光る黒透明の砂粒、及び光る微粒を含む	良好	よこナデ よこ方向のハケ目の 上をよこナデ?	よこナデ タテ方向のハケ目の 上をよこナデ?	内面にスス付 着
	-	*	`				4 1 2 1 1	ğ	1mm~2mmの半透明で光る砂粒、	24 #	. îĵ	î! - 1 - 1	
			,				西屋から	7	1 mm位の白・灰の砂粒を含む	Ř K	J) f	
		*	*				明赤褐 暗赤褐	赤褐	7 mm程の茶色の粒、2 mm以下の 白・茶・透明・黒く光る砂粒、 及び光る微粒を含む	良好	よこなで く方向の削り	よこナデ タテ方向のハケ目の 上をよこナデ	
	8 - 4	*	*				\$	\$ (\tilde{z} \)	2 mm~3 mmの灰・茶の砂粒を多	54年	摩耗していて調整不	摩耗していて調整不	
			\				酉	国からない	く含む	ĸ K	明	明	
	E - 5	*	*				にぶい褐	にぶい黄橙	黒の細砂粒を含む	良好	14 17 17	よこナデ	
				0 12			田七祖	224	白(2mm径程度)茶(1.5mm径)	1	↔方向のハケ目	よこナデ	外面にスス付
	r _ 0	>	`	0.12			州亦梅	ē	黒 (1mm径)の砂粒を含む	政	1方向の削り	↔方向のハケ目	樂
	7	*		97.9			11年2月	4	茶・灰色の石粒及び白・茶・灰	44	よこナデ	よこナデ 1時は (おん 田本	
			>	7.17			M. M. Fe	印	・黒色の砂粒を含む	不良	削り	コ 和 で 一 面 な し か く し な く し な し か く こ る)	
				1			E4	にぶい褐	5 mm位の茶色の粒1コ、2 mm以下の	1	よこナデ	ナデ、よこナデ、よ	
	F - 4	*	*	11/			(-3.03/18	魯	梅・灰目の砂粒、1mm以下の右央のような半透明の砂粒を含む	以	ナデ	この半行線タタキ () 9) の上をよこナデ	
		•		9			明赤褐	日子、156 元(2mm位の透明で光る砂粒、1mm の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	174	よこナデ	,	
			•	13.0			魯	BU: 1 (P)	い砂粒、黒く光る細砂粒を含む	K K	ナデ	4.77	
		·	,	5			日 养	ş	1mm位の透明で光る砂粒、1mm ら、なの匠をの砂粒、mi、m	14		î; 14 16	
	리 		`	7.07			/අ	每	~~2mm/Lの次巴の砂粒、無い相 砂粒を含む	政	えカ回のナナ	よいナイ	

1	析									ス付	T						
#	匯									内面にスス付着				1			
鄰	外面	よこナデ	よこハケ目	ナチ	ナニナデ	よいナギ	たて方向のタタキの上をよこ方向のハケ目、 一部は終方向のハケ目	たて方向のタタキの 上をよこ方向にハケ 目	ナンナッキ・キタタキ	タタキ	タタキナデ	ナンナジ	*+				
平 田	内	よこハケ目	▲方向のナデ	よこ方向のあらいハ	ケ目、よこナデ	よこナデ † 方向の荒いナデ	+ +	++	よこナデ 板状工具による強い ナデ	↑方向の削り	指ナデ	風化して調整不明	11 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1				
4	が成	24 4	 式 卒	1	以 以 文	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好				
	H	1mm弱位の半透明で光る砂粒、1mm弱位の半透明で光る砂粒、	1000円・ボンが4、ロ、ハ 6細砂粒を含む	1mm以下の褐・灰色の細粒を含	¢.	8mm程度の灰茶色の粒、5mm程度の灰子の 灰茶色の粒、3mm程度の灰茶の粒、2mm 前後~微細の黒・茶・白・灰・透明・白透 明・光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	白い微細粒、黒く光るガラス質 の細砂粒、褐色の細砂粒を含む	2mm位の自い砂粒、1mm以下の 灰褐・黒く光るガラス質の細砂 粒を含む	径2~3mmの茶の粒子、透明で 光る細砂粒、黒くて光る細砂粒 を含む	2~4mm程度の黄褐色の粒、透明で光る粒子を含む	5mm前後のうす茶、茶の粒、3mm以下のうす茶・白・茶・黒・赤茶・透明の砂粒及び光る微粒を含む	2mm以下の茶・白・黒・赤茶・透明・光る黒色の砂粒及び光る 微粒を含む	3mm程度の白色の粒、2mm程度の赤茶の砂粒、1mm以下の灰・白・黒・透明の砂粒及び光る微粒を含む		-		
HE .	外面	1000年出	P1 01 / PE	24	母いなり	にぶい橙	暗褐	暗褐	明赤褐 灰 褐	赤褐	台	橙明赤褐	明褐				
鱼	内画	\$	32	にぶい褐	にぶい橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい赤褐	黑绳	浅黄橙	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙				
(cm)	恒																
画	底径				-												
地	口径																
淮品		器口黎口	姆			*	胴部	*	*	*	*	甑酮部	既取手				
部部	Œ	岩	徽	3	•	*	*	*	*	*	*	*	*				
田田		× 1		Ĺ		$\begin{array}{c} L-8 \\ K-7 \end{array}$	D – 4		E – 4	E - 4	E 4	D – 4	D — 5				
遺物	華市	86	3	06	63	30	31	32	33	34	35	36	37			,	
厘 図	奉	06	3	*		*	*	*	*	*	*	*	*			•	

土器観察表(土師器坏・高台付埦、須恵器坏・高台付埦、墨書土器、土師質土器)

,	ŀ	ŀ			-		(74/)	噩	BKP.	緻		
出 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	(K) 重 (cm)	重 (cm)	(cm)		型	+	()	切り離し	17	1	焼成	備布
mm/ 口径 底径 器高	口径 底径 器高	径 底径 器高	器		H.			くう 米	外积	200		
-4 环 13.0 7.8 4.3 1mm以下の褐色・灰色の細砂粒を含む	13.0 7.8 4.3	7.8 4.3	4.3		1mm以下の褐色・灰色の細	砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	0	ą	þ,	良好	正類
-6 环 -1 Imm以下の赤茶・茶・黒の砂粒を含む	7.1			1mm以下の赤茶・茶・黒の	1mm以下の赤茶・茶・黒のイ	砂粒を含む	にぶい橙浅黄橙	0	υ	В	良好	正類
-4 v 6.4 灰色・うす茶と透明で光る細砂粒を含む	6.4 灰色			灰色・うす茶と透明で光る線	 	形物を含む	にぶい橙にぶい橙	0	æ	в	良好	
4 环 12.15 7.5 5 開・茶・褐色の1mm位の砂粒を含む 4.4	12.15 7.5 4.0	7.5 %	4.4		黒・茶・褐色の1mm位の砂粒	を含む	にぶい黄橙にぶい黄橙	0	Ą	æ	良好	正類
-4 FF 7.0 2mm位の灰色の砂粒、黒白の砂	そ 7.0 2mm位の灰色の砂粒、	2mm位の灰色の砂粒、	2mm位の灰色の砂粒、			黒白の砂粒を含む	明黄褐 にぶい橙	0	q	æ	良好	B類
-4 v 7.4 1mm以下の灰色・褐色・ケリー む	1.mm以下の灰色・褐色 で	1mm以下の灰色・褐色む	1mm以下の灰色・褐色む	m以下の灰色・褐色	m以下の灰色・褐色	・クリーム色の細砂粒を含	にぶい橙・浅黄 にぶい橙	0	q	æ	良好	
- 7 。 7.0 福色・灰色・クリーム色の細砂粒を含む	7.0					立を含む	にぶい橙 にぶい橙	0	q	'a	良好	
. , 7.0 1mm位の白い砂粒、2mm位の茶	7.0 1mm位の自い砂粒、	1mm位の自い砂粒、	1mm位の自い砂粒、	1mm位の白い砂粒、2mm位の茶	1mm位の白い砂粒、2mm位の茶・	2mm位の茶・黒の砂粒を含む	にぶい黄橙 浅黄橙	0	ą	ĸ	良好	区類
- 6	7.2			褐・黒の細砂粒を含む	褐・黒の細砂粒を含む		にぶい黄橙にぶい黄橙	0	в		良好	
6 × 6.5 4mm以下の茶色い石粒を含む	6.5			4mm以下の茶色い石粒を含む	4mm以下の茶色い石粒を含む		浅黄橙浅黄橙	0	Q	ф	良好	C類
SE6 环色・褐色・クリーム色と透明で光る細砂粒を含 F 12.0 8.0 3.8 t 数ヶ所 2mm位の褐色の砂粒を含む)	12.0 8.0 3.8 む (数ヶ所		派色・褐色 3.8 む (数ヶ所	灰色・褐色 む (数ヶ所	灰色・褐色・クリーム色と透明で む(数ヶ所 2mm位の褐色の砂粒を	*光る細砂粒を含(含む)	浅黄橙 浅黄橙	0	υ	q	良好	B類
* 12.7 7.3 4.5 黒色・褐色の細砂粒を含む	12.7 7.3 4.5	7.3 4.5	4.5		黒色・褐色の細砂粒を含む		にぶい橙にぶい橙	0	q	ದ	良好	B類
J-6 47 L-6 底部 6.4 1mm以下の褐・白の不透明の砂粒を含む	不 6.4			1mm以下の褐・白の不透明の砂	1mm以下の褐・白の不透明の砂	並を含む	古 古	0	8	В	良好	B類

	析			ļuz	gi.	1c	ııx			kur:		ţrr	nk	Įpri	ut	ļrī	m = = = = = = = = = = = = = = = = = = =	tri	n'	Ser	II.						mrí		
		14	_	7 7 *E						F A 類		, L		9* ✓ 2		坦 米 V		¥.		\(\frac{\pi}{\pi}\)					\$.L.		B		_
H		24号	χ̈́.	古 4亿	Ř,	4	及	4	X X	良好		4	一一人良	五十二	Ř Š	14 A	Ř –––	H 42	 K X	74 ft	<u> </u>	4	以以		良好	1	—— 页		
科	乙原	``	ಕ		O	`	æ			В		7	3		ಸ	•	ਰ 	-	۵	`	rd		R		٩		ಹ		_
	外底		B	"	75		°		ಡ	rd			ن	-4	o	٠	ಸ 		υ 		ದ				æ		٩		_
High High	温米																												
棚	切り離へ))	()	()	0)))					()				0	()		
(A)	K																												
	田謡	灰白・淡黄	灰白	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	にぶい橙	にぶい橙	黄橙	黄橙	浅黄橙	浅黄橙	福	翻	黄橙	黄橙	淡黄	淡黄	黄橙	黄橙	浅黄橙	黄橙	に会い櫓	にぶい櫓	橙	魯	1990	地にいい
	#	1		1 三十七田 丼 匠存仓留房垫子令子	10回文「2ボ・米・火田2番号を3から	灰色・うす茶・クリーム色の細砂粒と所々に 2 mm	位の砂粒を含む	1mm以下の黒色・褐色・灰色と透明で光る細砂粒	な 合 む			来了学口水(一里,四、大会心学等	元の作文で日・新 	1. 6. 金田及(本大) 金子。		2mm~3mm位の茶・黒の砂粒	白色の光る細砂粒を含む	1mm位の黒い灰の細砂粒	3mm位の灰の砂粒を含む	田、知の対な心中令だ。	ボン和がたのが、まる、またので	2.5mm位の自の粒、白の細砂粒、1mm位の灰の砂	粒を含む		1 黒色・灰色の細砂粒を含む	1mm以下の黒・灰・クリーム色・透明で光る細砂	粒を含む	1 人名 1 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	ー 1mm77~20米田・布田/80円で井で着われ 夕河が
(CII)	器配	t					2.0			4.8		-			#	-		10			D.		~		5.4	<u> </u>			_
画	底径	5					7.7			7.4		0 4		u V		9		7	:	9	-	,		<u> </u>	7.4		o. ×		_
批	四		7.			9	12.2			12		10 6	177			19.4	. 7								13.0				_
	器	2.7	Ź	芹	底部	Ļ	*	ス	兩部	六		`	`	片	底部	2+	ź .	坏	底部	*	`				*	汝	底部		
1	位置		리 #		e 		•		٥	G-7		٦				C A 1	4	C A 1	C.	S A 1	E - 4		D - 4	E-4	E - 5		0		_
—	番号	E	Te	C	7c	9	23	i	54	55		Z,	8	7,	'n	o O	9	G.		09			 To		79	-	93		
図画図			17		<u> </u>		*						,		,	*	,	*	,	*			>		22				

図面	遺物	田田	-	郑	<u>=</u>	(cm)			High High		緻	:		
0)	1		臨	I	定汉	铝		(五) (五)	翠	一外底	力底	焼成	証	析
	# 7		_	#	11.4	直提.			* ~ ~ *	+	-			T
22	92	E - 4	*	13.5	5.25	4.2 ~ 4.5	白・黒・灰・茶の砂粒を含む	浅黄橙浅黄橙	0	q	q	良好	B類	
	99	E - 5	大 避		6.0		黒色・褐色・クリーム色の細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	0	ъ	ą	良好		
	29	D – 4	*		長7.4短7.1		うす茶・灰色と透明で光る細砂粒を含む	右 衛				良好		
	89	L – 6	*				2.5mm以下の自い細砂粒 0.5mm以下の褐色の細砂粒を含む	浅黄橙浅黄橙			ಜ	良好		
	69	D — 4	*		5.4		褐・黒色の細砂粒を少量含む	黄 黄	0	æ	q	良好		
	0.2	D – 4	*		6.7		4mmの灰色の石粒、1mm以下の褐色の細砂粒を含む	超 超	0	ದ	ĸ	良好		
	71	ਸ ਹ	*		7.2		4 mm以下の褐色、1.5mm以下の灰色不透明の石粒 を含む	遊 遊		q	'æ	良好	A 類	
	72	S A 1	*		7.0		黒色と透明で光る細砂粒を含む (1ヶ所、1mm大の白い砂粒を含む)	黄 黄	0	в	q	良好		
	73	D 4	*		6.8		4mm以下の白い不透明の石粒、灰色の砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	0	٩	'æ	良好	B類	
	74		*		7.7		灰色・褐色と黒・透明で光る細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙		ψ	þ,	良好	下類	
	75	K – 6	*		6.8		1mm位の黒・赤茶の細砂粒を含む	田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田	0	٩	*e	良好	C類	
	92		ス	16.5			3.5mm以下の褐色の石粒、2.5mm以下の白の砂粒、3.5mm以下の原色の砂粒を含む	黄橙・暗灰黄橙・にぶい黄橙				良好	A類	
	77		本 磨		6.9		1mm以下の褐色・灰色と透明で光る砂粒を含む	浅黄橙 淡 黄	0	۵	в	良好	正類	
	78	S E -6	*				1mm位の赤・茶・白の砂粒、白く光る細砂粒を含む	淡淡黄黄		σ,		良好		

	袮																											
<u></u>	======================================				₽ W									- American	A類			1	A類			C類		宝珠しまみ	出土	Y June 1. The	H +	內黑土命
L		17		1	以以	77 🗸	K K	4	政	74 4	ĸ X	14	政	1	以	1	足对	!	及对	良好		良好	1	良好	自标	 ζ	14	以 中
糊	内原	\	ಡ		ેલ						ಪ				108							p						
FAGE	外底		ದ		ಡ						ಸ	-	Ω									eg .						
	と来))))																			
1110	むった人)						—— Э		-						-			
*	_€																											
;	##																											
	扣	鄭		ga;	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	නිස්	ಕೆಣ	にぶい黄橙		如	超	#n4	And	にぶい黄橙	す黄橙	an	ale.1									
		にぶい櫓	麵	浅黄橙	13.71	13.77	125.77	浅黄橙	浅黄橙	125.1	承	にぶい権	にぶい楹	浅黄橙	浅黄橙	125.77	にぶい黄橙	浅黄橙	浅黄橙	所 所 財	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	顧	噩	明黄褐	置
														透明	(24)													
	Н			**************************************	<u> </u>	_	,							2mm以下の灰・褐・クリーム色の砂粒と黒・透明	で光る砂粒を多く含む (砂粒がざらざらしている)		\$€)	1mm内外のうす茶・灰色・半透明と透明・黒で光		\$\$ ₽		(1ヶ所、5mm大の白っぽい灰色の砂粒を含む)	0.5mmの白い砂粒、1mm~0.5mmの茶色の砂粒を含					
				原色 ン漆田 か米 Z 細及対 ち合む。	# # # # # # # # # # # # # # # # # # #	, 1mm位の白・茶・黒の細砂粒を含む	I J		5					色の砂	がざら	黒・褐色・透明で光る細砂粒を含む	(1ヶ所、4mm大のうす茶の砂粒を含む)	透明と		黒色・褐色・クリーム色の細砂粒を含む		斥色の 種	間の茶		全			
		44	D II	ス部店	(a) MHT/2	*(2)#		翌日色・茶・単の細砂粒を含む。	2 7 7 7			1mm 以下の緑の維砂粒を全む	J J	4-11	(砂粒	細砂粒	1茶の1	角・		のの	含む	¶(1).#) (~0.5		・灰等、1mm以下の砂粒を含む		100)
		翌日毎・原の維砂数を会ず	2	*	5	万置・		会離を	i i	45) I	細砂粉	1	褐・ク	く含む	で光る	このうす	茶·灰	る砂粒などを多く含む	11-4	灰色・褐色の細砂粒を含む	:の白い	1, 1mm		以下の ₁		原・茶筅の細砂粒を会む	I J
á	Ш	は	The Control	カンド]]	- T		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	ŧ i	砂粒を		の緒の	7	7)派・	泣を多	·透明	4mm≯	りうすう	₩ ₩ Ľ	9.7	5の額	5mm 大	い砂巻		1 mm		(細心)	2
		和 4) ד	類包, 压	1	m(T,O)		祖	ָ ֓֞֞֝֞֝֞֝֞֝	灰色の舗砂粒を忽む		11 K	-	n以下(もる砂料	褐色	ヶ所、	内外の	着なる	i - 褐色	. 褐色	7所、	明の田		灰等、		林	7 7
	Juli:	514	7	4月	2									2 m	£.	毗		1 m	るを	黒色	灰色	(1	0.5	\$	茶		Ŀ	:
(cm)	器配	· ~	,			2 2.0		1 65																	4.0			
神	E 底径	00	;			9 9.2	_	 						7 4	:	7 6	:	7 6	:	7.3		10.0			4.8			
	口径			************		10.9		5.7						150														
	(H		底部	*		Ħ	所明	*	所略	*		*		高台付施	灰部	*		*		*		·	以		7	医验	苁	口縁部
出土	位置	D-10		1 - 7	İ					E - 4		L-8	ĺ							Н — 7	E-4	E-5	- C) - 4	4-0	- 1
遺物	番号	62		08	3	81		82		83	-+	84	_	85		98				88	- 08	-	- 06		91 L	-	92 D	1
国国	番号	22		*		*				*				23									-					-
																	\perp							ı				1

	析	臨	器	24	器	器	器	器組	体部外面に墨書	体部外面に墨書	須恵器 体部外面に墨書				
	無	内黒土器	内黒土器	内黒土器	内黒土器	内黒土器	内黒土器	内黒土器	体部外	体部外	須恵器 体部外[須恵質	須恵質	須恵質	須恵質
	焼	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
整	内											æ	æ	, B	, a
-	外底											æ	ĸ	ಹ	в
鰮	を表														
ent.	切り離くラ											0	0	0	0
(4)	K														橙·灰白 (一部口唇部) 灰 黄
	HE TO		塑							浅黄橙		超 超	塑		姆—)
	倁	にぶい橙黒	にぶい黄橙黒	明黄褐黑褐褐	R	原		明赤褐黒	鄭	灰黄褐・浅黄橙 橙	にぶい褐	にぶい黄橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙淡黄	超 額	橙·灰白 灰 黄
		그 패	12 重	田田	黄黑	黄 黒			- BENT	N W		2 2		* *	# 12 12
	胎	茶・灰等の細砂粒を含む	細砂粒を含む	茶・灰等の細砂粒を含む	細砂粒を含む	細砂粒を含む	茶・灰の 1mm以下の砂粒を多く含む	2mm以下の茶・肌色等の砂粒、透明に光る粒を含む	・褐色の砂粒を含む	:・茶・黒・白く光る細砂粒を含む	細砂粒を含む	-黒・灰の細砂粒を含む	1.5mm前後の白色透明の砂粒、黒い細砂粒を含む	1mm径以下の黒の砂粒を含む	黒と白の砂粒を含む
-	加		果	**	- 架	一架	**	22 \$	411	卡	報		-		3.95 黒
(m)	·							10.6				7.0	7.1	7.0	5.6 3
;	-							-							12.5
	器		*	*	*	大 端	*	*	墨書土器 坏口緣部	*	墨書上器 坏体部	大 婦			採
4	1 12	ы 9 1	D - 5	D-4	r - 6	J - 5	T - 6	D-4		9 – I	D - 4	E - 5	E-4	D-5 E-5 J-6	D-4 D-5
\$4.66.0			94	95	96	26	86	66	100	101	102	103	104	105	106
-	地区 財					*			*	*		*	*	*	*

L	遺物	田田	L	拱	()	(cm)			##E	4864	整			_
	:		器形	_		I	- 1	白鵬	切り離り	1	1	焼成	備表	
W-	番和	位置	-	口	既径	部			ヘシー糸	外限	公			
	101		24	100			* 1. 石 6 段章 4. 令十.	褐・にぶい赤褐(一部口唇部)				2.4 4	石市原	
	707	피 4		13.3	0.7	4.3	条と目の砂粒を含む	にぶい褐・橙(一部口唇部))	æ	rd	以	須忠賞	
"	2	P - 17	*				0.5mm~2mm位の乳白色の砂粒、1mm位の黒い砂	にぶい褐				1	# H.	
	807	D-4	床部				粒を含む	にぶい褐		ದ	q	以	河 馬河	
	3			9	,			橙·褐灰 (一部口唇部)	(1	1 1	Т
	601	D - 4	\	12.4	Ţ.,	4.0	日・こけ糸田の砂粒を泊む	にぶい橙		es	ದ	以以	須馬賞	
1 `	9		*	0			H + Am + L. s. t A - A - A - A - A - A - A - A - A -	橙·黄灰				-	1 H	_
	011		口縁即	13.0			黒の相砂粒を含む	橙・にぶい橙				政	須馬寅	
	111	D-4		-	c		H Complete to the state of the	淡黄・にぶい黄橙				├	10 H	!
	111	E-4		11.4	». o	4.	黒り和砂粒を含む	淡黄				以	須思質	
	110	ر ت ت	芹		Li C		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	灰 黄			,		五	_
- 1	110	리	底部		6.1			灰 黄		۵ .	es .	政	須思賞	
	113	F. — 4	*		α.		1mm位の乳白色の砂粒、2mm位の灰色の砂粒を含	にぶい櫓			`.	四日	/ 足車	
. 1					5		ئ	橙)		3		K S K	
-	114	E - 4	高台付施	14.7	0 8	7 5	5. 子茲·Б名·田○赵漱 1~9 € 口對今 f.	にぶい黄橙	(2.4 中	治 市	
١,		E-5	兩		9	?	・ボッドを	にぶい黄橙		ra .	0		河河河	
-	7.	Н	*		α .		1.5mm位の黒の砂粒、1mm位の白の砂粒、黒の細) 黄				74 H	公古臣	
'	2				-		砂粒を含む	浅 黄					河	
_	116	D-4	*	13	0	0	口,压伤 分及款 次 今 4.	にぶい橙			`	17	是	
. 1	2	J - 5		0.91	?			灰 褐)	rīs	ಹ		河	
_		$\mathbf{K} - 5$			0		44/27m9 + III	灰黄・橙	(-	1 1	
7 1		Γ – 6	.		٥٠,		// ・ 祟っ/ #ロウキュ、 4 mm / フ// く) むちょう	灰黄・橙	— Э	æ	æ	古 立	須忠質	
			Ħ					にぶい橙						,
. 1	811	ਨ ਸ ਪ	口縁部				1mm以下の目い砂粒と褐色の砂粒を多く含む	灰 褐	0	Φ	ัซ	良好	須恵質	
							須 恵 器							
1	1		棡		T	T		黄灰				T		
	46	D - 4	121	10			白・茶・黒の細砂粒を含む	医				良好	一部に施和	
1				1										7

班		一部に施釉	部に施釉						4	56と同一個体	55と同一個体 一部に自然釉が かかる				
]	NL.	N.S.	NL.	NI.	NI.	N1					.1	.1
生生		良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
翻一	内底														
	外底														
- 1	紫水														
出るに	いらく							0				0		0	
(4)	(M)			(口唇部のみ)			ーブ黒(自然釉の色)								
		黄灰灰白	灰・灰オリーブ 灰	浅黄・黄灰 (口 黄灰	黄灰褐灰	所 (五)	灰・オリーブ黒黄灰	厌厌	灰赤・灰白 明黄褐	灰黄 浅黄	灰白·褐灰 褐灰	溪 溪	黄灰・灰黄 灰白	灰黄 灰黄	灰白・浅黄 灰白・浅黄
	H	黒・白・茶の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	黒の細粒子を含む	黒と黄褐色の砂粒を含む	1mm位の白い砂粒、白・黒・こげ茶の細砂粒を含む	3mm位の黄色の粒子、白色の砂粒、黒の砂粒を含む	白・茶・黒の細砂粒を含む	1 Imm位の茶の砂粒をわずかに含む	黒の砂粒を含む) 1.5mm以下の黄褐色、白・黒色の細粒子を含む) 白・灰色の砂粒、3~4mmの石粒を含む	白・黒の細砂粒を含む	2 白・黒の細砂粒、1.5mm位の灰の砂粒を含む	黒と灰白色の砂粒を含む
(cm)	器								4.25		8.0	1.9		2.2	
蚰	底径							7.3	6.0			12.6			
浜	口径	4.6		11.4	12.6	11.8	14.8		12.0	14.6		15.8		12.8	
	42	田 韓田	海 麗	大	*	*	*	高台坏底部	高也太 口緣皓 凡報略	高台坏口縁部	高台坏底部	Ш	日本	榈	*
出出	位置			D-4	K-7	S A 1	E - 4	D — 4	E - 4	D-4	D-4	D-4 D-5	F - 6	D-4	D-4
遺物	奉	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	28	59	09
図	番号	53	*	*	*	*	*	*	*	*		*		*	*

析	,														
麵											·				
祖		良好		良好	良好	良好	良好		良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
	力底			o		2	υ	ပ	၁		υ				
翻 —	外底					q	р		q		q	•			
	T												3,7,7,4,000		
調切の離り	くりく														
(外)	[A)				にぶい黄橙	褐灰	褐・黄褐	•							
4		褐灰·明褐 褐灰·灰白		にぶい橙 浅黄橙・橙	にぶい黄褐・にぶい黄橙 浅黄橙	にぶい黄橙・褐灰 にぶい黄橙	浅黄橙·灰黄褐 灰白·灰黄褐	にぶい権にぶい権	灰白・灰褐 淡橙	灰白・褐灰 淡黄	灰白・黒褐 浅黄橙	にぶい黄橙・ にぶい黄橙	灰白 灰白・灰褐	にぶい黄褐にぶい黄褐	にぶい橙にぶい橙
4 .		1.5mm位の黒の砂粒と淡黄の細砂粒を含む	上師質土器	黒と透明で光る砂粒を含む(1mm以下)	1mm程度の灰色の粒、黒・白・茶・透明の細粒、及び光る微粒を含む	1.5mm以下の褐の砂粒を少量含む	透明で光る細砂粒、黒の細砂粒を含む	黒と透明で光る細砂粒を含む(1mm以下)	透明で光る細砂粒、黒 (2mm以下)と白の砂粒を含む	透明で光る細砂粒と黒の細砂粒を含む	灰色の細砂粒を少量含む	ガラス質の光る細砂粒、褐色の細砂粒を含む	黒色・褐色と透明で光る細砂粒を含む	灰色の細砂粒を含む	灰色と透明・黒色の光る細砂粒を含む
(cm)	器画	1.6		3.75				4.1							
4	底径			15.2	16.3	11.4		15.2							
妝	公	10.8		16.4				19.6					- Ministra - 79-1		
品	# #	湘		口縁部底部	口縁即	一种	口縁部	口縁部底部	*	口縁即	洞部	*	斯 中		把角
田田	位置	표 - 5		D-4	D-4	D-4	D - 5	G-7		G-7	E - 5		2 — I	표 - -	D-4
遺物	神	61		79	63	64	65	99	29	89	69	70	71	72	73
恒図	番	29		53	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*

土器観察表(布痕土器)

国区	遺物	田田	明	文様お。	よび調整		甸	驅	1	
番号	番号	位置		外面	内	H H	外画	石	—— 統 反	重
30	1	E 4	口縁即	風化のため調整不明	甲	2mm程度の灰茶・赤色の砂粒、微細な白、灰色の砂粒及び光る微粒を含む	顰	韓	良好	
*	2	D 4	口縁即	風化のため調整不明	布目	1~5mm位の灰の粒、白黒の細砂粒、白く光る・黒く光る細砂粒を含む	韓	韓	良好	
*	က	D — 5	口縁部	風化のため調整不明	布目	2mm位の灰の砂粒、灰・白・黒の細砂粒、黒く光る細砂粒を含む	萄	嬰	良好	
*	4	표 — 5	口縁部	ナデ (口唇部) 風化のため調整不明	4 目	2mm位の茶・灰の砂粒、黒の細砂粒、白く光る細砂粒を含む	葡	韓	良好	
	2	ਸ 	口縁部	風化のため調整不明	布目	1~3mmの灰の粒、2mm位の乳白色の砂粒、 白の細砂粒、1mm位の透明で光る砂粒	韓	魯	良好	
	9	D – 4	口縁部	風化のため調整不明	布目	黒・白の細砂粒、3~5mmの灰色の粒、白く 光る細砂粒を含む	翻	韓	良好	
	7	D – 4	口縁部	風化のため調整不明	布 目	$1 \sim 2 \text{rm}$ の灰の砂粒、 5rm 位の灰の粒、 $1 \sim 3 \text{rm}$ の茶の砂粒、白・黒の細砂粒を含む	魯	亞	良好	
*	∞	D-4	口縁部	そぎ落とし(口唇部) 指押え	4 目	黒い 3mm大の石粒 白い細砂粒を含む	母いぞこ	盘	良好	
*	6	E – 5	口縁部	ナデ (口唇部) 風化のため調整不明	中田田	白・黒の細砂粒 2mm位の灰の砂粒を含む	浅黄橙	蓜	良好	
*	10	E-4	口縁部	風化のため調整不明	4 目	1~3mmの灰の砂粒、2mm位の白の砂粒、黒 白の細砂粒、1mm位の透明で光る砂粒を含む	麺	節	良好	
*	11	D-4	口縁部	風化のため調整不明	風化 (部分的に布目残る)	11mm程度の赤茶の混じった茶色の粒、9mm~ 1mm程度の橙色の粒、4mm~1mm程度の灰色 の粒及び光る微粒を含む	韓	橙	良好	
*	12	D-4	口縁部	風化のため調整不明	布目	2mm程度の茶色の砂粒、微細な白・黒・透明 の砂粒及び光る微粒を含む	浅黄橙	翻	良好	
*	13	E - 4	口縁部	ナデ	中田	8mm~1mm前後の赤茶の粒、5mm~1mm前後 の橙色の粒、1mm~微細の白・黒・灰・黒く 光る砂粒及び光る微粒を含む	橙	橀	良好	

										Γ					
*	Æ.														
#	E														
4	光沢	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
	椢														
麗													いた		
	-E	萄	如	塑	麵	黄	麵	蓜	麵	塑	黄	塑	にぶい橙	萄	塑
	椢			韓									口婦—)		
卸	外			にぶい黄檀橙						浅黄橙			橙 明緑灰 (- 唇部)		
		.m	布	다 韓	塑	塑	範	塑	極	 	蓜	如	魯里摩		麵
177		2mm前後の茶・白色の砂粒、微細な赤茶・白・黒・透明の砂粒及び光る微粒を含む	2mm程度の床茶色の砂粒、微細な白黒茶・光る黒・灰色の砂粒及び光る微粒を含む	3mm程度の赤茶の粒、 2mm前後の灰色の粒、 微細な白・透明の砂粒及び光る微粒を含む	m以下の茶・白の砂粒及び光る微粒を含む	1mm位の灰の砂粒 白・黒・白く光る細砂粒を含む	灰色の 6mm~ 3mm大の石粒、 5mm大の茶色の砂粒を含む	・ 灰色の砂粒を含む	14mm程度の赤茶の粒、4mm~1mm程度の灰・茶・橙色の粒、微細な灰・白・光る黒色の砂粒なび光を微粒を含む	土器質と同じ 6mm~1mm犬、他1mm犬の茶色の砂粒を含む	5mm程度の橙色の粒、5mm前後の透明の粒、1mm以下~微細の灰・白・茶透明の砂粒及び光る微粒を含む	3~9mmの茶の粒、白・黒・灰の細砂粒、黒く光る・白く光る細砂粒を含む		1mm以下の白・赤茶透明・茶色の砂粒及び光る微粒を含む	白・灰色の砂粒を含む
		2mm前 ·無·	2mm程 る黒・	3mm 後着な	1 mm U	1mm位 白・黒	灰色の 6mm 砂粒を含む	日· 原	14 14 森・ 権 を を を を を を を を を を を を を	七器質 の砂粒	5 mm程 1 mm 以 光る後	3~9m 〈米る	白色の	1mm以下の白 る微粒を含む	白・灰
び調整	内	新 目	布目	年 目	日 日	4 目	日 日	中田田	4 目	4 目	田田	田 中	田 田	中田田	布目
なれ			題								_				
文様	外面	ナギ	風化のため調整不明	ナ	ţ +	風化のため調整不明	ナデ (口唇部) 指押え	そぎ落とし(口唇部) 指押えの後ナデ	風化のため調整不明	そぎ落とし(口唇部) 指押え後ナデ	そぎ落とし(口唇部) ナ デ	風化のため調整不明	そぎ落とし(口唇部) 白い光沢のある付着 物あり	風化のため調整不明	そぎ落とし(口唇部) ナデ (風化)
出		口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	□縁即	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部
出土	位置	S A 1	E — 4	E - 4	D — 5	E – 4	D – 4		D – 4	D-4	D - 4	E-4	D – 4	D - 4	D — 5
遺物	神中	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26]	27
国区	番号	30	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	

													T		
¥	t.														
垂	E														
七生	ANC IX	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
	恒														
噩		호 면				い檀			A VIII A						gei
	K	浅黄橙	如	麵	霾	にぶい橙	極	麵	麵	魯	麵	麵	塑	霾	浅黄橙
	囲														
桕	外	明黄褐		にぶい褐			浅黄橙						韓		5 位
	4		塑		塑	蓜	影	塑	如	輏	塑	麵	浅黄橙	超	浅黄橙
7	-T	6mm位の茶の粒、黒白の細砂粒、光る細砂粒 を含む	網砂粒、1mm位の茶の砂粒、2mm位 粒を含む	8mm程度の灰色の粒、6~1mm程度の灰・赤茶色の粒、微細な黒・灰・茶色の砂粒及び光る微粒を含む	~6mm位の茶の粒、2mm位の灰の粒、白・ の細砂粒を含む	・黒の細砂粒、1.5mmの透明で光る砂粒、 く光る細砂粒を含む	2mm位の灰の砂粒、白・黒の細砂粒を含む	2mm位の茶の砂粒、白黒の細砂粒、光る細砂粒を含む	黒く光る細砂粒、白く光る細砂粒、透明で光 る細砂粒、 1mm位の白・乳白色・尿の砂粒、 5mm位の茶の粒を含む	3mm程度の茶色の粒及び光る微粒を含む	・赤茶・光る黒色の砂粒及び光る微	3mm位の灰・茶の粒、白黒の細砂粒を含む	2mm位の赤茶の砂粒、白・黒の細砂粒、光る細砂粒を含む	硼砂粒、白く光る細砂粒、7㎜位の 1つ含む	・白く光る細砂粒を含む
		6mm位の を含む	黒・白の細砂粒、 の灰の砂粒を含む	※開加藤 ※毎の潜るの数をから後れる。	1~6mm位の茶の 黒の細砂粒を含む	白・黒の) 白く光る;	2 mm(红の)	2mm位の 粒を含む	黒く光るが る細砂粒、 5mm位の3	3mm程度(微細な白 粒を含む	3mm位のJ	2mm位の赤茶 細砂粒を含む	黒・白の細砂粒、 茶の粒を1つ含む	日・黒・日
調整	内面	ш		ш	ш	ш	Щ		ш	ш		Ш		Ш	Ш
Ö	A	梧	梧	梧	卡	梧	梧	梧	梧	卡	佈	柜	传	佈	争
文様およ	外面	摩耗により調整不明	摩耗により調整不明	+ +	摩耗により調整不明	風化のため調整不明 自然釉	風化のため調整不明	摩耗により調整不明	摩耗により調整不明	ナデ?	ナデ? 風 化	摩耗により調整不明	摩耗により調整不明	摩耗により調整不明	摩耗により調整不明
24	îi Îi	碞	碞	類	超	毙	絕	如	報	報	鹈	扫	報	અ	略
<u> </u>	(E	監	匷	E E		鰮		膃	E		鰮			le le	圖
田田	位置	D — 5	D — 4	D - 4	D - 5	E - 4	E - 4	E 4		P-18	J — 5	S E 6	D - 4		D — 4
遺物	争	28	53	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
国国	番号	30	*	*	*	*	*		*		*	*	*	*	*

Γ.	l.b.										T		
1	仇								And the control of th				
	Œ												
4	於 及	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好				
	垣												
噩		<u> </u>		萄									
	-K	浅黄橙	蓜	搬	麵	麵	麵	塑	麵				
	恒												
御	外	如		麵								-	
	4	规	輕	撫	萄	如	輕	塑	塑				
		・黒の細砂粒を含む	1mm程度の白色の砂粒、微細な赤茶・白色の砂粒及び光る微粒を含む	砂粒を	6mm前後~微細な灰、橙色の粒、 1mm前後の 砂粒及び光る微粒を含む	・透明	3mm程度の橙色の粒、微細な赤茶・白黒の砂粒及び光る微粒を含む	6mm程度の褐色の粒、 1mm以下の赤白・赤茶 含む	5mm位				
-	Н	細砂粒	茶	1~4.5mmの灰の砂粒、白・白く光る細砂粒 含む	1	密	※ -	14mm程度の複色の粒、6mm程度の褐色の粒、 2mm前後の灰色の粒、1mm以下の赤白・赤≯の砂粒及び光る微粒を含む					
į		黒の湯	数細な元	i i	5の粒、	黒・日松松	な赤沙	程度のいている。	の組				
		Ш.	対の	±¥. □	・ 稽色	・アードの第	後継	で を 1 画 1 合 に か	· 一田		-		
		90秒巻	色の砂鎖粒を	の砂	留な所職を	・赤茶粒及及び	色の粒 粒を含	田の形を変換を	砂暦、つ命む				
É	밆	※ ※	ぎの白1 が光る(M Comm	6~銭/	7.0日 3.0砂	Eの 橙(5 る 微)	度の橋 8の灰色 でが光)灰の4 [を1-				
		1mm位の赤茶の砂粒、白	1mm程度の白色の砂粒、砂粒及び光る微粒を含む	1~4.5m 含む	6mm前後~微細な灰、橙砂粒及び光る微粒を含む	1mm以下の白・赤茶・灰・黒・白透光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	3mm程度の橙色の粒、 粒及び光る微粒を含む	14mm程度の橙色の粒、6mm 2mm前後の灰色の粒、1mm の砂粒及び光る微粒を含む	1mm位の灰の砂粒、白・黒の細砂粒、 の灰の粒を1つ含む		·		
-			一章	⊢ duī	9 多	1 *	e ∰	9 2	9 1				
	椢												
調機		ш			भ	क		_	_				
ž 4	E	卡	佈	梅	風	風	布田	布目	布目				
40	恒	5不明		不明					不明				
女練		り調整		多調					め調整				
	4	摩耗により調整不明	îh	風化のため調整不明	产利	ب ج	71	٠. الا	風化のため調整不明				
	<u></u>	中華	+		十 風	1 +7	<u>M</u>	1 ナデ 風 1					
i	in Ce	贈	開	神	胴畚	麻	既	兩	口縁部				
+1		币 6	A 1	4 —			E 5	4	5				
物田田	号位	S S	s s	D	16		s	D	D				
面機物			43	44	45	46	47	48	49				
図	番号	30	*	*	*	*	*	*	*				

土器観察表(陶磁器)

N.D.	和												
析	越州窯の可能性あり				冼	冼			陈	<u>₩</u>	1514	12K	烧
羅	越州(あり				肥前系	肥前条			肥前系	肥前条	肥前条	肥前系	肥前系
形態・成形技法の特徴	口縁端部が強く外反する。内底に目跡あり。	直口縁、厚手である。	外面に細線の連弁文がほどこされる。	見込みに画花文?	厚手の碗で外面には、草花文が描かれる。高台内は、くずれた「 大明年製」銘がみられる。外面全体に貫入がみられる。	外面には草花文、高台内には銘が施される。畳付は露胎	体部外面には、簡略化された棒花摩草文が描かれる。見込みに砂が付着する。また、高台内には「大明年製」銘のくずれた形態のものがみられる。	見込み部が全体に盛り上がる。畳付は露胎、全体に細かい貫入が 入る。外面には唐草文?高台内には「福」の銘が施される。	型打整形の皿で口縁部は輪花を呈す。畳付は露胎、主文様は蛸唐 草文、裏文様は梅花唐草文が描かれる。見込みには五弁花文が施 されると思われる。	内面の主文様は不明、裏文様は唐草文と考えられる。見込みには コンニャク判による五弁花文が施され、高台内には渦福銘が配さ れる。	体部は薄手で口縁は端反りとなる。底部は厚手で高台内中央はや や凸状になる。見込みに砂付着、外面に雪持ち笹文。	体部はやや薄手で口縁は端反りとなる。底部は厚手で中央部が内外ともやや突出する。外面に雪持ち笹文。	内面は露胎で粘土のつなぎ目及びロクロ痕がみられる。外面には 柳葉文が描かれる。
台鵬	黄蔥	和一明オリーブ灰	J操灰 - 灰白	和一オリーブ灰 胎土一灰白	外一明緑白 内一灰 白 土一灰白	綠灰 灰白	綠白 灰白	繰白)綠白)灰白	繰白 	繰白 	繰台 	外-釉-明緑白 内-無釉ーにぶい褐 胎土-灰白
	外一灰黄 内一灰黄	4	和一明緑灰 胎土一灰白	和一オリー 胎土一灰白	格 外一明 相 内一灰 胎土一灰白	和一明緑灰 胎土一灰白	和一明緑白 胎土一灰白	釉 一明緑白 胎土一灰白	釉 一明緑白 胎土 一灰白	釉 一明緑白 胎土 一灰白	和一明緑白 胎土一灰白	和一明緑白 胎土一灰白	外一釉一明 内一無釉一 胎土一灰白
(cm)		13.0			10.3 4.3 6.1	10.2 3.9 5.7	3.8 5.7	4.45	19.3 12.0 2.3	8.0	6.7 3.0 4.15	6.6	
(0) 善		口 径(推定) 13.0			口 径(推定) 高台径 器 高	口 径(推定) 高台径(推定) 器 高	口 径(推定) 高台径(推定) 器 高	高台径(推定)	口 径(推定) 高台径(推定) 器 高	高台径(推定)	口 径(推定) 高台径(推定) 器 高	口 径(推定) 高台径(推定) 器 高	
部位	口縁部	口縁即	調 部 部 (底部付近)	胴 部 (底部付近)	原 一 瀬 忠 忠 忠 忠 忠 忠	口 黎部 ~ 略	□ 一 一 一 毎 年	置 頑	型 一 一 一 一 品 一	斑	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □	胴部
器種	類	遊	撥	器類点	器器	器器	器器	5 器	器目	選 目	路相	apa Kel	5 器 碗
十 麗		田 3	8 3 ===================================	御	4. 摄	报	4.2	4 2	每	4.	4 4 条	4 4 4 4 4	6.4 磁
五年	I O	S	SE	*****	SE	SE	S	S	SE	SE	SE	S H	S
通り		62	8	4	r.	9	7	∞	6	10	11	12	13
区名		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

奏文様 肥前系 銘の簡									
す。主文様は蛸唐草で、襄文様 高台内には「大明年製」銘の簡	呈す。主文様は蛸唐草で、裏文様 。高台内には「大明年製」銘の簡 る。 量付は露胎、体部外面には雪特笹	呈す。主文様は蛸唐草で、裏文樹。 高台内には「大明年製」銘の簡 る。 量付は露胎、体部外面には雪持 監部からほぼ垂直に立ち上がる。	型打整形の皿で口縁部は輪花を呈す。主文様は躺唐草で、裏文様に には梅花唐草文が描かれる。 見込みがやや兜巾状に隆起する。高台内には「大明年製」銘の簡 略化されたものが施される。 見込みに手描き五弁花が施される。 見込みに手描き五弁花が施される。 見込みは蛇ノ目桶はぎされる。昼付は露胎、体部外面には雪持笹 文が描かれる。 禁物の身の底部と考えられる。底部からほぼ垂直に立ち上がる。 外面には唐草文?が描かれる。 薄手で低く小さな高台を有す。 畳付は露胎、外面に菊花文が描かれる。		型打整形の皿で口縁部は輪花を呈す。主文様は躺唐草で、裏文様に には梅花唐草文が描かれる。 見込みがやや兜巾状に隆起する。高台内には「大明年製」館の簡 略化されたものが施される。 見込みに手描き五弁花が施される。 見込みは蛇ノ目楠はぎされる。畳付は露胎、体部外面には雪持笹 文が描かれる。 蓋物の身の底部と考えられる。底部からほぼ垂直に立ち上がる。 外面には唐草文?が描かれる。 摩手で低く小さな高台を有す。畳付は露胎、外面に菊花文が描かれる。 中子色の釉が施され、口径外面には呉須による三角文が指か は、カリーブ色の釉が施され、口径外面には長須による三角文が指かれている。高台内は蛇ノ目状を呈し露胎である。	型打整形の皿で口縁部は輪花を呈す。主文様は躺唐草で、裏文様に には梅花唐草文が描かれる。 見込みがやや兜巾状に隆起する。高台内には「大明年製」銘の簡 略化されたものが施される。 見込みに手描き五弁花が施される。 見込みは蛭ノ目輪はぎされる。量付は露胎、体部外面には雪持笹 支が描かれる。 蓋物の身の底部と考えられる。底部からほぼ垂直に立ち上がる。 森町には唐草文?が描かれる。 南手で低く小さな高台を有す。量付は露胎、外面に菊花文が描かれる。 再手で低く小さな高台を有す。量付は露胎、外面に菊花文が描かれる。 同形範で外面にコンニャク印判が施される。 厚手の青磁染付碗である。体部はやや内湾しながらのびる。淡い 早手の青磁染付碗である。体部はやや内湾しながらのびる。淡い オリーブ色の釉が施され、口径外面には具須による三角文が描かれる。 まる。	はず。主文様は銅唐草で、裏文 高台内には「大明年製」銘の 1付は露胎、体部外面には雪特 部からほぼ垂直に立ち上がる 高からほぼ垂直に立ち上がる 面には呉須による三角文が描 面には呉須による三角文が描 光見込みに砂が少量付着す。 皆、見込みに砂が少量付着す。	11.は「大明年製」銘の簡 語、体部外面には雪特笹語、及び間 語、体部外面には雪特笹語、外面に菊花文が描か 具須による三角文が描か である。 窓胎となる。 窓胎となる。 窓胎となる。 の灰白色釉が厚く施され 。 灰白色釉が厚く施され	型打整形の皿で口縁部は輪花を呈す。主文様は蛸唐草で、裏文様には梅花唐草文が描かれる。 見込みがやや兜巾状に隆起する。高台内には「大明年製」銘の簡略化されたものが随される。 見込みに手描き五弁花が随される。 見込みは蛇ノ目柿はぎされる。畳付は露胎、体部外面には雪持笹文が描かれる。 たが描かれる。 たが描かれる。 を開からほぼ垂直に立ち上がる。 が一丁色の麻が施され、口径外面には発胎、外面に海花文が描かれる。 は手で低く小さな高台を有す。畳付は露胎、外面に海花文が描かれる。 原手で低く小さな高台を有す。畳付は露胎、外面に海花文が描かれる。 原手の青磁染付碗である。体部はやや内湾しながらのびる。淡いオリーブ色の釉が施され、口径外面には発脂、外面に海花文が描かれる。 原手の青磁染付碗である。体部はやや内湾とながらのびる。淡いオリーブ色の釉が施され、日弦を重し露胎である。 正文様は山水文、裏文様は不明、畳付は露胎となる。 主文様は山水文、裏文様は不明、畳付は露胎となる。 主文様は山水文、裏文様は不明、畳付は露胎となる。 は砂部は端灰で体部にログロ痕をのこす。灰白色釉が厚く随される。 を置付は露胎。
が る 明	で口縁部は輪花を呈す。主文文が描かれる。 兜巾状に隆起する。高台内に のが施される。 き五弁花が施される。 自和はぎされる。畳付は露胎	を る に に に に に に に に に に に に に に に に に に	は輪花を呈す。主文 れる。 を起する。高台内に れる。 される。畳付は露胎 られる。底部からほ かれる。 を有す。畳付は露胎	部は輪花を呈す。主文材かれる。 に隆起する。高台内には される。 花が施される。 ぎされる。畳付は露胎。 えられる。底部からほに 描かれる。 白を有す。畳付は露胎。 二・ャク印判が施される。	は輪花を呈す。主文 作る。 を起する。高台内に れる。 される。量付は露胎 られる。底部からほ かれる。 を有す。量付は露胎 マク印判が施される な 体部はやや内湾 る。体部はやや内湾 た 1 一径外面には為 フ目状を呈し露胎や	は輪花を呈す。主文 作る。 (本る。高台内に れる。 (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本)	縁部は輪花を呈す。主文 地かれる。 (東花が随される。 (東花が随される。 (東花が随される。 (東花が随される。 (東部からほ (東たられる。底部からほ (東されて) 日代がはされる (下ある。体部はや内海 (下ある。体部はや内海 (下ある。体部はは露胎 (下かれて) (大のは) (大のな)	は輪花を呈す。主文 作る。 かる。 かる。 される。貴付は露胎 られる。庭部からほ かれる。 を有す。貴付は露胎 な、口径外面には身 と、「経外面には身 は、口根を呈し露胎で ・量付は露胎、見込る を付けなった。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付けない。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 を付ける。 をしてをある。 をでしてをして。 をしてをして。 をして。 をして。 をして。 をして。 をして。	は輪花を呈す。主文 れる。 (力をもの) (力をもの) (力をもの) (力を) (力もの) (を) (力には) (を) (を) (を) (を) (を) (を) (を) (を) (を) (を
空引整形の皿で口棒部は輪化には棒花唐草文が描かれる。 ほどみがやや兜巾状に隆起す 発込みがやれのが施される。	望打验がのJLLでTAを的は無れ には梅花唐草文が描かれる。 見込みがやや兜巾状に隆起す 略化されたものが施される。 見込みに手描き五弁花が施き 見込みは蛇ノ目釉はぎされる マが描かれる。	型引強をVOLLで日本部は特化 には梅花唐草文が描かれる。 見込みがやや兜巾状に隆起す 略化されたものが施される。 見込みに手描き五弁花が随さ 見込みに呼ばり目釉はぎされる 文が描かれる。 蓋物の身の庭部と考えられる 外面には唐草文?が描かれる	1980年の1mで1mをおより は構花香草文が描かれ 込みがやや兜巾状に踏 化されたものが施され 込みは蛇ノ目釉はぎさ が描かれる。 勿身の底部と考えら 面には香草文?が描か 手で低く小さな高台を	型引発形の皿で口縁かは には稀花唐草文が描かれ 見込みがやや兜巾状に踏 略化されたものが施され 見込みに手描き五弁花か 見込みは蛇ノ目釉はぎさ 女が描かれる。 蓋物の身の底部と考えら が面には唐草文?が描か 薄手で低く小さな高台を れる。	 望力強化の皿で口棒部は輪化を至す。 土入株は契 には稀花唐草文が描かれる。 見込みがやや兜巾状に隆起する。高台内には「牙 路化されたものが施される。 見込みは蛇ノ目輸はぎされる。量付は露胎、体管 見込みは蛇ノ目輸はぎされる。量付は露胎、体管 基物の身の底部と考えられる。底部からほぼ垂直 種中で低く小さな高台を有す。量付は露胎、外面 れる。 「可等の輪が確され、口径外面には角値しなオリーブ色の釉が確され、口径外面には角流しなれている。高台内は蛇ノ目状を呈し露胎である。 	1287年の1147年 1287年 1287	空打強化の皿で口縁から には梅花唐草文が描かれ 見込みがやや兜巾状に踏 略化されたものが施され 見込みに手描き五弁花か 見込みは蛇ノ目釉はぎさ をが描かれる。 整物の身の底部と考えら 外面には唐草文?が描かれる。 はる。 同形碗で外面にコンニャ 再手で低く小さな高台を れる。 同手の青磁染付碗である 手の音が一である 手の音が一である 手がますが 単手の音がが施され 手がはしかる。高台内は蛇ノ と体に透明釉がかかる。	型打整形の皿で上稼むら編 には構花度草文が描かれる 見込みがやや兜巾状に隆起 見込みに手描き五弁花が施 見込みは蛇ノ目釉はぎされ 文が描かれる。 たが描かれる。 たが描かれる。 たが描かれる。 が一方色の解がと考えられ は一方色の解がをされ、 オリーブ色の解が施され、 れている。高台内は蛇ノ目 全体に透明釉がかかる。量 全体に透明釉がかかる。量 主文様は山水文、裏文様は 口縁部は端反で体部にログ。。 量付は露胎。	型引動作の皿で口線的に には棒花磨草文が描かれ 見込みがやや兜巾状に踏 離化されたものが施され 見込みは蛇ノ目釉はぎさ 文が描かれる。 蓋物の身の底部と考えら 外面には暦草文?が描か 相手で低く小さな高台を れっ一づ色の釉が施され れている。高台内は蛇ノ 音様は山水文、裏文様 主文様は山水文、裏文様 主文様は山水文、裏文様 はに筒洗にのび内・外 によって描かれる。
型がたけた。	世 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位 位	世	型力機 周辺30 関数の 大水維 体間に 外間に 外間に 外間に 大水維 を設立 大水・維 が発 大大水・指 大大水・指 大大水・指 大力 に 大力 に	型に 民 は り る る る る る る る る の の の の の の の の の の の	は に に に に に に に に に に に に に	型に見略。 見文権 外薄 代 筒 厚ナた 全刊は 込 化 辺 が 参 面 手 る 彩 手 ラン 体	型に 見略 見 又 蓋 女 薄 れ 箇 厚 井 社 全 土 社 込 化 込 が 物 面 手 る 形 手リン 体 女	型に見略。見文蓋女薄れ、簡厚ナれ、全、土口・る打は込化、込が物面手を形手りて体、女縁。。	型に見略見文権・神・衛軍ナれ 金 土 □・20 体に引は込化 込が物面手 る 形 手リて 体 文 縁 。部よれ
4—5% CB	新	#	44 - 75 公本 14 - 75 公本 15 - 75 公本 15 - 75 公	福士 - 灰白 路上 - 灰白 路上 - 灰白 路上 - 灰白 基本 - 明綠白 新一明綠白 新一明綠白 新七 - 灰白 路上 - 灰白 路上 - 灰白 新一明綠白 新一明綠白 新一明綠白 新一明綠白 路上 - 灰白 路上 - 灰白 路上 - 灰白 路上 - 灰白	## -	##	## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ##	## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ##	## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ##
3.9 番品									
高台径(推定) 3.	1 1, ,								
_	品 路 等								
- 2	機 後 後 器 禁 器	露 選		[2] 22 22 23 24 25 26 27 28 28 28 28 28 28 28			窓	图 图 图 图 图 图 期 目	を
_	D - 4								
	17	18 19	118 119 20	17 18 18 20 20 21 21	17 18 19 20 20 21 21 22	17 18 19 20 21 22 23 23	17 18 18 19 20 20 22 22 22 24 24 24 24 24 24 24 24 24 24	17 18 18 18 19 20 20 21 22 22 23 23 25 25 25 25 25 25 25 25 25 25 25 25 25	17 18 19 20 22 23 24 24 26 26
_	* *	* * *	* * * *			* * * * * * *			

20 25 24 36 36 36 37 36 37 37 37			<u> </u>											11-1	11-1
6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 3 8 4 7 5 9 5 9 6 </td <th>析</th> <td></td> <td>成の司</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>籢</td> <td></td> <td>器に近</td> <td>器に近</td>	析		成の司									籢		器に近	器に近
6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 数 6 3 8 4 7 5 9 5 9 6 </td <th></th> <td></td> <td>的焼り有り</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>聚</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>は壓線</td> <td></td> <td>は磁温</td> <td>は磁针</td>			的焼り有り				聚					は壓線		は磁温	は磁针
6 番号 位 置 語 徳切 出 土 器 籍 部 位 法 量 (m) 6 無 9 位 置 4 8 5 日 総	無		1				焼成					焼成		胎よい	胎土い
 6 通物 出 土 器 種 部 位 法 員 (m) 6 番号 位 間 器 値 が	態・成形技法の特	高台はやや簿手で、体部は若干内湾したのち外方に伸びる。外面 共灰色の釉がかかる。量付は露胎。	薄手で器高に比べ口径が広い。内面及び体部外面には暗オリープ 釉がかかるが、そのほとんどは淡黄色に変色している。見込みは 蛇目にかきとられるが他に比べ幅はせまい。高台は露胎。	「下半にはケズリ痕が残る。 全体に透明釉が施される。	底部及び高台は部厚いが、体部は薄く内薄しながら伸びる。黒褐色の釉が全体にかかる。見込みは蛇目にかきとられる。畳付きは 露胎。	高台は小さく体部はやや厚手で内湾しながら伸びる。内面及び体部下半まで白土がぬられ全体に透明釉が施される。見込みは蛇目に稀がかきとられる。量付きは露胎。	体部下半及び高台はていねいにけずられている。体部は下半から 直立気味に伸びると考えられる。体部下半より上位に黒褐色の釉 がかかり、それ以外は露胎。内底には砂が付着する。	内面及び体部下半まで白土がぬられ上に透明釉を施す。体部下半の1部及び高台は露胎、見込みは蛇目に釉がかきとられる。	高台は他に比べ低くていねいに面取りされている。内外面共薄い黒褐色の釉がかかる。見込みは蛇目に釉がかきとられる。高台は露路。	高台は薄く短く直立し、ていないに面取りされている。体部は内薄しながら伸びる。 口径に比べ器高が低い。内面及び体部下半に浅黄色の釉がかかる。全体に貫入がみ られる。見込みに「寿」の文字が彫りこまれている。体部下半及び高台は露胎。	台形状を呈する。見込みには二	内外面に赤黒の釉がかかる。 高台の1部、高台内は露胎。	ш ф	5、体部は内湾しながら上方に伸びる。 装る。内外面共灰白色の釉がかかる。脚	底部から内傾しながら上方に伸びる。体部内面には明瞭なロクロ 損を残す。底部は糸切底。外面に灰白色の釉が糖され、内面及び 底部は露胎。
面 適物 出 土 語 書 的 位 麗 書 的 位 麗 書 的 位 麗 書 書 的 位 麗 書 書 的 位 麗 書 書 的 方 語		内外一	※黄・暗オリーブ・赤褐ー赤褐・暗オリーブ・灰オリブ・暗赤褐		- 赤黒・灰赤 - 赤黒・赤・	外一灰白・灰オリーブ・にぶい橙 内一灰白	黒	外一灰白・灰・にぶい赤褐 内一灰白・褐	黒褐・赤 黒褐・灰黄・オリー 赤褐・赤	内淡黄 外淡黄 胎土-淡黄	外— 胎土	内-赤黒 外-赤黒 胎土-にぶい赤褐	内 浅黄 外 浅黄・明褐 胎土 浅黄橙	内-灰白 外-灰白	— 浅黄
面 適物 出 土 語 書 的 位 麗 書 的 位 麗 書 的 位 麗 書 書 的 位 麗 書 書 的 位 麗 書 書 的 方 語		1.9	2.0 4.0 5.1	1.0	4.6	1.0 3.6 5.1	2	4.4	8.4	5.1	1.45	7.0 3.3 3.95		8.	8.8
19	Į.			- ' "		1			7.	2, 5, 4		2 - 00		",	7
19		深 菜 高	強強調	KH KH 1mm	KH.	KH KH 1mm	KH.	Þ∜H	N44	정చ 정선 가급	圣(推)	정원 정원 개교		MH	N#I
面 適物 出土	型														
中	'	□ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	一	日 参部	~		朔		碧		始		口縁部	超 報	超 帮
通過															7
		田	[H]	ম	Ŀ	[1]	田	田	ഥ	ഥ	ഥ	ഥ	ഥ	ഥ	E 4
恒 w 4	造物	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
	個 叱	34		*	*						*	*	35	*	*

図画	遺物	田田	報	47 74		(mc) m		, T	计	垂
番号	中市	位置	即	当品					题· 及	
La	5	A T	操	胴。部	世	8	6 9	内-オリーブ黒 4-里	底部は厚手で脚台を呈し糸切底である。内面に明瞭なロクロ痕を	
	7	i i	Ę	一根				14	残す。黒褐色の釉が内外面共にかかり、脚台部のみ露胎。	
	43	S E 4	花器	避				内-オリーブ黒 外-黒 胎土灰	内面に明瞭なロクロ痕を残す。内外面共黒褐色の釉がかかる。	42と同一個体か
*	44	SE4	花器	底部				釉外一灰白、内一灰白 無釉一灰白 胎土一灰白	上底の底部で面取りされている。内外面とも白色釉がかかり、貫 入がみられる。	
	45	SE2	龜	斑	極	径(推定) 4	4.7	内ーオリーブ黒 (施黒) にぶい赤褐 外ーオリーブ黒	内外面とも暗赤褐色釉がかかるが、畳付は露胎、見込みは蛇目に 釉がかきとられる。	
	46	S E 4	KE	一 参 で で で で で で で で で				内-黒・黒褐 外-黒 胎土-にぶい赤褐	小型の碗であるが、底部は厚く高台も高い。口縁は短く直立気味に立つ。内・外面とも黒褐色の釉がかかる。見込みは蛇目に釉がかきとられる。高台は露胎。	
	47	S E 4	碗	原	祵	径(推定) 4	4.8	内-オリーブ黒 灰赤 外-オリーブ黒	内外面とも暗赤褐色釉がかかる。畳付きは面取りされ霧胎となる。 見込みも蛇目に釉がかきとられる。	
	8	S E 6	瘪	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □	口底器	新 5 5	9.6 3.6 5.0	内ーオリーブ褐橙 (釉ハギ) 原白 (中心) 外一にぶい橋・黄褐 胎土一櫓	やや小型の碗で若干厚手である。暗褐色の釉がかかり、高台は露 胎。見込みは蛇目に釉がかきとられる。	胎士に自い粒子 を含まない
,	49	D-4 E-4	麐	口 ※ ※ 等 。 等	口底器	新谷 記 3 5 5	3.5	内一灰褐 外一灰褐 胎土一橙	薄手で口縁端部が若干外反する。高台はていねいに面取りされて いる。内外面に灰褐色の釉がかかる。高台内外共露胎。	焼成は堅緻
	20	D - 4 E - 4	塞	□	П	径 11	11.6	内一浅黄·褐(光沢部分) 外一浅黄·褐(光沢部分) 胎土一橙	薄手で口縁端部が若干外反する。暗褐色の釉が全体に薄くかかる 見込みは蛇目に釉がかきとられる。	胎士に白い粒子 を含まない
	21	K – 4 D – 4	露	成 一 数 。 等 。	口底器	(全) 11 (全) 3 (全) 3 (重) 5	3.9 4 5.7 E	内-黒褐 外-黒褐 胎士-橙	薄手で体部下半にケズリ痕がみられる。体部と内面には茶褐色のの釉がかかる。見込みは蛇目に釉をかきとる。高台1部と高台外 面及び高台内は露胎。	焼成は堅緻
	25	D-4	露	原 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	口底器	11 全 会 3 5	11.4 3.4 5.65	内一黒・暗赤灰 外一黒 胎土一灰赤	薄手で器高に比べ口径が広い。体部下半にケズリ痕がみられる。 内外面共黒褐色の釉がかかる。見込みは蛇目にかきとられる。目 跡が残る。高台は露胎だが1部に釉が垂れる。	
	53	D-4 G-6	碗	口縁部 〈 底 部	口底器	径 10 径 4 高 6	10.9 4.0 6.25	内一灰白・灰オリーブ (一部) 外一灰白・にぷい黄橙 胎土一橙	内面及び体部下半まで白土がぬられ、全体に透明釉を施す。口縁直下に は白土がかきとられ素地の原茶褐色が線状になってみられる。内面は白 濁釉で見込みは蛇目にかきとられる。畳付き及び高台内は霧胎。	
	. 54	D-4	極	口 参部 の	口原器	孫 11 高 6	4.0 6.95	内一黑、外一黑 高台一暗灰黄 胎土一赤褐(底部)、赤灰(D線)	高い高台を有し高台内はマントウ心を呈す。内外面は黒褐色の釉 がかかる。見込みは蛇ノ目にかきとる。畳付きは露胎。	
	22	Н—7	碗	風	凪	径 4	4.8	釉ーにぶい黄橋 外-淡黄 内-浅黄橙 底-灰白	内外面共ていないな全で調整がおこなわれる。体部上半には茶稿 色の釉がかかると思われる。現存部分は大部分が露胎。	

靴							*						楚														
靊							と同一個体						58と同一個体		رر د												
#						_	61		ίν					han) O	‡ ‡	4		<u> </u>		-fm							
形態・成形技法の特徴		筒形を呈する厚手の碗、内外面共厚味のあるオリーブ黒の釉がか	かる。畳付のみ露胎。	本部は中位からほぼ垂直に立ち上がる。			筒形を呈し直立する。胎土は磁器にちかい。内面と体部下半及び	高台は露胎。	扁平な体部はほぼ中央でくびれ、口縁は直立する。内外面共暗灰	白色の釉がかかる。高台は露胎。	(電形の确で異色の釉が全体にかかる、骨付きは酸胎・		衛形を呈し直立する。口縁上端はやや内傾し内へ若干張り出す。 口縁上端から体部下半までオリーブ灰色の釉がかかる。内面は露脂。胎土は磁器に近い。底部は高台と考えられる。	内湾しながら開く鉢で小さな王縁状の口縁をなす。外面は銅縁色 の釉がかかり、1部に暗い紫色の釉が縞状に入る。内面は灰白の 釉がかかる。	口縁部はほぼ直に立ち上り、明瞭な受け部を有す。受け部のみ露	胎で、他は淡黄色の釉がかかる。	底部は上底状をなし、全体にていねいなロクロ痕がみられる。 4 所下は - 単な的に時本場毎の軸がかかえ。		スペン・アン・ベル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	筒形を呈しやや内傾する。口縁部は内側に屈曲する。底部は露胎	で糸切り底を呈す。内外面に暗赤褐色釉がかかる。	白土による象嵌を行ったものである。	内外面には暗赤褐色釉が施される。	白土による象嵌を行ったものである。	内外面には暗赤褐色釉が施される。	白土による象嵌を行ったものである。	内外面には西米湖の船が描かれる
6		4-灰オリーブ・オリーブ黒	灰白・オリーブ黒	3一灰白	► -	<u> </u>	内一灰白 外一原・オリーブ・オリーブ里	•	一灰白・灰オリー	内=にぶい黄梅 外=にぶい黄梅 胎土―灰白	内一黒 外一黒 底一番灰 高台ーにぶい赤楊	ユニューオリーブ黒	和一灰白・灰オリーブ 内一灰黄褐 外ーにぶい黄褐 胎土一黄灰	内-灰白・グリーン 外- グリーン 胎士- 灰褐	和一淡黄	胎土一灰白	和オリーブ褐 無和灰白 12.4.5.7.4]—黒褐	外一黒褐 胎土一灰黄	内ーオリーブ黒	外一黒 胎土一灰(口縁)、暗赤褐(底部)	内一黒褐	ケー羔陶・暗水陶 胎土―にぶい赤褐	内—黒褐 外—里視, 時未掲	- 無陶・唱が幅 注上にぶい赤褐	1-黒褐 田祖 - 昨去祖	六一张窗,描次窗 居士 - 7 %、末趋
(記) 岬 状	A	口 径(推定) 8.4 釉 底 及(推定) 4.9	正(证定)	倭	底径 2.3 外	局 5.3	ロ 徭(権定) 9.6 内 麻 発(権定) 3.3 体	画 4.9	径 9.6	氐 徐(推定) 4.0 N 器 高 4.9 胎	口 径 8.8 内 麻 径 4.4 麻	高 約5.1	四 径(推定) 9.1 内 胎	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □		78	底径 4.0 無	# K	口 径 7.0 外胎	径 4.2	略	K. 2		\(\frac{1}{4}\)	邪	Æ ₹	
1 (†)		日縁即	始	口縁部	~ !	-	- 一黎母	報	船	始	日縁日	報	海 路	m/66	168.40	元 章 章 工	縆		口縁即	口縁即	岩			対対		## ##	
器種型	Ħ	[L]	克 ——		客	兩	福	"	鰮	煮 —— ——	恒	3.	を が 正 画	為		 ≰	花器底		選	2	化 配 底	器		景		#4	
<u> </u>										 	4 - U		D - 4		K — 6	9 — T	D-5 7			t	× - ×			D - 4			
遺物	番号(6 6	-	22		X.		-	29	9		61 1	29		 	64	+	65		- 9	67	 ò	89		9	
国図	番号	- 26	3		*		*			*			*	*			*	+	*		*	36	000		,		,

沝																77		77									
	E .									144	M.W. I. J. K. Y.					胴部下半にスス	付着	アスコ末上帰鲴	付着								
が 第・ み 形 井 光 の 辞 籍	5 W W X W W	白土による象散を行ったものである。	内外面には暗赤褐色釉が施される。	皿状の土台に円筒状のものが付くと考えられる。底部は糸切底、	内面にはにぶい黄褐の釉がかかる。外面は露胎。	中女 甲に銀線等 ぶかかん 男子にいい 建築名グロイ		小型の蓋でなだらかに口縁部にいたる。	上面のみ茶褐色で釉を施す。つまみ径1.6cm。	口縁部を貼り付けて庇をつくり出している。口縁部手前で段を有す。二縁部を貼り付けて庇をしての出れた。一部はそのはずなよったによる。	9 。 「国のみ無陶巴の柵を晒り。四国に里ね席さの噂が突る。フ まみ径1.4cm。	平担な天井部からなだらかに下り口縁部にいたる。	上面のみ暗茶褐色。	大型の蓋で口縁部手前で2段の沈線を有す。	上面のみ茶褐色の釉を施す。つまみ径1.3cm。	口縁部は内傾気味に立ち上がる。胴部は扁球状を呈し、胴部最大 径のところに注口部を貼りつける。注口部は曲線状をなす。底部	は上底であるが三足はつかない。注口上部とその対面に取手がつけられる。内面及び外面胴部中位まで茶褐色の釉を施す。	77と同様な形態と考えられる。外面は胴部上半には浅いカキ目が	- あられる。 阿部内国にはロクロ目が強く妖る。 胎。	底部に3足をもつもので、底部はヘラケズリが施される。	底部及び胴部下半のみ露胎、それ以外は茶褐色の釉がみられる。	口縁部はやや上方に立ち上がる。胴部には浅いカキ目がみられ「	〇」の印がスタンプされている。内外面とも茶褐色の釉を施す。	口縁部は「く」の字状を呈し、口縁直下に2条の三角突帯がめぐる。内面には5条単位の櫛目状溝が施される。口縁部上担のみ露胎で、それ以外には暗茶褐色の釉を施す。	口縁部は「く」の字状を呈し、口縁直下に一条の三角突帯がめぐる。口 縁頭に由づけ、自己をお除え、 中面は 5 条単位の整日はまが始されて		口縁部は短く外反し、丸味をおびる。外面にはカキ目がみられ、 内面には7条単位の衛目状溝が左回りに施される。口縁部上担の
4		内一黒褐 映赤褐 从一里裙,晓赤裙	7. 売局 温が場 胎土一にぶい赤褐	一暗赤褐・にぶい黄褐 下井相 (148) 数	外一次寅梅(山稼)・恒(氐) 胎土-橙	内一灰緑灰二尾鸫	// // // // // // //	新一褐 作針 十指		和一オリーブ黒 無れ いっぱ	熊和一イリーノ梅 胎土一緒灰	和一オリーブ黒	無権一にぶい稿・明赤稿 胎土-掲灰	内一灰赤	外一黒褐・灰赤	和一外一灰オリーブ 内一灰オリーブ	露胎ーにぶい赤褐 胎土一褐灰	内一権一緒反・反権無権に対い赤徳	外-釉-オリーブ黒・オリーブ黄 無釉-にぶい赤褐・暗赤灰	和一内一黒褐 外一外灰オリーブ	無希しによい赤褐脂土一によい橙	内一略オリーブ	外ーオリーブ灰	内一釉一灰黄褐 麻釉ーに近い赤褐 外一灰黄褐・黒嶺 胎土一灰褐・にぶい楂	和一内にぶい赤褐・明赤褐 ム-ナニーブ ^田	7	内一釉一灰黄褐 無釉一灰 外一灰黄褐
注	Ħ	- Total Control Contro		口縁径 9.2	5.3				倒帽	×	加州 23.3		5 体 10.1	11.4	5 径 14.5	独。	7.8 可 9.0	1 径 9.2	計画 9.5			80	Ħ				
朝		題		440	明明 一一	郑			相 弓 踮		相 究 器		編出 出	華	開兩		女 路 路	4	p.	24.0			一	口縁部	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	6	口縁部
以	Ħ	聚		- <	高 行 一	編		1	₩ *		* *		₩		* *		∜		* *	# *	6		*	すり鉢 [+10**		すり鉢「
出出	位置				D - 4	7		J-5	9 — f	F	ひ ゴ 4		2-5			SE4	G-7	1	H-7	-	ť	7 - 7	,	S E 4	S E 4	D-4	G-7
遺物	番号	02	2	i	1/	7.0	1	5	5/	i	4/	i	9,	27.	0,	Ę	,,	ç	0	0,1	2	S	00	81	68	3	83
国国	奉	36	3		*					,			*		>				`			*	,	*			

奉		ものの可 り													
羅		近代のものの 能性あり													
形態・成形技法の特徴		玉縁状の口縁を呈す。内面には口縁下約2.5cmのところから全体に 僧目状溝が随される。	口縁部は「く」の字状を呈し、端部は丸い。口径直下に2条の低い突帯を有す。口縁部上担が露胎で、それ以外は茶褐色の釉を施す。	片口の鑑鉢で、逆「L」字状の薄い口線部を有す。外面には浅いカキ目がみられる。 内面には4条単位の衛目状溝が左回りに施される。口線部上担には重ね焼き目跡が 残る。口線部上担のみ露胎で、それ以外には暗茶褐色の輪を施す。	片口の擂鉢で、口縁部は「く」の字状を呈す。胴部はやや内湾しながら 立ちあがる。底部は上底気味。内面には3条単位の櫛目状溝を左回りで 全体に施す。口縁部内面以外は、暗茶褐色の釉が厚くかかる。	片口の橋鉢で、口縁部は逆「L」字状を呈する。胴部はやや内湾しながら立ちあがる。底部は平底。内面には、6条単位の衛目状溝を左回りで全体に施す。口縁部平担面と底部は露胎で、それ以外は茶褐色の輪が施される。	やや眉が張り、顕郎は直立気味にのび、口縁部は内側に折り返すことに よって平相面をひくっている。肩部には2条の三角突帯がつく、口縁断 の平相面は霧胎で貝目跡が残る。外面は暗縁色の軸を施すが白けてこる 内面は疾胎では割かましる条稿のあかかかる。	やや肩が張り、顕彰は直立気味にのびる。口縁部は外面に右形状突帯、内面に小さい三角突帯を貼りとけ平祖面をつくっている。肩部には2条の三角突帯を助りのは平祖面は露胎で、重ね焼の跡が残る。暗茶褐色の釉を施す。	胴部上位に2条の突帯をめぐらす。上は三角突帯で、下は刻み目 突帯である。上方の割れ口部からすぐ口縁になると思われる、暗 緑色の釉を施す。	胴部上位に2条の突帯をめぐる。上は三角突帯で下は絡縄突帯で ある。内外面にていねいなロクロ成形痕がみられる。茶褐色釉を 施す。	口縁部に台形状の尖帯を貼りつけている。口縁部の平担面は露胎で、それ以外は茶褐色の釉がかかる。	胴部はやや外傾しながら開く、底部にはワラ圧痕や重ね焼の目跡が、外面は暗緑色釉、内面は灰白色、栝に多く変化した茶褐色釉 がかかる。	胴部はやや内湾しながら立ちあがる。底部は上底。 全体に茶褐色の釉がかかる。	口縁部は短く「く」の字状を呈し、丸くおさめられている。口縁 直下には低い突帯が2条めぐる。外面に浅いカキ目がみられる。 茶褐色を施す。口縁部上面はかきとられる。	最大径は胴中央部に有す。底部はやや上底である。外面にはカキ
色麗		内一にぶい赤褐 外一にぶい赤褐 胎土一灰黄	和ーオリーブ黒 無和一にぶい赤褐	内-黒褐・暗赤褐 (無釉) 外-黒褐・灰オリーブ・暗赤褐 胎土-褐灰	内-釉-暗オリーブ稿・稿 無無十にぶい水稿 外-暗オリーブ稿・オリーブ黒・黄鶴 ト・にぶい赤稿 出リーブ黒・黄鶴	着一外ーオリーブ 内一暗オリーブ 無和一赤為 所土一明赤褐	和一内一暗灰黄 外一黑褐 無和一暗赤褐 胎士一明赤褐	和一内一黒褐 ケー黒褐 無 和 ー によい赤褐 脂 土 ー によい赤褐	和-内-オリーブ黒 外-黒褐・灰 胎士-灰褐	釉-内-黒褐 外-黒褐 胎士-黒褐	和一内一黒褐 州一黒褐 無和一暗赤褐 胎士一にない赤褐	和-内-暗褐の上に淡黄発色 外-黄灰・オリーブ灰・オリ - ブ黄 胎土-褐灰	和-内-黒褐 ケ-黒縞 無和-にぶい赤褐 形士-にぶい赤褐	和一内一黒褐 ケー黒褐 無和一内一にぷい赤褐 胎土一赤	釉-外-黒褐・暗赤褐 無釉-内-灰
法 量 (cm)	-		口径(推定)31.0	口 径 23.9 底 径 9.8 器 高 11.2	口 径 22.8 底 径 約9.5 器 高 12.8	口 径 23.4 底 径 10.0 器 高 16.8	口径 33.9	口径 27.6				底径 14.8	底径 19.2	口径 13.8	底径 7.8
部位		口縁部	一縁部	□縁部 (産・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	口縁部 / 1	口縁部 (産)		日縁部 1	神神	明 容5	口縁部	所 部 忠 忠	順等 旅底 幣	日縁部 1	胴 部 [
器種		すり鉢	雄	すり鉢	すり鉢 1	a 禁	翻	搬	器	器	禁	*	**************************************	*	展
田力	江庫	J - 5	S E 4 H – 7	S E 4	1 - 5 $1 - 6$	K – 6 K – 7	S E 4	S E 4	K — 6	S E 4	S E 4	S E 4 S E 6	S A 1	J - 5 J - 6	G-7
	神水	84	82	86	28	88	68	06	91	95	93	94	92	96	26
	神	36	37	*	*	*	38	*	*	*			*	*	*

				Т	 		 	 		
摐										
華										
形態・成形技法の特徴	形を呈し、丸くおさめられて 内湾しながら開く。口縁部J	発きの目動が残る、それ以外に暗条稿の種がかかる。 口縁部は外面に台形状、内面に小さな三角突帯を貼り付け、平拍 面をつくっくている。間部は内滅しながら開く、威部は上廊、原朗 内面にはカキ目がみたれる。	口縁部は逆「L」字状をもし、胴部はやや内落しながら外へ開く 成部は上底である。胴部上半に耳がつく、口縁部平街面と底部は 霧胎で貝目跡があられる、それ以外は薄く茶稿の角が除される	底部は上版で、胴部はやや内湾しながらのびる。口縁部は直口し 口縁端部は内値し少し内側へ張り出す。口縁下に2本の法線がめ ぐる。口縁端部は霧胎でそれ以外は暗縁色釉がかかる。						
田田		・オリーブ派								
卸	和一内一オリーブ黒 外ーオリーブ 口縁一褐	オリーブ リーブ黒 褐	和一内 外一稿 外一稿 底一赤稿 胎土一赤稿	十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二						
量 (cm)		27.4	(推定) 15.2 16.0 15.6	29.4 22.2 9.7						
郑		口底器後後高	と 後 産 高							
部 位	□縁部 ~ ~ そそぎロ		秦 ~ 岩	口縁部 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0						
器	井口鉢	為	林	*						
	函 S E 6	S E 4	S E 4	S E 4						
過物	# 88	66	100	101					,	
	# 88	88		*						

土器観察表(須恵器甕)

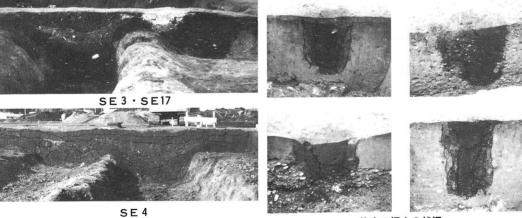
		T												г
那							I類	I類	I類	I類	1類	I類	1類	I 類
翷	外 面	よこナデ、2条の突帯 沈線の波形文 よこの平行線又タタキ	よこナデ	よこナデ	タタキ	よこナデ ヘラ状のもので波 形文	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ
蠷	西	よこナデ	よこナデ	よっナデ	同心円タタキ	よこナデ	同心円タタキ	同心円タタキ	同心円タタキ	同心円タタキ	同心円タタキ	同心円タタキ	同心円タタキ	格子目文叩きの後ナデ 同心円叩きの後ナデ
七生	YYC IYY	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
7 7 7 1	7	白・茶の石粒を含む	黒の細砂粒と 4㎜径の石粒を含む	2~2.5mm径の褐色の粒、黒の細砂粒を含む	白色の循形粒を多く含む	精良	黒・白色の細砂粒を多く含む	白・黄色の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	黄・黒・白色の細砂粒も含む	白・黒等の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	白の細砂粒を含む
噩	外面	灰黄	高	略	華	褐灰	承	褐灰	溪	承	溪	展	展	五
甸	内面	灰 黄	褐灰	褐灰	灰黄 黄褐(一部)	灰 褐	承	褐灰	展	展	灰オリーブ	灰オリーブ	灰オリーブ	采
1	胡	口縁部	四縁部	聯	調		胴	調略	明	贈	明	調部部	胴幣	胴部
Ι "	御	無 軸 翻 細	*	*	*	* .	*	*		*	*	*		*
出	位置		D-4	E - 4	S E 3		K-7	L-7		J - 5	D - 4	D - 4	G-7	
遺物	奉	-	2	m	4	7.0	9	7	∞	6	10	11	12	13
圏	番	25	*	*	*							*	*	

靴															
養	E	I類	I類	I類	I類	I類	I類	I類	I類	II 類	II 類	11.類	11 類	田類	II 類
緻	外面	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	平行線タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ
鰮	内面	格子目叩きの後 同心円文叩き	タタキの後をナデ	平行線タタキ 調整時のくぼみ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	平行タタキ	格子目タタキ	同心円タタキの上 を平行線タタキ	同心円タタキ	平行線タタキの後 車輪状放射線タタ キ	平行線と同心円が 重なる。 平行線タタキ	平行線タタキ	同心円タクキの上 を平行線タタキ
4	洗成	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
	H · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	白・黒等の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	1mm程度の白の砂粒、0.5mm程度の透明で光る砂粒、黒の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	白・黒等の細砂粒を含む	透明で光る細砂粒、黒で光る細砂粒、白の細砂粒 を含む	白・黒等の細砂粒を多く含む	1㎜程の肌色・茶等の砂粒を多く含む	細砂粒を多く含む	白・黒の砂粒を含む	白い砂粒を含む	掲 白い粒を含む	灰・茶等の細砂粒を多く含む
噩	外面	被 系 系	民	展	褐灰	溪	民	展	民	民	灰黄褐	风	区	にぶい赤褐	にぶい褐
甸	内	送	层	溪	展	灰オリーブ	逐	区口	展	鲁	灰黄褐	にぶい黄橙	にぶい梅) 人名	灰黄褐
1	郡	胴絡	開	嗣部	胴 部	胴部	聯	胴部	嗣	嗣部	調部	胴	胴部	胴部	調略
	猫	須恵器 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3		*	*	*	*	-	*		*		*	*	*
丑		D - 4 D - 5 L - 6	G-7	1 — 6	K - 5 K - 6	G-7		S E 2	9 — f	J – 6 J – 5 J – 6	I – 6 K – 6		I – 6 J – 5	1 – 6 J – 5	K — 6
遺物	神	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	22	26	27
図面	神中	25	*	*	*	*	*	*	*	26	*	*	*	*	*

備考		ļum'.	類,	ļtint.	lfux,	\pm'	ļum/	lpm*	Hun	lpm'	houx °	lpm²	um.	flux	I pose
-		11類	**	1 類	11類	1 類	1類	1 類	口類	田	IV 類	V 類	V類	A 類	V類
翷	外面	格子目タタキ	平行タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	よこナギ	格子目タタキ	格子目タタキ	平行条線タタキ	格子目タタキ	格子目タタキ	風化	格子目タタキ	格子目タタキ
	内画	平行線タタキ	同心円タタキ	同心円タタキの上 を平行タタキ 平行タタキ	同心円タタキ	同心円タタキ	よこナデ	平行線タタキ	平行線タタキ	平行条線タタキ (タテ、ヨコに切り あっている)	同心円タタキ	工具によるナデ†	平行線タタキが不 定に施される	タタキ 粗いナデ	車輪状タタキ
1 1	発及	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
- 報		灰・茶等の細砂粒を含む	白色の細砂粒を多く含む		所茶等の細砂粒を多く含む	灰茶等の細砂粒を多く含む	黒と白の細砂粒を含む	灰茶等の砂粒を含む	灰茶等の細砂粒を含む	白・黒の砂粒を含む	白・うす茶・光る粒を含む	2mm以下の灰・茶・白等の砂粒を含む	無砂粒を多く含む	2mm以下の灰・茶・白箒の砂粒を多く含む	2mm以下の灰茶等の砂粒を含む、、
鰮	外面	にぶい褐	黄褐	にぶい褐	灰黄褐	褐灰	明褐灰	黄灰	褐灰	灰	灰白	にぶい褐	淡黄	※無	浅黄橙
卸	村圃	灰褐	灰褐	褐	学(1次2)	はいかい	にぶい赤褐	にぶい褐	にぶい褐	灰	黄灰	にぶい褐	灰オリーブ	にぶい黄橙	にぶい黄橙
	即	那 辛ß	調部	腡部	是 酮	雅 部	夢	品	贈	期 部	調整	酮部	那	調網	胴略
##	奇 画 ———	須恵器	*			*	ISH	*	*	· ·	<u> </u>		- 4	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	- 4
干用		L-7	SE3	I – 6 J – 6 L – 6	J — 5	K — 6	K — 6			9 — I	2 — 2		S E 3	9 — T	
遺物	奉	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
国区	番	26	*	*	*	*	*	*	*	27	*	*	*	*	*

								T		1	
Ĥ	₽.										
#	重	W類	VI類								
L	_	IA	M								
	厘	4	#-		4						
緻		# H 3	44		4 4						
	女	擬格子目タタキ	格子目タタキ	タタキ	格子目タタキ						
	囲	+ 4	+		タタキ 肖し)						
HE.	_	同心円タタキ	平行線タタキ	ナデョコナデ	ナデナ						
	Æ		平行	7	タタキ (タタキの 上をナデ消し) よこナデ						
4: 线	NAC IX	良好	良好	良好	良好						
					の砂						
					₽t\.						
+	H				〈離々						
				-	1と極						
				名	の砂粒						
				砂粒	(L						
٦.		.5	وحم.	きの	Smm 以						
7	Ē	を 何	含	· 褐色	御 や						
		細砂粒を含む	細砂粒を含む	黒・白・褐色の細砂粒を含む	黒と褐色(2mm以下)の砂粒と極く細かい白の砂粒を含む						
	恒	茶	報	ш		70					
WE 1		浅黄橙		義	にぶい黄褐 橙 灰赤						
	*	漢	展	灰黄褐	に櫓床						
御	屉		1		m10						
Ф	K	褐灰	灰オリーブ	褐灰	褐灰 明黄褐						
4	Ž	舞	智	歸	智						
랆		巚	鰮	颅	颅		 				
報		須恵器 養	*	*	*						
+		- 5	_ 7	4	4 4						
出	***************************************	X	<u>.</u>	EJ.	D H						-
-		42	43	44	45						
図	番号	27	*	*	*						





— 107 —

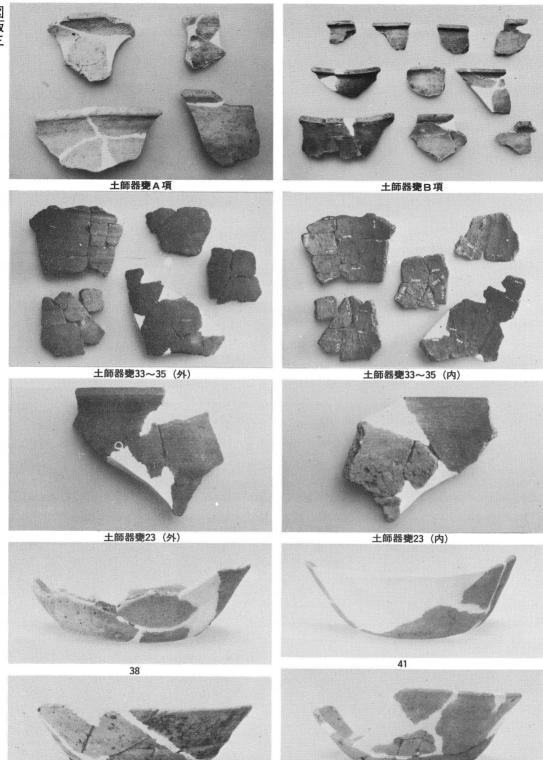
柱穴の埋土の状況



検出状況 (東から)



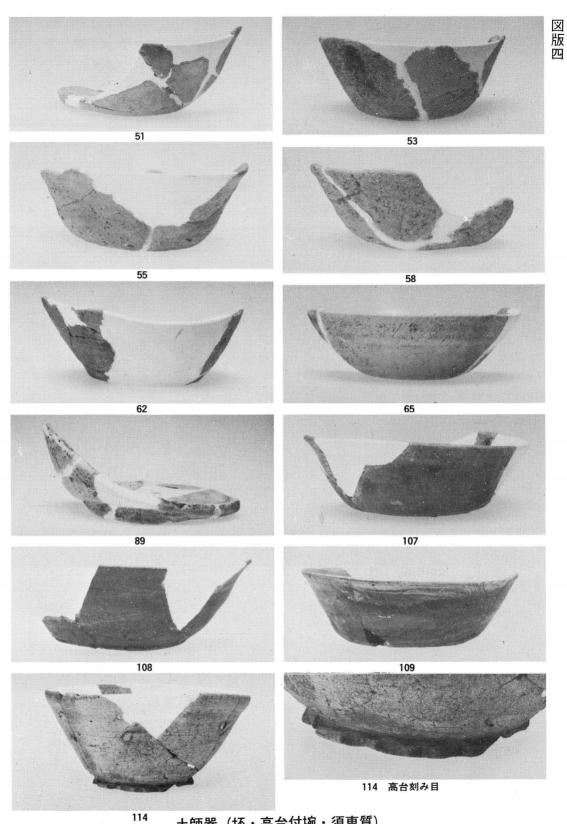
弥生住居跡(北から)



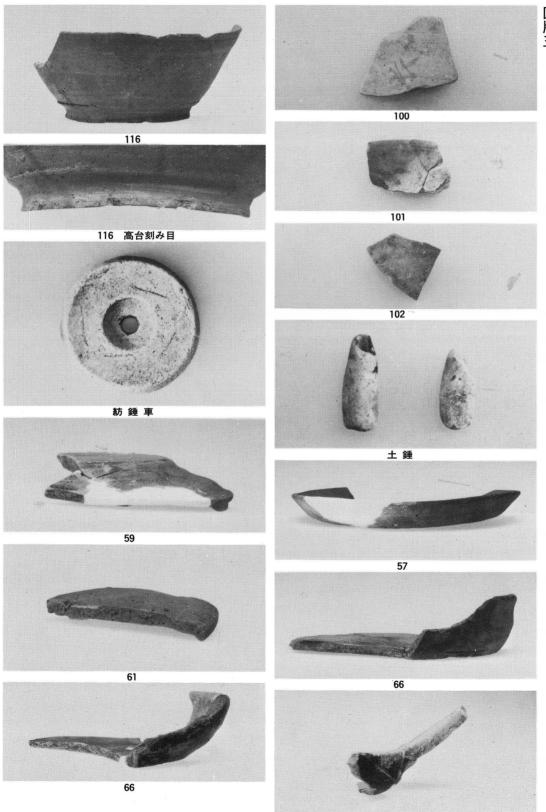
土師器(甕・坏)

48

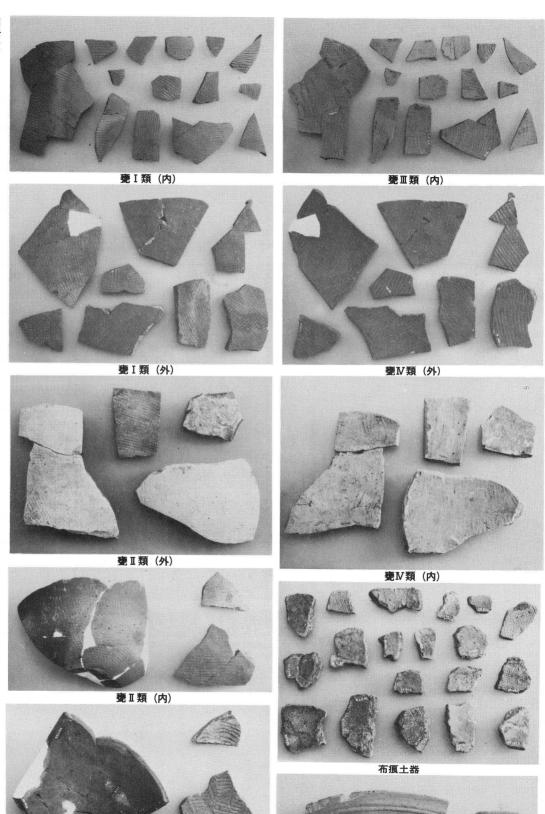
49



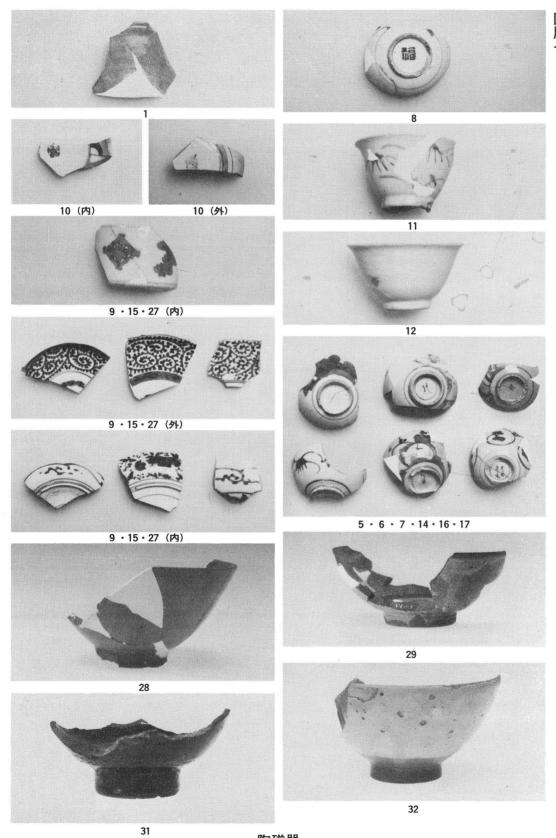
土師器(坏・高台付埦・須恵質)



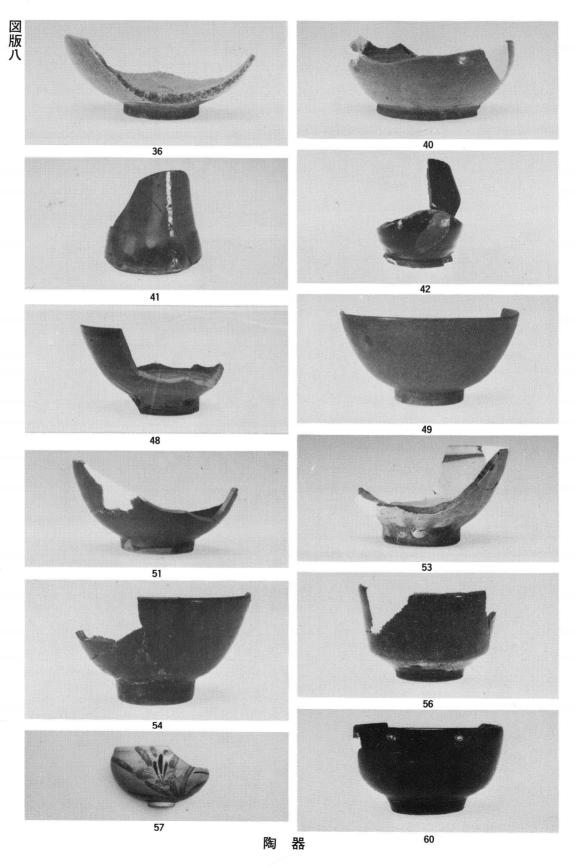
須恵質土師器・墨書土器・紡錘車・土錘・須恵器・土師質土器

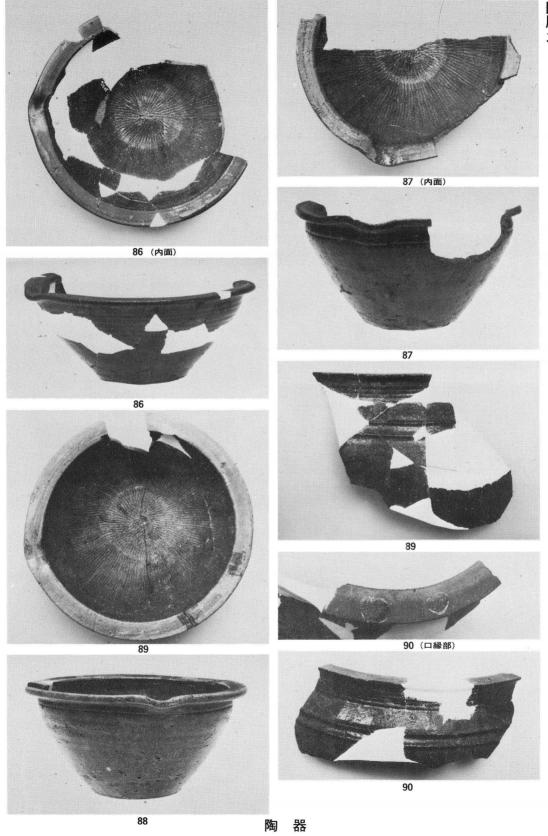


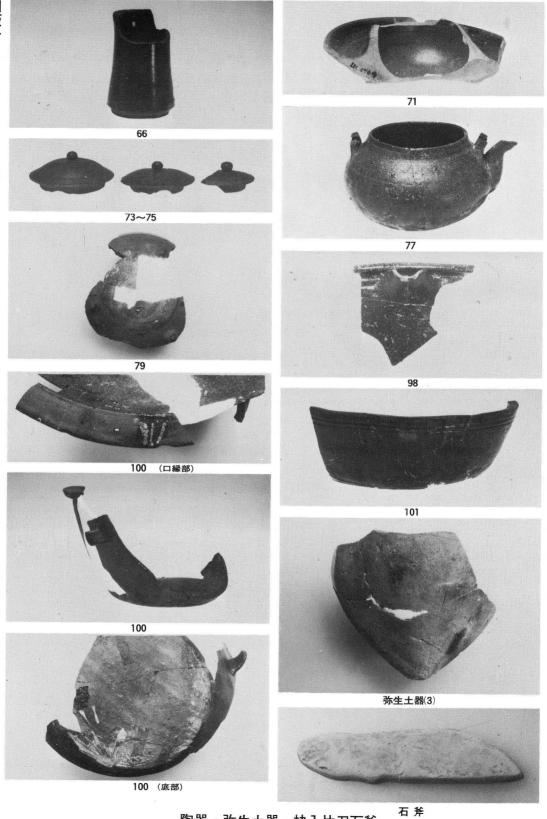
・売皿類 (外)須恵器甕・布痕土器



陶磁器







陶器・弥生土器・抉入片刃石斧

小木原遺跡群蕨地区 (A·B地区)

- 1. 本報告では次のとおり略記号を用いている。
 - SI···板石積石室墓、SK···土壙墓、ST···地下式横穴墓、SX···竪穴状遺構 SB···掘立柱建物跡。
 - また、板石積石室墓、土壙墓、地下式横穴墓の号数について下記のように区別した。 1~土壙墓、101~板石積石室墓、1001~地下式横穴墓(A地区)、2001~地下式横穴 墓(B地区)
- 2. 概要報告で使用した遺構番号(仮番号)については本報告において正式番号に変更した。 なお、正式番号と仮番号の対照については遺構一覧表に記載している。
- 3. 方位は磁化を示す。

本文目次

	123
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	123
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	127
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	130
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	130
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	130
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	136
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	147
	181
	240
	240
	249
	253
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	253
	262
	262
	262
	273
	273
	273
	273
	273
	273
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	274
目 次	
第14回	S I 106 遺構実測図 144
	S I 100 遗構実測図 145
	S I 108 遺構実測図 146
	A地区土壙墓分布図 ······· 149~150
	S K 1 · S K 2 遺構実測図 ······ 152
	S K 3 · S K 4 遺構実測図 ······ 153
	S K 5 · S K 6 遺構実測図 ······ 154
	S K 7 · S K 8 遺構実測図 · · · · · · 155
	S K 9 · S K 10遺構実測図 ······· 156
	S K11 · S K12遺構実測図 · · · · · · 157
第24図	S K13·S K14遺構実測図 ······· 158
第25図	S K15 · S K16遺構実測図 ······ 159
第26図	S K17・S K18遺構実測図 160
	目 次 第14図 第15回 第18図 第18図 第22図 第22図 第23図 第24図 第25図

第27図	S K 19 · S K 20遺構実測図 ······ 161	第68図	S T 1025遺構実測図 206
第28図	S K 21 · S K 22遺構実測図 · · · · · · 162	第69図	S T 1026遺構実測図 207
第29図	S K23 · S K24遺構実測図 · · · · · · 163	第70図	B地区地下式横穴墓分布図·209~210
第30図	S K 25 · S K 26遺構実測図 · · · · · · 164	第71図	S T 2001遺構実測図 213
第31図	S K27 · S K28遺構実測図 · · · · · · 165	第72図	S T 2002遺構実測図 214
第32図	S K29·S K30遺構実測図 166	第73図	S T 2003遺構実測図 215
第33図	S K 31 · S K 32遺構実測図 ······· 167	第74図	S T 2004遺構実測図 216
第34図	S K 33 · S K 34遺構実測図 ······· 168	第75図	S T 2005遺構実測図 217
第35図	S K 35 · S K 36遺構実測図 ······· 169	第76図	S T 2006遺構実測図 218
第36図	S K 37 · S K 38遺構実測図 ······· 170	第77図	S T 2007遺構実測図 219
第37図	S K 39 · S K 40遺構実測図 ······· 171	第78図	S T 2008 · S T 2011遺構実測図 · · 220
第38図	S K 41 · S K 42遺構実測図 ······· 172	第79図	S T 2009遺構実測図 221
第39図	S K43 · S K44遺構実測図 ······ 173	第80図	S T 2010遺構実測図 222
第40図	S K45・S K46遺構実測図 174	第81図	S T 2012遺構実測図 223
第41図	S K 47・S K 48遺構実測図 175	第82図	S T 2013遺構実測図 224
第42図	S K 49 · S K 53遺構実測図 ······ 176	第83図	S T 2014遺構実測図 225
第43図	S K 50·S K 51·S K 52遺構実測図·177	第84図	S T 2015遺構実測図 226
第44図	S K 54·S K 55·S K 56遺構実測図·178	第85図	S T 2016遺構実測図 227
第45図	S K 57遺構実測図 179	第86図	S T 2017遺構実測図 228
第46図	S K 58遺構実測図 180	第87図	S T 2018遺構実測図 ······ 229
第47図	A地区地下式横穴墓分布図・183~184	第88図	S T 2019遺構実測図 230
第48図	S T 1001 · S T 1002遺構実測図 · · 186	第89図	S T 2020遺構実測図 231
第49図	S T 1003 · S T 1004遺構実測図 · · 187	第90図	S T 2021 · S T 2022遺構実測図 · · 232
第50図	S T1005・S T1006遺構実測図 ・ 188	第91図	S T 2023遺構実測図 ····· 233
第51図	S T 1007 · S T 1008遺構実測図 · · 189	第92図	S T 2024遺構実測図 ····· 234
第52図	S T 1009遺構実測図 190	第93図	S T 2025遺構実測図 ······ 235
第53図	S T 1010遺構実測図 191	第94図	S T 2026遺構実測図 ······ 236
第54図	S T 1011遺構実測図 192	第95図	S T 2027遺構実測図 237
第55図	S T 1012遺構実測図 193	第96図	S T 2028遺構実測図 238
第56図	S T 1013遺構実測図 194	第97図	S T 2029遺構実測図 239
第57図	S T 1014遺構実測図 195	第98図	A地区北西遺構群土器分布図 ···· 241
第58図	S T 1015遺構実測図 196	第99図	A地区北西遺構群
第59図	S T 1016遺構実測図 197		出土土器実測図(1) 242
第60図	S T 1017遺構実測図 198	第100図	A地区北西遺構群
第61図	S T 1018遺構実測図 199		出土土器実測図(2) 243
第62図	S T 1019遺構実測図 200	第101図	A地区北西遺構群
第63図	S T 1020遺構実測図 201		出土土器実測図(3) 244
第64図	S T 1021遺構実測図 202	第102図	A地区北西遺構群
第65図	S T 1022遺構実測図 203		出土土器実測図(4) 245
第66図	S T 1023遺構実測図 204	第103図	A地区北西遺構群
第67図	S T 1024遺構実測図 ······ 205		出土土器実測図(5) 246

第104図	A地区北西遺構群	第112凶	B地区地下式横穴墓出土鉄器(4) ·· 260			
	出土土器実測図(6)247	第113図	B地区地下式横穴墓出土鉄器(5) · · 261			
第105図	A 地区北西遺構群	第114図	A地区北東遺構群遺構分布図 ···· 263			
	出土土器実測図(7) 248	第115図	A地区北西遺構群遺構分布図 ···· 264			
第106図	A地区土壙墓・板石積石室墓	第116図	SB1・SB2遺構実測図 265			
	・地下式横穴墓出土遺物 254	第117図	SB3遺構実測図266			
第107図] A地区地下式横穴墓出土鉄器 ····· 255	第118図	SB4・SB5遺構実測図 267			
第108区] A地区およびB地区地下式横穴墓	第119図				
	出土鉄器256	第120図	S X 1 · S X 2 遺構実測図 ······ 269			
第109区] B地区地下式横穴墓出土鉄器(1) ·· 257	第121図				
第110区		第122図				
第111区] B地区地下式横穴墓出土鉄器(3) ·· 259	第123図	出土土器実測図(3)272			
	表目	次				
表 1	土壙墓・板石積石室墓・		鉄鏃一覧表(2) 294			
	地下式横穴墓(I 類) 規模分布表 275		鉄鏃一覧表(3)295			
表 2	地下式横穴墓規模分布表 275	表15	鉄鏃一覧表(4) 296			
表 3	土壙墓主軸分布表 276		鉄鏃一覧表(5) 297			
表 4	地下式横穴墓主軸分布表 276		土器観察表(1) 298			
表 5	A地区板石積石室墓(SI)一覧表 · · 287		土器観察表(2) 299			
表 6	A地区土壙墓(SK)一覧表(1) ······ 287		土器観察表(3) 300			
表 7	A地区土壙墓(SK)一覧表(2) ······ 288	表20	土器観察表(4) 301			
表 8	A地区地下式横穴墓(ST)一覧表 · · 289	表21	土器観察表(5) 302			
表 9	B地区地下式横穴墓(ST)一覧表 · · 290		土師器・陶磁器観察表(1) 303			
表10	刀子・剣・刀・鉾一覧表(1) 291	表23	土師器・陶磁器観察表(2) 304			
表11	刀子・剣・刀・鉾一覧表(2) 292	表24	土師器・陶磁器観察表(3) 305			
表12	鉄鏃一覧表(1) 293	表25	土師器・陶磁器観察表(4) 306			
図版目次						
図版 1	A 地区北西遺構群遠景(南東から)・307		A地区北西遺構群北側全景 ······ 310			
	A地区北西遺構群遠景(東から) ・・ 307	図版 5	A地区北西遗構群北西側全景 ···· 311			
図版 2	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		A地区北西遺構群北東側全景 ···· 311			
	$(12 \cdot 13 - c \cdot d \boxtimes) \cdots 308$	図版 6	A地区北西遺構群東側全景 ······ 312			
	A地区北東遺構群		A地区北西遺構群東側全景 ······ 312			
	(12 · 13— e · f ⊠) ······ 308	図版 7				
図版 3			A地区北西遺構群南東側全景 ···· 313			
	周辺検出状況(南から)309	図版 8				
	A地区北西遺構群一S I 103および		A地区西遺構群北側全景 ······· 314			
	周辺検出状況(東から)309	図版 9				
図版 4		図版10				
	(SK6・SI103・SI105周辺)310	図版11				

図版12	S I 102/S I 104 ····· 318	図版39	S T 1019 / S T 1016 · · · · · 345
図版13	$S K 5 \cdot 6 / S K 1 \cdot 2 \cdot 319$	図版40	S T 1023/S T 1025 ····· 346
図版14	S K 4 / S K 6 ····· 320	図版41	B地区南遺構群遠景(南東部) ····· 347
図版15	S K 5 / S K 2 ····· 321		B地区南遺構群遠景(中央部) ···· 347
図版16	S K 7 / S K 8 322	図版42	B地区南遺構群遠景(南西部) ···· 348
図版17	S K 12 · S K 14 · · · · 323		B地区南遺構群遠景
図版18	S K 15 / S K 16 ····· 324		~A地区西遺構群遠景 ······· 348
図版19	S K17/S K19 ····· 325	図版43	S T 2001/S T 2002 ····· 349
図版20	S K 20 / S K 21 ····· 326	図版44	S T 2003/S T 2004 ····· 350
図版21	S K 22 / S K 23 ····· 327	図版45	S T 2006/S T 2009 ····· 351
図版22	S K 16 · 25 · 57/S K 24 ······ 328	図版46	S T 2008/S T 2016 ····· 352
図版23	S K 33/S K 26 ····· 329	図版47	S T 2013 / S T 2015 · · · · · 353
図版24	S K 27 / S K 28 ····· 330	図版48	S T 2005/S T 2011 ····· 354
図版25	S K 29/S K 31 ····· 331	図版49	S T 2020 / S T 2021 ····· 355
図版26	S K 34/S K 31 ····· 332	図版50	S T 2023 / S T 2024 ····· 356
図版27	S K 35 · 36 · 37 / S K 35 ······ 333	図版51	S T 2029 / S T 2025 ····· 357
図版28	S K 46/S K 38 ····· 334	図版52	鉄器(1) 358
図版29	S K 39/S K 56 ····· 335	図版53	鉄器(2) 359
図版30	S K 40 / S K 41 ····· 336	図版54	鉄器(3) 360
図版31	S K 50 / S X 1 337	図版55	鉄器(4) 361
図版32	S T 1001/S T 1002 ····· 338	図版56	鉄器(5) 362
図版33	S T 1003 (遺物検出)	図版57	鉄器(6) 363
	/S T1003(完掘) ······ 339	図版58	鉄器(7) 364
図版34	S T1004/S T1006 340	図版59	鉄器(8) 365
図版35	S T1007/S T1005 341	図版60	鉄器(9) 366
図版36	S T 1008 (遺物検出)	図版61	鉄器(10) 367
	/S T1008(完掘) ······ 342	図版62	土師器(1) 368
図版37	S T 1009 / S T 1009 · · · · · 343	図版63	土師器(2)・石鍋369
図版38	S T 1010/S T 1014 ····· 344		

第1章 発堀調査の概要

第1節 遺跡の概観

位置

小木原遺跡群は、宮崎県えびの市大字上江字小木原、族、久見迫、馬頭、長谷川、地主原、宮原、鳥越にまたがって所在する。JR吉都線上江駅の西方約1kmに位置し、遺跡の南側が 九州縦貫道に接する。遺跡を東西に県道京町小原線が通る。

立地

川内川左岸には、その支流である池島川とに挟まれた標高260m~270mの中位段丘が西は池島、東は観音原、北は五日市におよぶ広大な範囲に広がっており、上江・原田遺跡群となっている。小木原遺跡群はこの段丘の西端に位置し、東側に開析谷が深く逐り込みやや突出した立地を呈している。小木原遺跡群の北方下段には永田原遺跡や口ノ坪遺跡の立地する標高240m前後の低位段丘が形成されており、その下段には川内川両岸に広がる標高230~240mの洪積平野となる。

歷史的環境

群内には、県指定史跡の飯野古墳をはじめとして、小木原地下式横穴墓(小木原支群)、 久見迫地下式横穴墓(久見迫支群)、馬頭地下式横穴墓(馬頭支群)などの地下式横穴墓が 数多く分布しており、これらを総して小木原地下式横穴墓群を呼んでいる。九州縦貫道宮崎 自動車道建設に伴って44年、47年、49年に久見迫支群10基、小木原支群 7 基、馬頭支群14基 が調査されている。その概要は、小木原支群では、墳丘を持つ地下式横穴墓で仿製献形鏡が 出土した小木原古墳(44年調査)、横引板鋲留短甲と横引板鋲留衝角付冑を持つ1号地下式横 穴墓(44年調査)、横引板鋲留短甲、馬鐸、轡などを出土した3号地下式横穴墓が見られ注 目される。また、地下式横穴墓分布の特徴としては、小木原支群では竪坑上部閉塞と羨道閉 塞が共存するのに対して、久見迫支群と馬頭支群では羨道閉塞の地下式横穴墓のみの分布で ある。なお、蕨地区周辺では昭和40年代の砂利採取作業によって破壊されていく地下式横穴 墓を木崎原操氏は精力的な踏査・記録によって313基を確認し、分布図を作成している。

その後の調査としては、今回(昭和62年度)の蕨地区(A地区・B地区)の調査、さらに、 昭和63年度に62年調査区の南側(蕨C地区)と久見迫地区(昭和44年調査区の東側)の調査 がある。

現況

調査区周辺は水田や畑地がひろがる一帯で標高254m~255mとほぼ平坦地である。しかし、丘陵端を中心に砂利採集による土取りが行われており、2~3m削平された箇所が虫食い的に見られる。調査区の北から東にかけてもほとんど削平されており、この地点では木崎原氏によって100基を超える地下式横穴基が確認されている。調査区の西には県史跡飯野古墳が所在する竹林が有り原状を留どめている。さらにその西側も土取りが行われており100基を超す地下式横穴墓が確認されており、小木原支群は西南端の縦貫道周辺に分布する。一方、調査区の南は県道京町小林線に隣接しており水田地帯が広がる。久見迫支群と馬頭支群の地

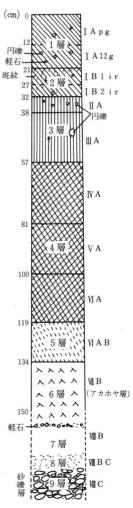
層位

A地区内の水田部での基本土層は下記のとおりである。

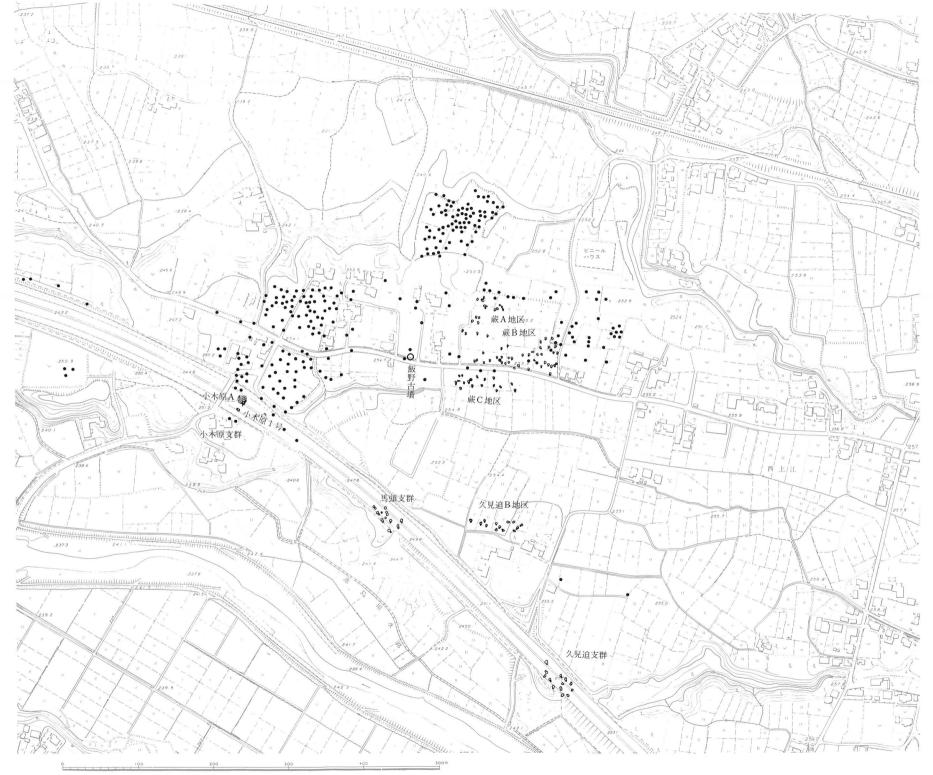
1層 黒色(10YR2/1)土層~耕作土。 小円礫や軽石小粒を含み、砂質を帯びる。

下式横穴墓はその南端の縦貫道周辺に分布する。

- 2 層 黒色 (7.5Y R 2/1) 土層〜小円礫や軽 石小粒を含む。上位は砂質を帯びる。 (埋没表層)
- 3層 黒色 (7.5Y R1.7~1.9/1) 土層~円 礫を含まみ、粘りけを持つ。 (〃)
- 4層 黒色(N1.5(YR)0)土層〜円礫などは 含まず、粘りけを持つ。下位に成る程、 軟質を帯びる。(/)
- 5層 黒褐色 (7.5Y R 2/2) 土層~硬質で粘 りけを持つ。
- 6層 明褐色 (7.5Y R 5/8) 土層~アカホヤ 火山灰層、下部に軽石粒が層を成す。
- 7層 褐色 (7.5Y R 4/3) 土層〜硬質で粘り けを持つ。
- 8 層 褐色 (7.5 Y R 4/4) 土層〜軟質で小円 礫を多く含む。
- 9層 鈍い黄褐色 (10YR6/3) 土層〜大小の 円礫や砂から成る砂礫層。



第1図 基本土層図



第2図 遺跡周辺地形図(ドットは地下式横穴墓等の分布を示す)

第2節 調査の経過

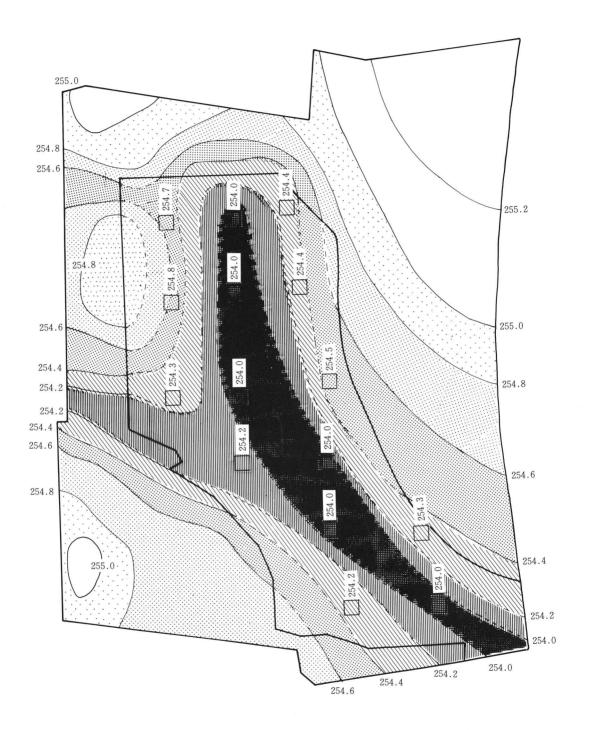
発掘調査は、当初、調査面積約11,000㎡のうち、調査区北側と東側の畑地約2,000㎡から開始した(A地区)。開始時に行った試堀により、包含層までの厚さが40~100㎝あることから重機による表土剝ぎをおこなった。その結果、西側の約400㎡の範囲から土壙墓、板石積石室墓、地下式横穴墓等が検出され、板石積石室墓や土壙墓の周辺から古墳時代前期の土器片が多く出土した。また、糸切り皿や青磁皿の破片を伴う柱穴や溝が西側と東側の調査区で検出された。東側の調査区では堀立柱建物跡を4棟検出した。

残りの水田部分については稲刈りが遅れたため11月下旬に試堀調査を行い、本格的な調査に入ったのは重機による表土剝ぎが終了した12月初旬であった。試堀調査の結果、調査区中央部で包含層までの深さが100~140cmと黒色土が比較的深く堆積した場所(小さな谷地形)が調査区の南西から北東方向にかけて延びていたため、重機で工事の堀削深度まで剝いだ段階で遺構・遺物の検出されなかった約4,000㎡については調査区から除外した。水田部分の調査では、土壙墓等を検出した西側の区域は更に南側に広がりを見せ最終的には約1,000㎡の範囲から土壙墓58基、板石積石室墓8基、地下式横穴墓26基が密集して検出された。更にその南側と水路部分からは地下式横穴墓8基が検出された。さらに中央部微低地より南側の約4,000㎡の範囲からは、地下式横穴墓43基が検出された。

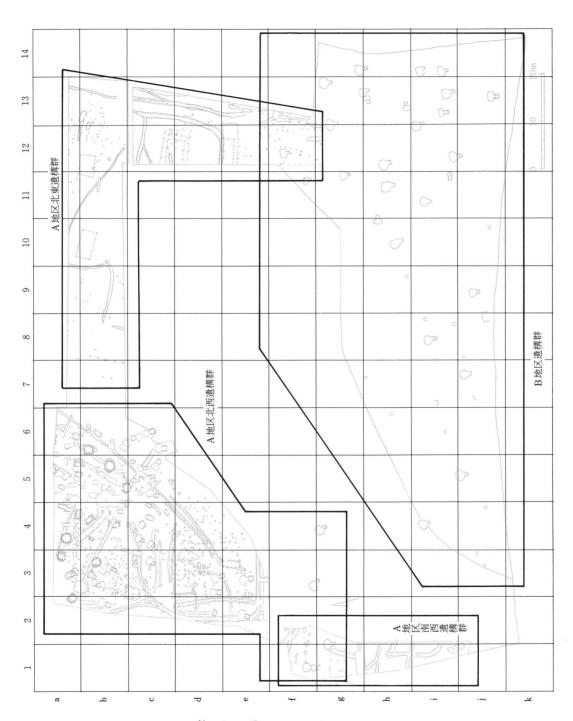
遺物は、前述の土器類のほかに副葬品として土壙墓からは鉄鏃・鉄剣・管玉・紡錘車、板石積石室墓からは鉄鏃、地下式横穴墓からは鉄剣・刀子・鉄鉾・鉄鏃などが出土した。また、中世の柱穴群や溝も調査区のほぼ全域で確認され土師皿・陶磁器・石鍋などが出土した。

なお、B地区で検出された地下式横穴墓は、検出時に重機によって天井が崩壊したもの、 天井が原存していたもの、以前から天井が陥没し玄室内に黒色土が充満していたものなどの 状況であった。そのため工事の堀削深度から検討し、アカホヤ層面まで堀削工事をする東側 については、検出された地下式横穴墓の総てを調査した。しかし、西側についてはアカホヤ 層上位の黒色土までしか堀削工事をしないことから、重機によって天井部が崩壊したものと 天井が原存しているものについて調査を行い、既に天井が陥没して玄室全体に黒色土が充満 している14基については、工事や耕作によって遺構に及ぼす影響は殆どないと考えられるた め調査は行わずに現状で保存することとした。発堀調査は、昭和62年9月7日から翌年1月 29日まで約5ヵ月間にも及んだ。

調査区の中央に南西から北東方向に斜めに窪地(小さな谷地形)が入り込んでいる。これ



第3図 調査区内等高線図(破線部は推定線)



第4図 グリッド・遺構群配置図

は、池島川から小木原遺跡群中央に北東に入る開析谷によって形成されたものと思われる。 この窪地は深いところで地表面から1~1.5m ある。窪地を挟んで両側の微高地に遺構が分布 する。遺構の検出地点では耕作土と埋没表層を剝ぐと直ちにアカホヤ火山灰層となり遺構も 上部がかなり削平された状態で検出された。

なお、遺構の構築状況は、いずれもアカホヤ火山灰層上層の黒色土を掘り込み上部としていると思われるが、各墓制の床面は、土壙墓がアカホヤ火山層 (6層)下層の7層上位から下位にかけて、板石積石室が7層下位に築かれている。また、地下式横穴墓では、横口系の閉塞タイプが7層下位、羨門部の関塞タイプが7層下位から8層下位にかけて、竪坑上部閉塞のタイプでは砂礫層 (9層)上部から下位にかけて築いている傾向にある。

第2章 調査の記録

第1節 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査の主要部分と成る時期である。A地区では土壙墓、板石積石室墓、地下式横穴墓などの各墓制が、B地区では地下式横穴墓が検出された。遺物も土壙墓と板石積石室墓の周辺から多量の土師器が出土したのをはじめ、地下式横穴墓や土壙墓などから多量の鉄器が副葬品として出土している。

1. 遺構

古墳時代の遺構には特徴的な分布がみられる。

A地区北西遺構群の北側では東西40m、南北30mの範囲に土壙墓58基、板石積石室8基、横口系の竪坑をもつ地下式横穴墓などの地下式横穴墓16基が密集の状態で混在する。また、A地区北西遺構群の南側では東西25m、南北25mの範囲に羨門閉塞の地下式横穴墓5基と竪坑上部閉塞の地下式横穴幕3基が混在する。

B地区遺構群は南北50m、東西100mの範囲に羨門閉塞の地下式横穴墓6基と竪坑上部閉塞の地下式横穴墓23基が混在している。分布の傾向としては遺構群の東側では羨門閉塞と竪坑上部閉塞の地下式横穴墓が見られるが、西側では竪坑上部閉塞の地下式横穴墓のみが分布する。羨門閉塞はまったく見られない。



第5図 遺構配置図



第6図 古墳時代遺構分布図